大正六年九月十四日　（第三種郵便物認可）
大正十五年十一月一日發行（每月一回一日發行）

建築と社會

（第九輯第十一號）



第九輯
第十一號

日本建築協會
大正十五年十一月一日

THE OTANI LIGHT SAFE

大谷製 輕量金庫

本金庫は重量普通金庫の約五分の一にして内容積も又比較的廣く而かも防火裝置完備し居れるを以て高層ビルデイング用其他防火設備なき階上等に設置するに最も格好のものなり。



諸官署
諸銀行
諸會社
御用

大阪市東區淀屋橋筋道修町北入

大谷金庫店

電話本局三九三四番
東京京都神戸

（カタログ進呈）

日米板硝子株式會社

本社　大阪市北區中之島二丁目
（江商ビルディング四階）

工場　九州若松市外二島（鐵道省指定工場）

大阪販賣店　本社内

東京販賣店　東京市丸之内ビルデング七階

九州販賣店　門司市大毎ビルデング三階

製品解說

製造方法　世界最新コールボーン式自働連續板狀伸延製造法ト稱シ幅六呎ノ板硝子ヲ長サ無限ニ連續製出ス

特徵　精密ナル機械ノ標準ト硬化作用ニヨリ板面ハ反リ歪ミ無ク厚サ整等ニシテ質强靱ナルヲ以テ破損ノ處少シ

厚味　二十四オンス品　並板（十六オンス）ニ比シ二倍ノ破壞强度及耐久力ヲ有スルヲ以テ學校病院工場會堂ビルディング等ノ高級建築及シヨウウインドウ用トシテ最適品ナリ

三十四オンス品　汽車電車等ノ窓硝子トシテ賞用セラル

加工品　摺　結霜　春霞

和洋建築窓、家具等ニ使用シテ頗ル優美ナリ



口繪一　朝日會館
▼外觀　▼公演場　▼公演場舞臺
▼舞臺天井の詳細　▼各階の平面圖

▼感激無き國民……（一）
▼耐震構造上の諸說（上）……佐野利器…（二）
▼都市計畫の問題……渡邊鐵藏…（三）
▼道路と住宅……楠原祖一郎…（三一）
▼不良住宅區改良法要綱を見て……伊藤俊雄…（三七）
▼人間の都市……藤田進一郎…（四〇）
▼朝日會館……中尾保…（四四）
▼五十年前の米國建築界（二）……葛野壯一郎…（四八）
▼うき世繪と其時代の劇場……池田谷久吉…（五三）



輯第拾壹號目次

▼米國の小住宅に使用せる家具の種類及價格の割合……樋口辰太郎（九）

◇◇◇

十人十色（二）

▼リツチ（嬢と結婚した）上野伊三郎氏……丁N生（二〇）

女性と建築（二）

▼女性中心の建築及環境について……平田春江（二三）

▼秋の夜を罩めて

摩天閣上に展開された近來稀なる大歡境……江村恒一（二七）

◇◇◇

附錄

市街地建築物法施行細則の解拆（一）……津田敏雄

◇◇◇

▼朝日會館工事概要……（二六）

▼俳壇　稻・秋の雨……齋藤溪舟選（二一）

▼俳話自談雜談……溪舟（二二）

◇◇◇

▼日本建築協會々報……

新華之料材「壁」



専賣特許

アサダセメント、プラスター

特長
- ○施工迅速　○色澤高尚
- ○安全堅固　○工費低廉
- ○耐濕耐火　○防錆防腐



専賣特許

アサダ・白色ポートランド・セメント

特長
- ○高尚ナル純白色
- ○強力甚大、膨脹龜裂ノ虞ナシ
- ○緩結性ニシテ使用容易
- ○凡テノ性狀普通「セメント」同等以上

御試用乞

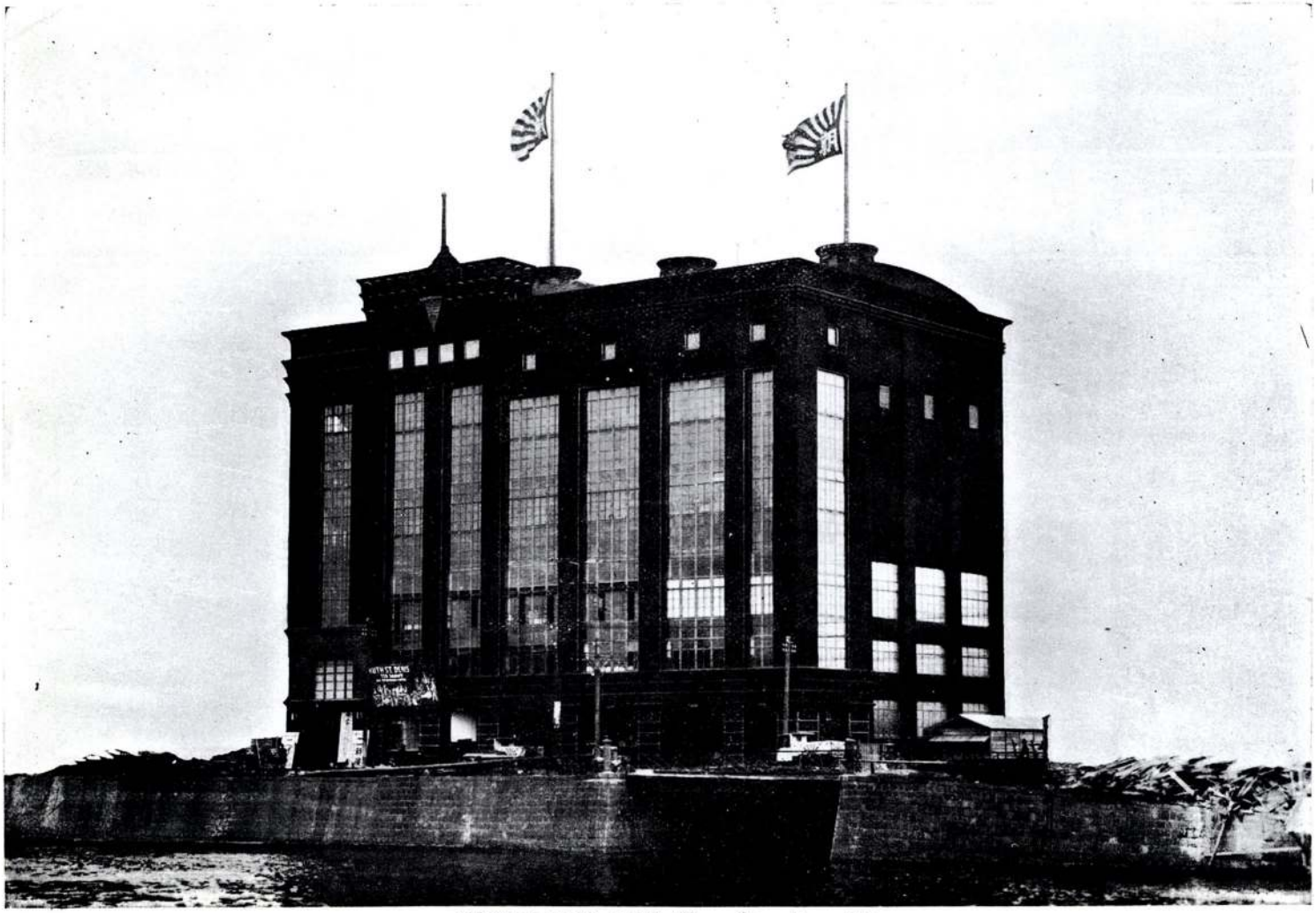
兵庫縣飾磨港

飾磨化學工業株式會社

東京販賣所　東京市日本橋區本町三丁目山口ビルヂング五階　建興社

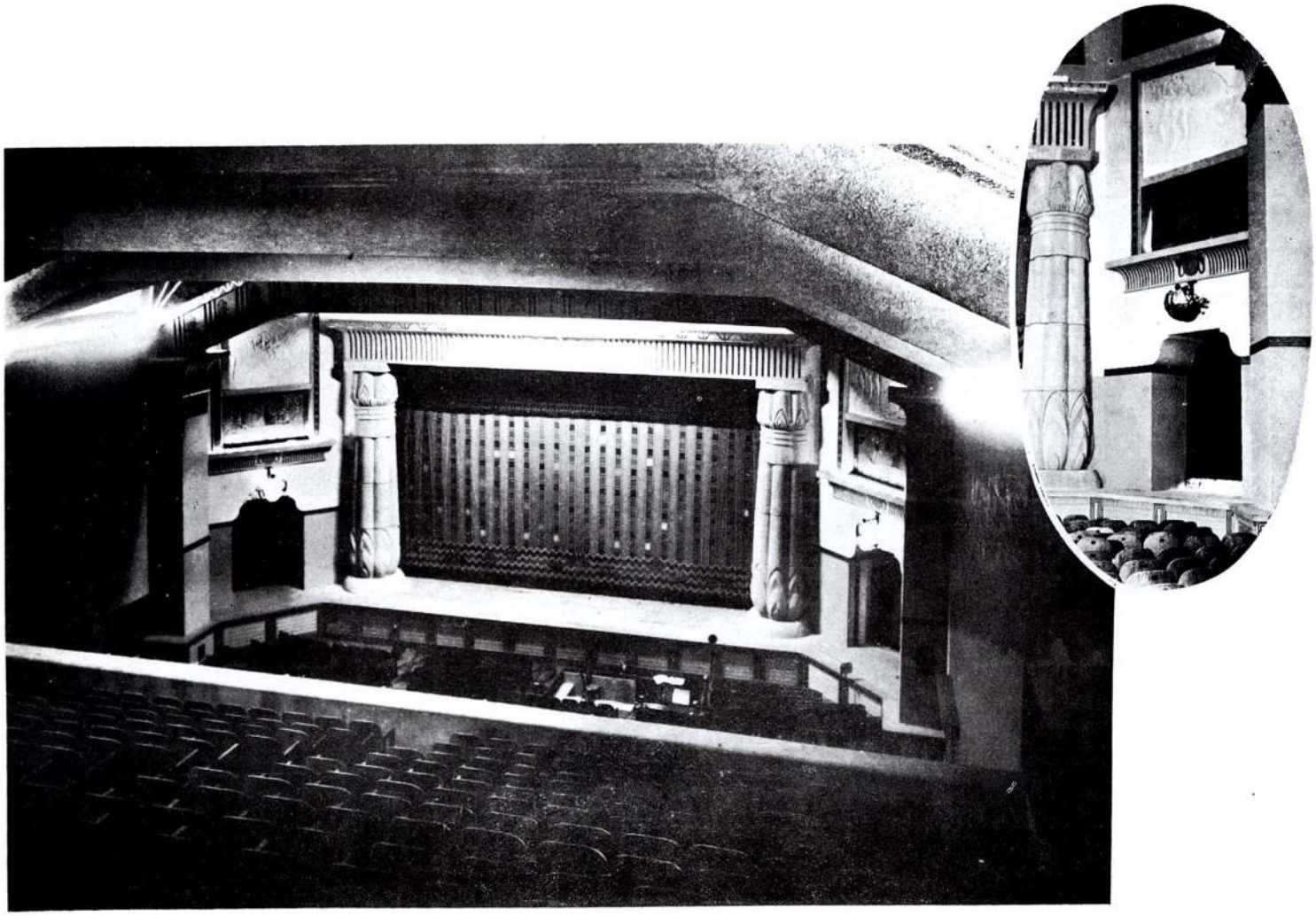
電話飾磨（六一〇六）一番

電話大手（自九七五七番至五七九番）

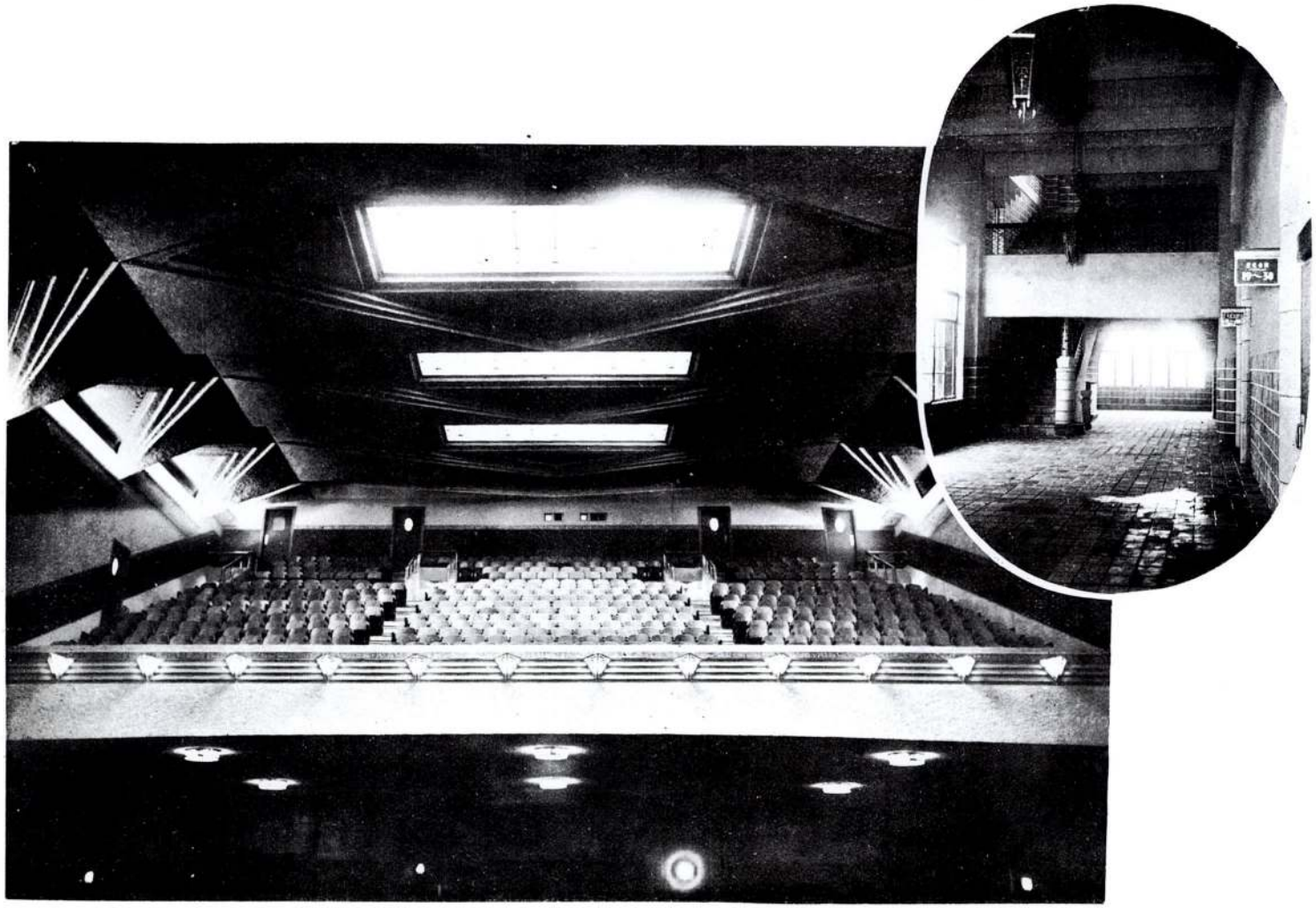


〔朝　日　會　館〕（朝日新聞社附屬）

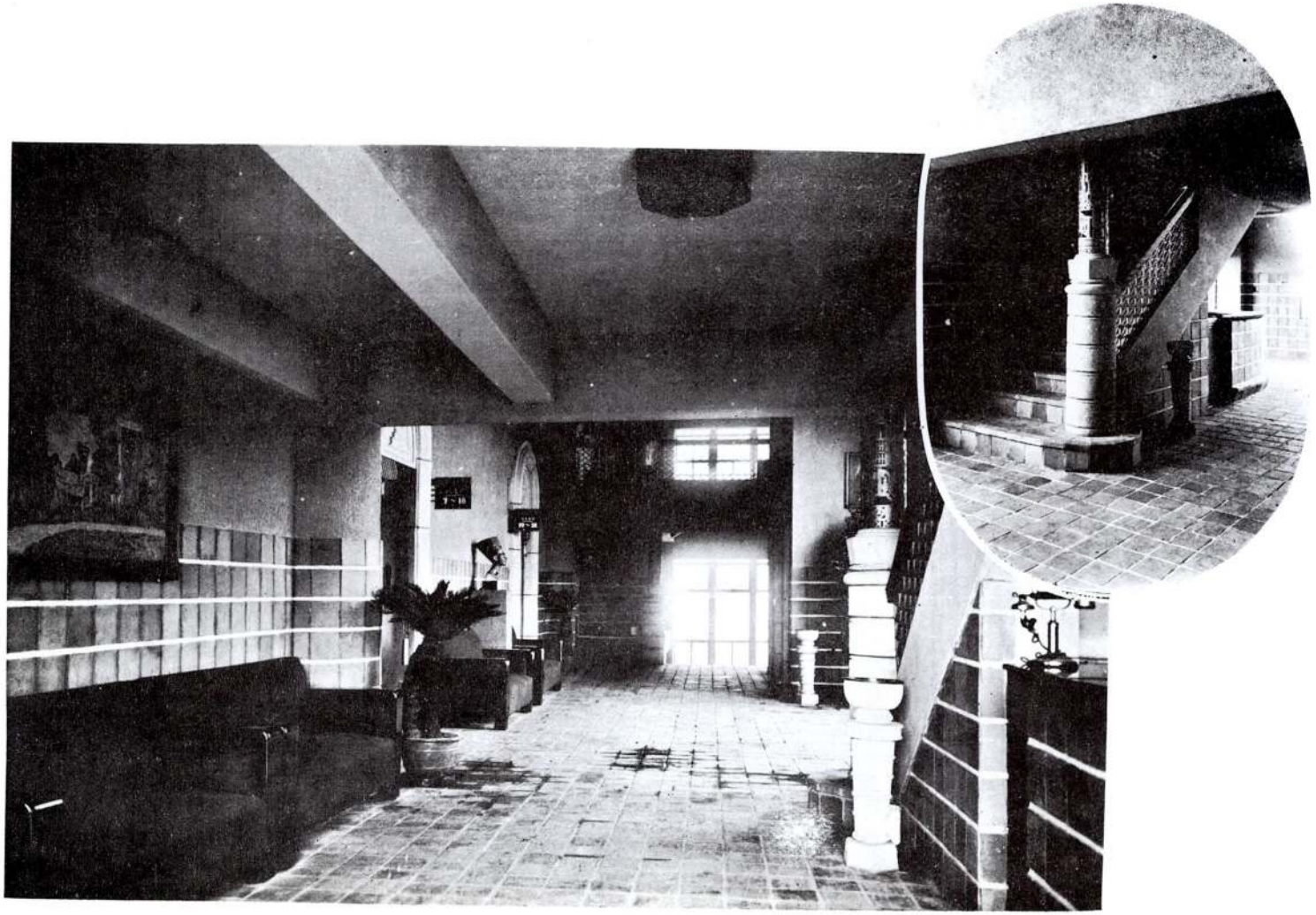
— 大阪市北區中之島二丁目 —



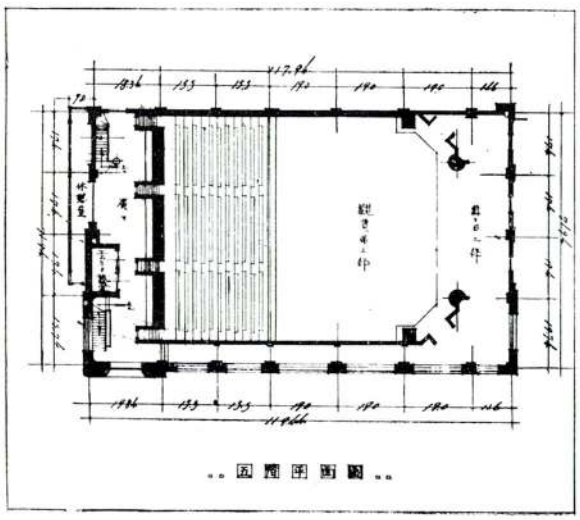
〔朝日會館〕公演場舞臺と（左）パピラスの柱（右）



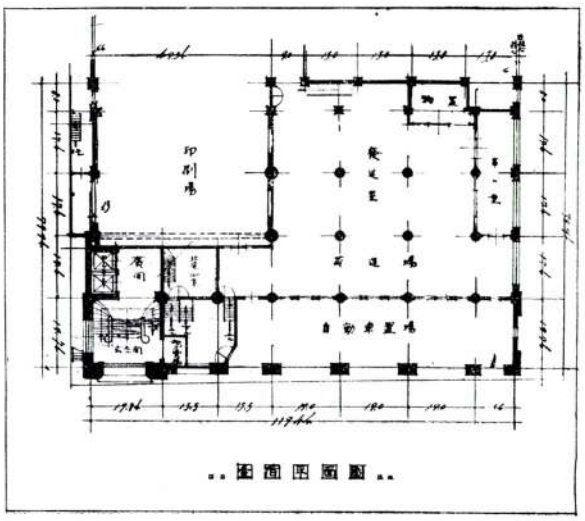
〔朝日會館〕の公演劇場舞臺天井詳細（左）と公演劇場入口の歩廊（右）



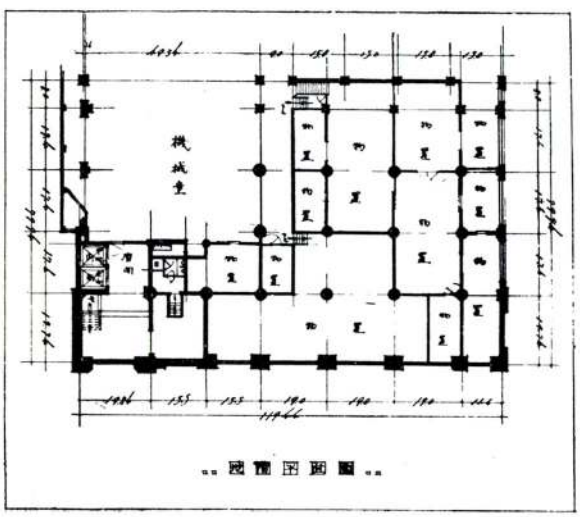
朝日會館の歩廊と階段



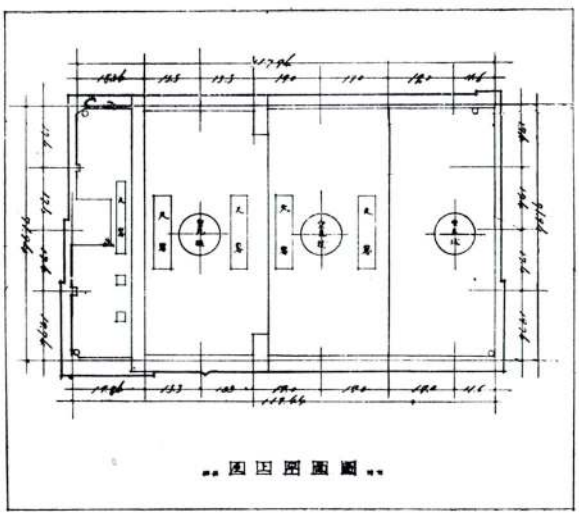
五層平面圖



四層平面圖

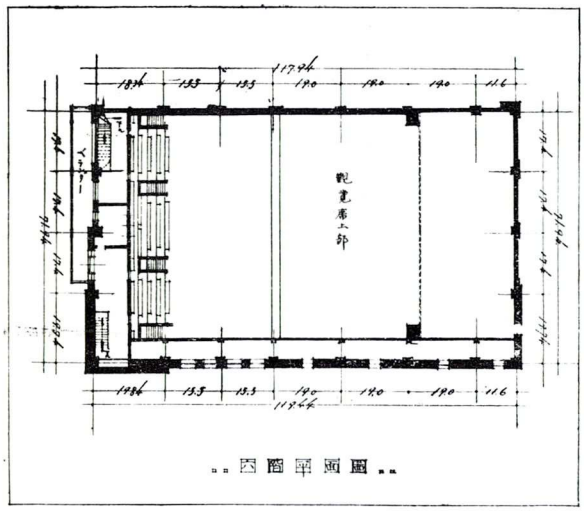


三層平面圖

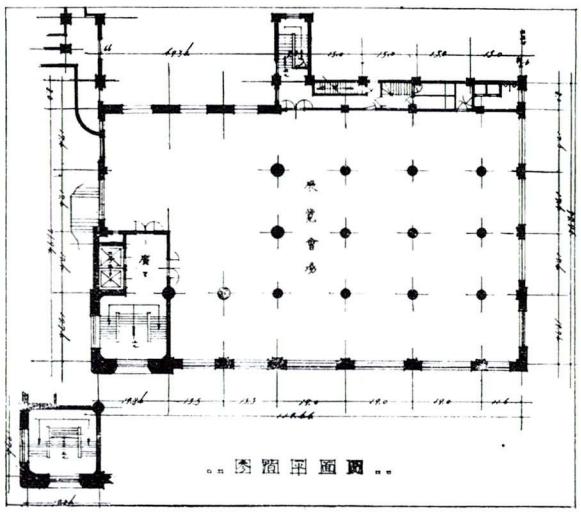


二層平面圖

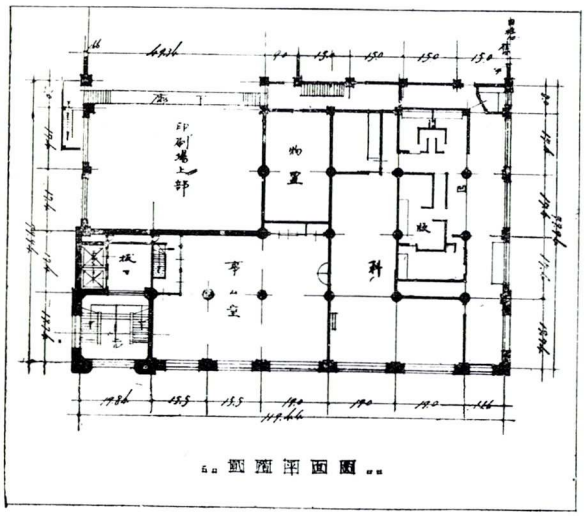
朝日會館



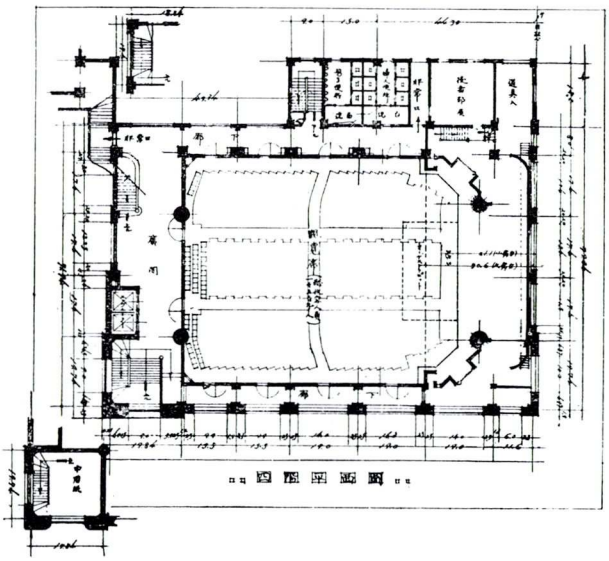
四階平面図



三階平面図



二階平面図



一階平面図

朝日会館

會　告

社團法人設立許可の件

豫て申請中でありました社團法人設立の件は今回左の通許可されましたから御知らせ致します

大正十五年十月

日本建築協會

指令

收社第一二三二號

京都府紀伊郡堀内村大字堀内字松平筑前貳拾番地ノ壹

設立者總代　片岡安

大正十四年十月十日社團法人日本建築協會設立ノ件許可ス

大正十五年十月二十日

内務大臣　濱口雄幸　印



感激なき國民

またも太平洋中に一大激震が起つたとは、つい先頃のニュースであつた。若も是れが陸地であつたならば恐らく往年の大震災以上の慘害を生じたであらうことであつた。その他、茲一二ケ月以來、世界の各所に於ても可成りな震害を生じた。日本も往年二度の震災に續いて、またも斯る脅威に直面した。そして、先月大阪で行はれたエヤア・ディスプレーは、大阪市民——いや日本の人達に——都市防備の赤裸であることを、事實を以て示した。地上より射撃などの殆んど兒戯にも等しい消極防備？よりも、寧ろ都市建築の革命的改造に對する重大な暗示を與へた。——併し、日本國民の、日本都市民の、日本建築家の感激は果してどんなものであらうか、その反響は何ものに具現されたであううか、不幸にしてまだ何事も聞かない、何ものをも見ない。感激の無き都市は、市民は、國民は、その趣く處の何んであるかを、歷史は明に物語つてゐる。（江村）



耐震構造上の諸說（上）

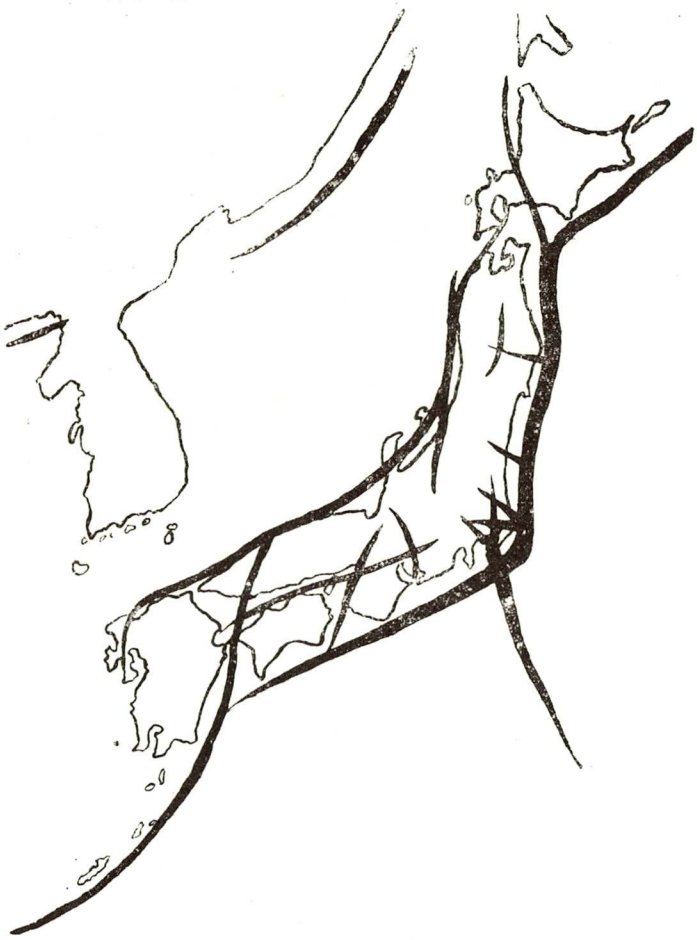
佐野利器

本編は、過般、建築學會主催の講習會に於て講述されたのを筆記したるものにして、博士の許諾を得て此處に掲載することゝせり。但し文章上の責任は編者に在り。（編輯者）

申すまでもなく日本は世界に於て最も著しい地震國であります。他に比較になる國は無い程であります。昔から災害を被ることが非常に多いのでありまして、民族的に吾々は、地震と云ふものに就ては、恐るべき事であると云ふことは頭に滲込んで居る。震災豫防調査會が編纂しました『大日本地震資料』と云ふものがあります。それに依りましても、非常な災害として記錄に遺つて居るものは今日迄約三千回。併しそれは記錄に遺つて居るだけでありまして、偏陬の地で、記錄に擧げてなかつた地震をそゞくり加へることが出來たら何千回であるかを知らなかつたであらうと思ふ。德川開府以來今日迄約三百五十年、其の間に家屋の壞滅したものがどれ位あるかと申しまするに、恐らく百万戸に垂んとするものであるやうに考へられます。之に附隨しまして、直接間接に日本の被つて居る損害は、實に大きなものと云はなければなりませぬ。

そこで日本の建築構造に、よく耐震的とか耐火的とか云ひまするが、吾々の國土の性質から考へまして、建築構造に、恰も耐風的とか耐雨的とか云ふものと同じ程度に於て、總て耐震的でなければならない筈のものであります。耐火的と云へば大切な事であるが、矢張今日の所、希望に屬すると云ふやうな種類のものとは――一般に云つて希望に屬する種類のもの――自ら性質が異るのであります。だから、建築構造から引出して茲に耐震構造、斯う言ふことは、少し性質上をかしい感が無いではありませぬが、併し耐震構造、之を學問として見まするとと、非常に複雜な非常に煩瑣な解り悪い事項であります。故に學問として之を引出して特に攻究もし、又其發達を特別に圖らなければならない性質を持つて居ります。故に耐震構造、斯う言ふことは、即ち學問上の便宜の分類である。斯う考へ置くべきものでありませう。

日本之地震帶　（第一圖）



耐震構造の學問は、即ち將來の地震を思ふ時に、家屋はどう云ふ工合に造られなければならないか、と云ふ事に關する學問であります。如何に造られねばならないか、造られた家屋に對する地震の作用の研究、是は手段である。如何に造られねばならないかと云ふ研究、之に就きましては、吾々の先輩たる澤山の理學者、工學者、殊に亡くなられた大森先生に依つて、色々の指針が與へられて居る。其中に於ても大森先生は、地震とか耐震とか云ふ學問に關しては全然暗黑であつたと云ふやうな所に向つて、大小色々様々の光を投げられた方であります。其中、吾々として、如何に造るべきものかを攻究するものとして、最も著しい光であると考へまするものは、地震の記錄の中、地震動の中の其主要動の一番大きい加速度に、地震のインテンシテイーと云ふ名前を與へて、さうして之を以て破壞作用を測るの標準とせられた。此事は吾々として最も著しいお庇を蒙つた點と考へます。

吾々の先輩たる石野先生、妹尾先生、中村先生、其他現會長の横河先生等が、耐震構造上にも諸考案、諸工夫をせられまして、建築界を誘導せられたる功績は大なるものであると考へます。私の事を申上げまするのも聊か不遜の嫌ひがありまするが、御免を願ふと致しまして、私も亦諸先輩の教を受けまして、主要動の最大加速度と地球重力の角度との比、之に向つて震度と云ふ名前を附けまして、0.1とか0.2又は二割とか三割とか云ふやうな數字を致しまして、之を以て殆ど唯一の基準として家屋構造の色々の手法を研究したのでありますさうして大正四年に『家屋耐震構造論』と云ふものを發表致しまして、一應——洵に是は一應であります——此耐震構造學の、不束ながら統一を圖つたのであります。其後内藤博士が出でられまして、家屋構造中矩形架構の事に關して更に非常に貢献をせられたのであります。其前になりますが、大正八年及び九年に物部博士が、高い構造物、塔とか煙突と云ふやうな高い構造物の震度の事を研究せられまして發表されたのであります。

私共未だ物部博士の研究に對しては敬意を表するの暇なかつた時分に、大正十二年に所謂大慘劇の襲來を受けたのであります。突然十數萬の生命を失ひまするし、十數萬戸の家屋を灰燼に歸しまするし七十億圓の財貨を失ふやうな慘害に遭つたのであります。世界を通じての、所謂有史以來千古未曾有の慘害を此時に被つたのであります。建築に從事する者、誰と云はず、皆著しいショックを受けた譯であります。實に或る者は、自分の作物の慘害を見て、地に俯して土を噛んで號叫する人もあつたのであります。又或る者は、過去を呪つて將來に自分の技術を棄てようとした人もある。又人に依つては、唯今日は救濟である、復興が今日としては唯一の義務であると考へて此に走つた者もあるのであります。

誰でもに對して非常なショックであり、同時に非常な教訓であつた、實物教授であつた。建築界は、實に此實物教授、之を等閑に附すべきでは固よりなかつた。震災豫防調査會、警視廳、或は内務省、各學校、學會、協會、個人も固より、總て擧つて震災の調査研究を怠らなかつたのであります。是が爲に、當然の結果でありさうなければならぬことでありまするが、建築界は、大勢として、耐震構造に關する觀念の上に一大進歩を見たものと信ずるのであります。特に又、新に耐震構造に關する色々な研究の發表があるやうになつた。即ち先づ末廣工學博士が『振動論』を發表せられた。即ち此學會に於て、此席に於て末廣博士は、物部博士と共に豫てから耐震構造は動力學的に之を攻究すべきもので、靜力學的に之を取扱ふべきものでない、斯う云ふ説を懷いて居られたのであります。地震後に於ても卒先して、所謂ダイナミカルソリユーションの發表があつたのであります。次で眞島工學博士物部博士、東福寺氏　水原氏、谷口氏、武藤氏其他陸續として振動論が現れて、耐震構造の學に華々しい進歩發達を見ようとして參つたのであります。是は斯道の爲め、國家の爲め洵に慶賀に堪へない次第でありまして、研究者諸君に向つて私も厚く感謝の意を表する次第であります。

以上列擧しました諸の人達の御研究の中には、唯私としては未だ十分に其指示せられた所を守るだけに呑込み得ざるものは尠くない。振動論をせらるゝに際しまして、從來の方法

は間違つて居る、斯うせられて居る人々も相當ある。が併し新らしき研究に對して完全だと認むるまでに行つて居ない憾みがあります。私は敢て自ら顧みずに　是等諸君の貴重な諸説を紹介して、忌憚なき意見も加へて述べたいと思ふのであります。學術の進歩發達を希ふ上のことでありますから、失禮があつたら——あつたらではない、あるであらうと考へますが——豫め御容赦を願つて置かなければならないのであります。

そこで第一に順序として、所謂從來の方法と云ふものを說明して掛る必要があると思ひます。

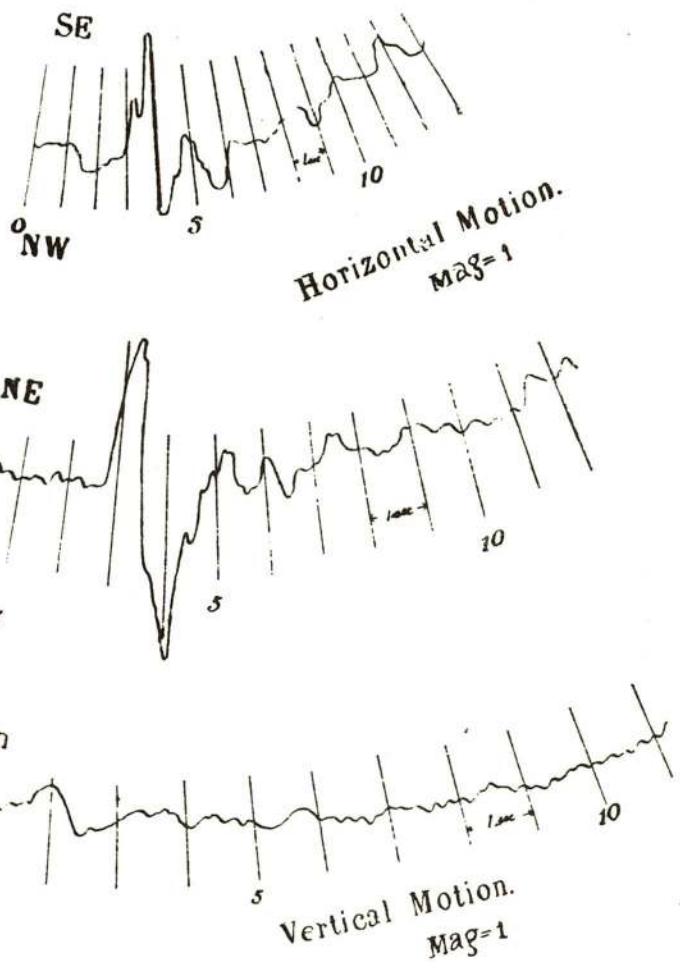
此從來の方法と云つて見た所で、人に依つて必ずしも考が一致して居る譯ではないけれども、是から先の事を說明する爲には、先づ取敢へず私自身の從來執り來つた方法、之を申上げるならば、大凡所謂從來の方法と云ふものに當りはせぬかと思ふ。そこで其最も主要な方法、所謂考へ方の根抵に關して說明しようと思ふのであります。

一體地震其もの、之を吾々がどう豫期して宜しいか。今こゝに家を造らうとする時の實際問題として、どう云ふ地震を豫期して宜しいか。此考が必要でありそれを得たいのでありますが、併し地震は震源の位置が遠いこともあらうし、近いこともあらう、震源の範圍が、或は面積であることもあらうし、或は線であることもあらうし、其亦勢力が、大きいこともあらうし小さいこともあらう。それから震れ方の格好、それが色々樣々であらう。是等に關して豫期することは遺憾ながら出來ない。どう云ふ格好である、どう云ふ大きさであるどう云ふ强さであると云ふ事は、之を豫期することは遺憾ながら出來ない。唯どう云ふものか知らぬが、從來搖れると云ふ事だけが明かに分つて居るだけであります。

第一圖日本三地震帶の圖を御覽を願ひます。是は中村左衛門太郎君の地震の本から拔いたものでありまして、日本の地圖の横なりにある線は今日大きな地震帶と考へられて居る其主なるものであります。此中には又無數に小さいものが考へられなければならない。御承知の通りに、日本全國が、所謂地震帶の網の目で圍まれて居るのでありますが、其地震の搖れ方に就て、先づ第二圖に就て說明を申上げまするに、明治二十七年六月二十日にあつた地震でありまして、震源地は東京灣であります。此記錄は大學の地震學教室の記錄であります。左の方から地震が始まつて來るのでありますが、初期微動が三秒あつてから所謂主要動に入つて居ります。この一區劃は一秒になつて居ります。上はSEからNWの水平の方向、眞中のはNEからSWの水平の方向、下は初期動。之を組合せた實動が最大の所で七十三ミリ、其週期が一・八秒、この一・八秒なる數字を御記憶置きを願ひます。斯の通りの不規則なる搖れ方をして居る。ピク〳〵と搖れて後の搖れ方の工合がスムースでない所に御注意を願ひたい。第三圖、大正十一年四月二十六日丸ビルに損傷を與へた地震であります。是は矢張地震學教室の記錄でありますが、上は南北、中は東西の方向の水平動、下は初期動。震源地は浦賀水道、矢張東京灣の南の方で、最大水平振幅が六十一ミリ、週期が二秒であります。此數字を御記憶置きを願ひます。さうして此振動の形は、矢張不格好な、節だらけのものである事を御記憶を願ひます。次に第四圖でありますが、右の方は、大正十二年九月一日の

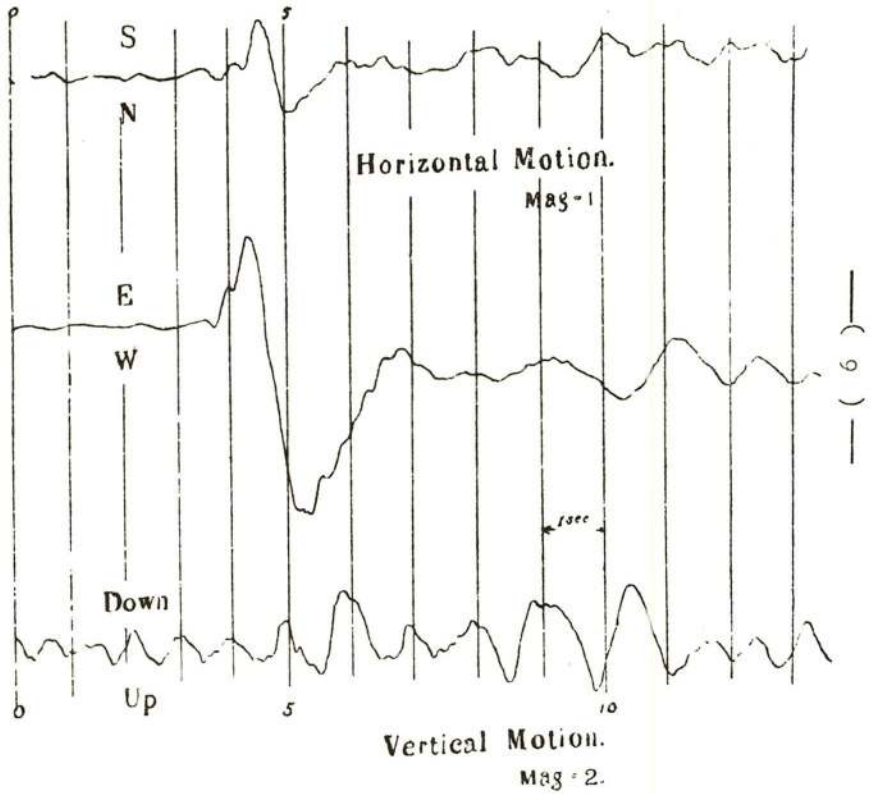
明治廿七年六月二十日强震
震源地　東京灣

(第二圖)

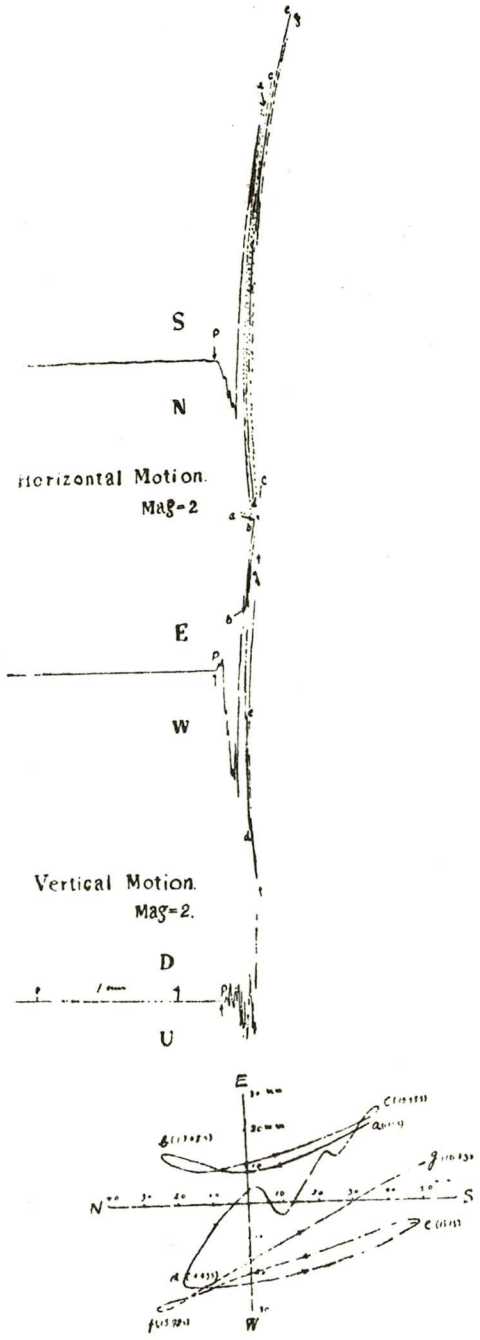


大正十一年四月廿六日强震
震源地　浦賀水道

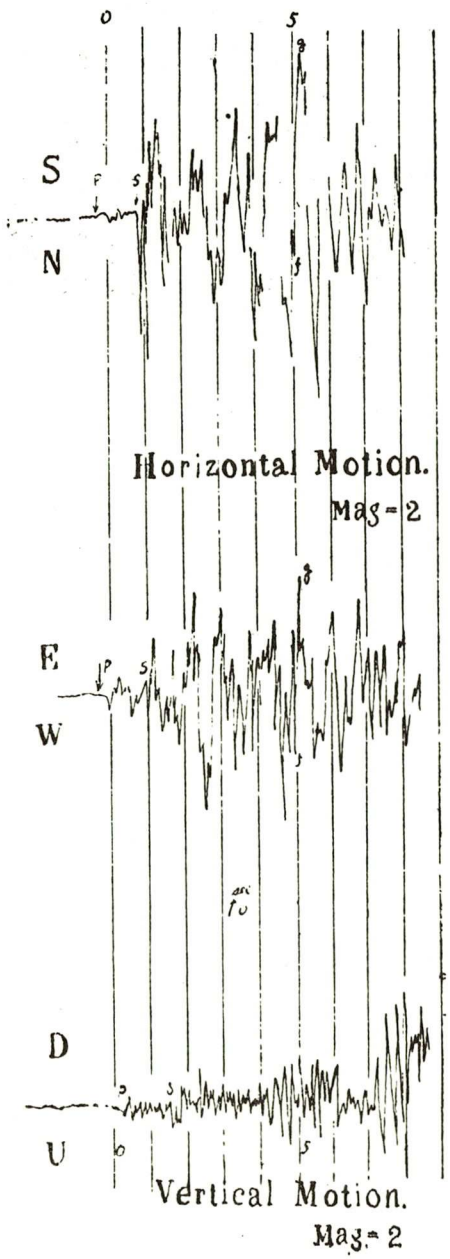
(第三圖)



（第四圖）大正十二年九月一日大地震
震源地相模灣



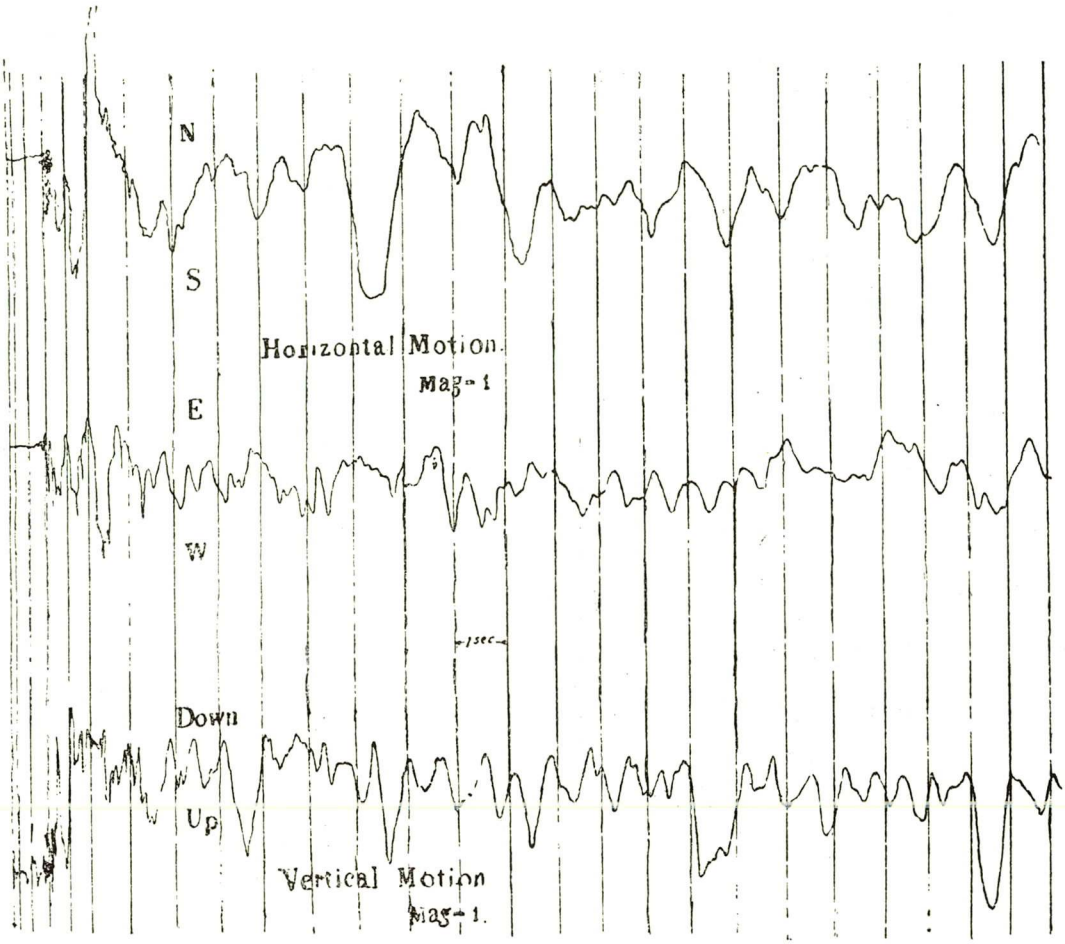
（第五圖）大正十二年九月一日餘震
震源地相模灣



所謂大震災であります。震源地は御承知の通り相模灣。此記錄はこの大學の地震學教室内の記錄でありますが、大震災の記錄としては是より外には東京には無いのであります。此通り途中で足が外れたが爲に完全はして居らない初めだけで終つて居る。此判つて居る範圍だけを、水平動を組合せたものは下の方にある圖であります。此判つて居る範圍の水平動を組合せたものでそれと、最大水平振幅が八八・六ミリ、其週期が一・三五秒。この一・三五秒も御記憶置きを願ひます。さうして此下の組合せで見ますやうに、それは前の地震でも同じことでありますが、色々樣々の方向に、矢張節のある運動をして居る。スムースなものでないと云ふことを御記憶を願ひます。それから第四圖の方は大正十二年九月一日の午後二時二十四分の地震であります。前に申した右の方のは御承知の通りに午前十一時五十八分の地震であります。

（第六圖）

大正十三年一月十五日震
震源地　相模ノ西國境



第五圖は午後二時二十四分の地震で、前の餘震でありまして震源地は矢張相模灣と云ふことであります。是は今村敎授の說に依るのでありますが、此地震は餘震でありまして、振幅も小さい。併ながらそれが同じ場所から起つて居るだけに、前の大地震の樣子を能く現して居ると云ふことであります。前の地震は正に此の大きいものであると考へ得ると云ふことであります。是は少しスケールな前のやうな引離したのとは違ひまして、グニャ〳〵して分り悪いのでありますけれども兎も角も振度は前のよりはずつと延びて居るが、其振幅も週期も不規則に色々樣々に變化して居ることに御注意を願ひます。之の最大水平振幅は二一・二ミリ、其週期は一・五秒であります。次に第六圖は、大正十三年一月十五日、即ち二度目に驚かされた時の强震でありまして、矢張大學の地震學敎室の記錄であります。震源地は相模の西國境の山地でありまして、前のとは震相が可なり異つて居る。其最大水平振幅は四十六ミリ、週期は一・八秒。此搖れ工合も色々樣々であることを御注意願ひます。

斯う云ふ工合でありまして、地震の搖れ方其ものをスチールの棒のエラスチック・ヴアイブレーションをやつた時の搖れ方と同じだと考へることは到底出來ない相談であります。シンプル・ハーモニック・モウションを綺麗にして居るものとは如何にしても考へることの出來ないものであります。唯何か目的があつて、其一部分だけを捉へてシンプル・ハーモニック・モウションと見るならば容される場合もありませうが、併し此地震の振動全體を通じて、スチールバーを振つたやうなシンプル・ハーモニック・モーションと考へることは、全く眞相に觸れざる考へ方であります。第一に、兎も角も地震の相が複雜である。第二に建物自身の性質を考へて見ると、建物自身の所謂自己振動期、或は自由振動期、一往復振動の週期、斯う云ふものは、小さく搖つて大きく搖つた時を推測することは甚だ困難である。或る一つのフレームの建造物を微力を以て横に引つ張りまして、さうして放したならば、幾ら

（第七圖）東京に感じたる地震の主なるもの

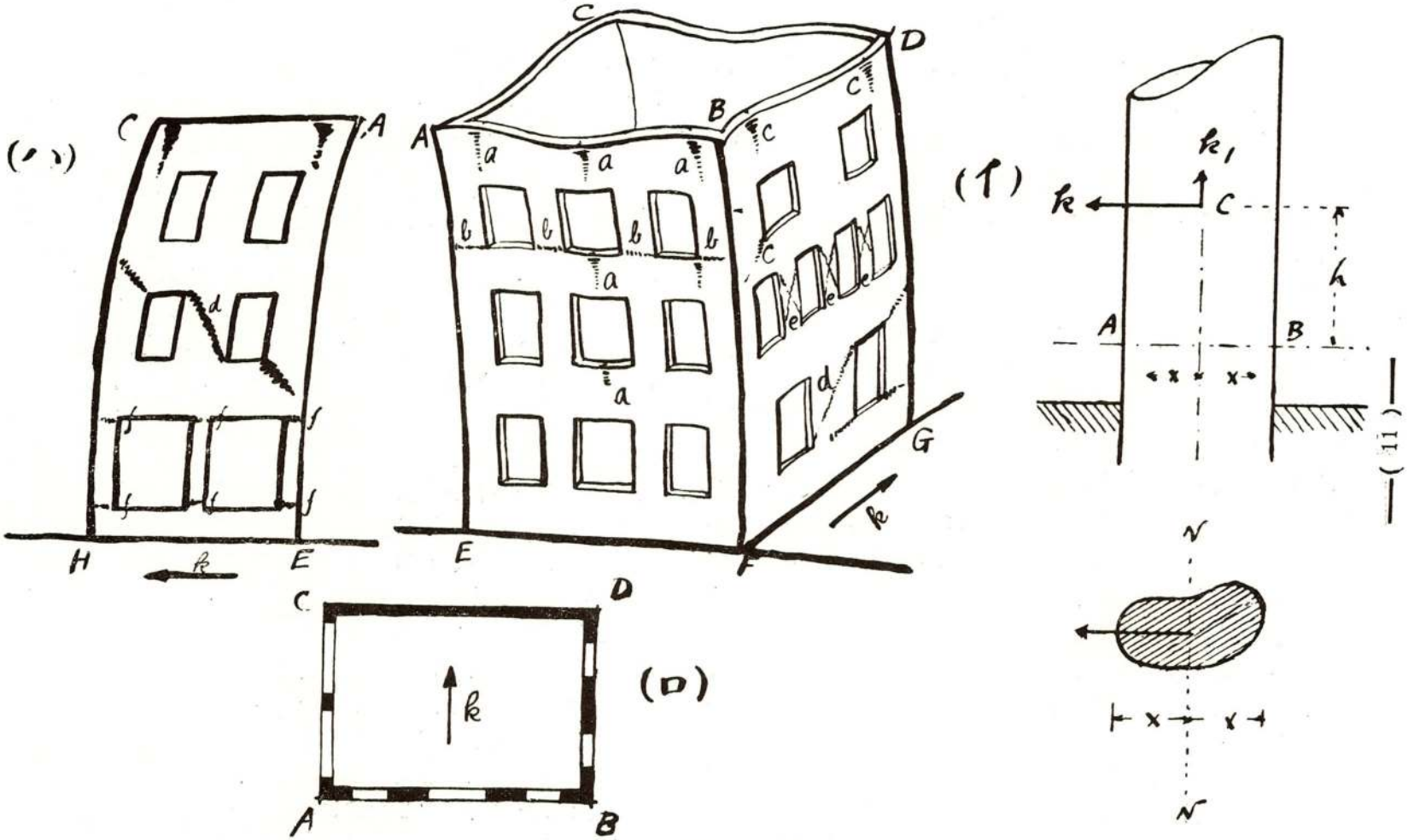
年月日	震源地	最大水平振幅	全週期	最大水平加速度	主要波數
明治 27 6 20	東京灣	73.0 m.m.	1.8 sec	444 m m./sec^2	1個
大正 10 12 8	霞浦	36.0 m.m.	1.7 sec	246 m.m./sec^2	1
11 4 26	浦賀水道	67.0 m.m.	2.0 sec	330 m.m./sec^2	1
12 1 14	霞浦	21.4 m.m.	1.3 sec	250 m.m./sec^2	1
12 9 1	相模灣	88.6 m m	1.35 sec	976 m m./sec^2	3以上
13 1 15	相模の西國境	63.0 m m.	1.8 sec	383 m.m /sec^2	3以上

本鄕帝大地震學敎室記錄ニ依ル

か搖れるでありませう。が、其時の振動期を以て大きく引つ張つた時の振動期と考へるやうなことは到底出來ない。それを同じものと考へることは全く出來ない譯であります。即ち大きな建物の大きなストレーンに對する自己振動期と云ふやうなことを測定することは出來ない相談であ。地形にも所謂イールデイングがあり、コンストラクションにもイールデイングがある。其他振動に依る所のエネルギーの吸收、此事は甚だ不明である。煙突とか或は非常に高いコンミチユアスのコンクリートの塔とか、煉瓦塔とか、兎も角非常に高いものなれば格別、木造家屋、煉瓦造、鐵骨造と云ふやうな通常の家屋のやうな復雜なものに至りまするど、何處までがエラスチックボデイーで何處までがリヂツトボデイーと考へて宜いか。エラスチックボデイーとリヂツトボデイーの限界が甚だ判然しない。今日の程度に於ては之を判定することは誰人にも不可能に屬して居ると考へます。

斯う云ふ第一第二の事項、即ち地震其ものゝヴアイブレーションの性質、それから建物の物理的の性質、此二つを鮮明にすることが必要である。是非吾々は、諸君と共に努力して之を鮮明にすることに努むる義務を持つて居ります。唯是が鮮明せられない限りは耐震構造が、眞の理論に基く完全なものとはならない。是が判らなかつたならば完成なものとはならない憾があります。併ながら建築の技術は、地震の現象を說明しよう、判らない所は說明せずに其儘置いても事が濟むと云ふやうなものではない。必要物を造ると云ふ實ーである理論が判らないからと云つて之を放任して置ける譯のものではない。所謂河の清きを持つの餘裕を有しない。どうでも造らなければならない。そこで考へ出されたものが所謂從來の方法である、と先づ御承知置きを願ひます。

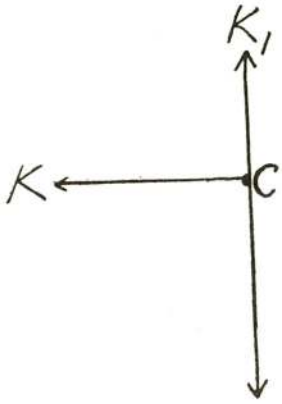
即ち第一に言つたのも第二に言つたのも、此一切の復雜さ煩雜さ、一切の不明確さ、是等の問題を打つて一丸として、さうして振動と云ふ單一な觀念に之を統一したのである。振動と云ふ單一な觀念に之を統一して、ダイナミカルアクションをスタチカリーに取扱つたと云ふ所に、所謂在來の方法なるものゝ主要な點が在ります。ダイナミカルホノミナーをスタチカリーに取扱ふと云ふことは、他の事項に於て澤山にあることでありまして、其良否は取扱ひ方の良否に依るのである。唯ダイナミカルアクションをスタチカルに取扱ふべきものでないと云ふのでなくして、取扱ひ方の良否に依つて結果の良否が生じて來るのであります。斯う云ふ工合に複雜な、煩瑣な、不明確なものを振動と云ふ單一觀念に統一しまして、さうして之をスタチカリーに取扱ふ。斯う云ふことになれば當然の結果としてそこに所謂デフオーメーションが澤山起つて來ると考へて置かなければならない。是は恰も實驗を致しまして、澤山の實驗の結果をシーストスクエアーに曲線で表して、それを一の性質を現すものとする。それに澤山のデフオーメーションがあるが如きものであります。だから單一觀念其一つだけでずつと通すと云ふことは出來ない。それにはデフオーメーションを考へて置かなければならぬ。デフオーメーションはどうやつて考へるかと云ふと、所謂振動の增大又は減少であります。斯々の場合には振動は增大する、斯々の場合には振動は減少するとして其埋合せをして居るのであります。唯どうしてもデフオーメーションが大きい爲に、所



(第 八 圖)

謂振動の增大減少として考へることの困難の時、即ち高い塔であるとか煙突であるとか云ふやうなものに付ては、是はダイナミカルアイデヤーに依るの外途のない仕事である。

斯うやうて、所謂單一觀念を持つ建物は、如何なる作用、如何なる狀態に置かれるものと考へて居るか。斯う云ふ事の一の例を示しませう。即ち茲に一の構造物があるとして、其重心をCとする。さうしてCより水平にK、垂直にK_1、下に1が作用する。通常上下のK_1と云ふものは影響が餘り多くないのでありますから是は取除きまして水平のKと垂直の1、之の組合せに依つて其作用を測るのであります。そこで第八圖を御覽を願ひます。此建物は是は何でも宜い、又色々の方面に通用すると考へても宜いが、此建物の下に地震がある時に、此建物に所謂水平振動のKが作用すると斯う考へる。此建物の狀態はどう考へられるか。先づ全體としては總て地の方向とは略々反對の方向に撓んで來ようし、先づ滑らうとします。其他振動と平行の壁面には、所謂センダンを與へようとする。又全體のヘルデイングの結果として水平の龜裂を與へようとする。其他の各局部には又色々な作用が加はる。例へば振動に直角の壁面に就て云へば、直角の壁面 ABEF は圖のやうな曲りを生じまして、其表面若くば(a)に垂直の龜裂を生ずる斯う云ふ働の影響がそれに直角の壁に傳はりまして、此處(C)に



も亦垂直の龜裂を生じようとする。窓の間と云ふやうな細い間には幾分性質の違つたセンダン線を見受けます。振動の方向に併行な壁も、又他のものを考へて見ると之に相當する他の形を考へると、若し是が柱に圍まれて居ると云ふやうなことであれば、柱の下と上には又別な、所謂フレームの作用に依つてこゝに別な作用が起つて來ます。鐵骨とか鐵筋と云ふやうなフレームビルデイングは是等の重なりであると云ふやうに、單一に之を考へることが出來るのである。唯所謂デフイレーション振動の增大減少の觀念を不斷に頭に置く必要がある。即ち振動は、敷地の位置とか或は地形とか、建物の大切さ、用途希望若くは建物の箇所に依つて左右することを容さるべきものであります。此圖で、場所に就て云ふならば、上の方は幾分曲つて居る。更に直中の所は上よりも曲つて居る。斯う云ふやうな事のあることを忘れてはならない。

斯う云ふやうな單一觀念は、單り家屋構造、建築構造と云ふものに適用されるばかりでなく、他に廣汎なる適用を持つて居ると考へます。土壓の變化と云ふものを考へる如きはそれであります。土壓の變化と云ふものも亦此振動と云ふ單一觀念の延長として、所謂土のソクカクの變化と之を見て取扱ふこと頗る簡便であります。

以上は、所謂從來說なるものゝ主眼とする所を簡單にお話したのでありますが、之を助長し發達せしめ、又興味ある研究を之に基いてされた人も尠くない。內藤博士であるとか或は八木幸次郎氏であるとか谷口忠氏であると云ふやうな、之に基く多數の研究家があります。

内藤博士の功績は忘るべからざるものがあると考へますが内藤博士は、所謂從來説の基礎の上に立つて、フレームビルディングを處理する上に、アメリカのウイルソン氏の提唱された所謂スローデフレクションメソッド之に基いて、横動に對する架構の幾多の計算を行つて、略算法の研究も加へられて、さうしてフレームビイルデイングの計算を普及せしめられた。是が建築界に與へた功績は非常に大なるものであると感謝して居ります。此事は周知の事實でありますから詳しくは申しませぬが、私實にウイルソン教授に對して甚だ感謝して居る。内藤傳士と共に地震後ウイルソン教授に禮狀を發したことであります。貴方の方法に依つて日本のフレームビルデイングの計算の研究が能く出來たのであると云ふ禮狀を出したことでありました。

唯茲に一言私の意見を申上げて置きたいことは、内藤博士の所謂分布係數であります。内藤博士は、分布係數なるものを提示せられまして、フレームとソリッドウォークとの横動分擔の割合を示された。勿論相當程度にフレームとソリッドウォークとは横動を分擔するのであります。併なから振動其ものは、前にお話しますやうに粗大な性質のものであります所謂煩雜、複雜、不明確と云ふものを打つて一丸とした粗大な性質のものであります。高層建築には固よりエラスチックヴアイブレーションが伴ふ。故に餘りに此假定に基いて、粗大なる假定の理論を其儘進行せしめ、さうして分布係數に重きを置かれざることを希望するのであります。分擔ありや否やと云へば有りと思ふ。唯それに過大の信頼を置いて太く爲し得る柱を細くすると云ふやうな弊に陷られないやうに望むのであります。内藤博士の趣旨そこに在りとは思はない、之を據る人に就て望んで置くのであります。

次に谷口忠氏の架構建築の破壞の位置の研究、是は從來説なるものゝ基礎の上に立つて、頗る興味ある研究でありますそれは大正十五年三月の建築雜誌第四百八十號に載つて居るものと、『地震に依る架構建築の破壞位置に就て』と題するものであります。之を一つ御紹介して置くことは後々の爲に必要があるのでありますが、それは其大要は雜誌に載つたのも同じことでありますから、餘り詳しい事は申しませぬが、大要を申しまするとゝ、鐵筋コンクリート造の二階建でも三階建でも、さう云ふ低いものでも、卽ち自己振動期の甚だ短いものでも、又丸の内ビルデイングのやうな自由振動期の相當長いものでも、孰れでも、此フレームビルデイングなるものが、一番多く破壞して居るのは二階目三階目あたりで、一番下ではない。斯う云ふ事實は、エラスチックヴアイブレーションでも色々の人の説でも到底解釋が出來ない。私共實は是には弱り抜いて居つたのであります。エラスチックヴアイブレーションから云つて、破壞點が上にあると云ふことは、大森先生の煙突の破壞に就ての説に依つても、煙突は上で破壞する或は是には私の説もあります。之も相當上で破壞することに對する説明である。物部博士にも之に對する説明があります末廣君も説明して居られる。併し何れも相當自分の振動期が長いものでないと、其現象が起つて來ない筈になつて居る。尤も末廣説には少し違つた點がありますので、是は後に附加へて述べますが、大體に於てさうであります。即ち誰人の説から云つても、自己振動期の小さいものでは上で破壞すると

既往地震による架構建築破壊層の位置

名稱	全層數（地階を第一層とす）	破壊著しき層（地階より第一層とふ數ふ）
丸ノ内ビルデング	9	3—5
郵船ビルデング	8	2—3
有樂館	8	3—4
千代田ビルデング	8	2
海上ビルデング	7	2—3
星製藥ビルデング	7	2—3
三井三號館	7	3—4
東京會館	6	3
工業倶樂部	6	2—3
三越本館	6	2—3
日米信託	6	2
正金銀行丸ノ内支店	5	2
日本電氣工場	3	2
東京電氣工場	3	2
米國桑港クロニクル館	17	11—12（第9層隣館と接觸せり）
取引所	15	9—10（第9層隣館と接觸せり）
リアルトー館	8	6—7（第5層隣館と接觸せり）

云ふ説明が附かぬのである。

然るに谷口君は、フレームビルデイングに所謂從來説に依つて横の力を掛けて、さうして生ずる作用に就て計算をして居る間に、斯う云ふ事實に氣が付いた。それは例へば九層架構の上部に横に力を掛けると、一番デフォーメーションの多い所は一番下であるべき筈であるとばかり思つて居つた所が其デフォーメーションの多い所はもつと上である、即ち五層の所にあるのだと云ふ事に氣が付いた。（PL.7 a 參照）今日になつて見ると甚だ吾々ぼんやりして居つたやうな譯であります。此フレームのデフォーメーションとスチールのバーのデフォーメーションとには餘程違つた性質があるのであります。今スチールのバーの上端に力を掛けると全體に曲つてしまふ。又途中に力を掛けても上が曲つてしまふそれがフレームであると、中間の所に力を掛けると下は成程曲るが上は知らぬ顔をして居る。（PL.7 b 參照）、斯う云ふ特殊の現象がある事に氣が付いた。さう云ふ事から色々之をいぢくつて見まするとと、一番上に力を掛けた時にはデフォーメーションの一番大きい所は眞中所にある（PL.7 a）。途中に掛けて見ると下に降る（PL.7 b）。様々に其形の變化のある事を見出した。二階三階と云ふやうな高さの低いもの、又八階も九階もあるやうな高さの高いもの、それから柱と梁との剛度の色々違ふもの、それから掛ける力も亦同じもの若くは上の方が大きいものと云ふやうな工合に、色々様々の場合に就て精密なる調査をして見ると、何れもマキシアムにデフォームする所は、下でなく數層上であると云ふ事實を見付け得たのであります。之に依つて吾々の得た利益は、單に在來説明の附かなかつた事實の説明を爲し得たと云ふ事には止まらない。尤もこゝでお斷りして置きますのは、二階三階で破壊すると云ふ理由は、單に此現象だけだとは決して考へませぬが、どの説に依つて説明したのよりも確實さが多い。恐らく是が與つて力ある者であると考へます。他のものを全部排除する譯ではない。之に依つて從來説明の附かなかつた事に説明を附け得たと云ふ事に止ま

らない。所謂從來の方法の取扱上に色々の信念を附加へた所に謝する所が多いのであります。

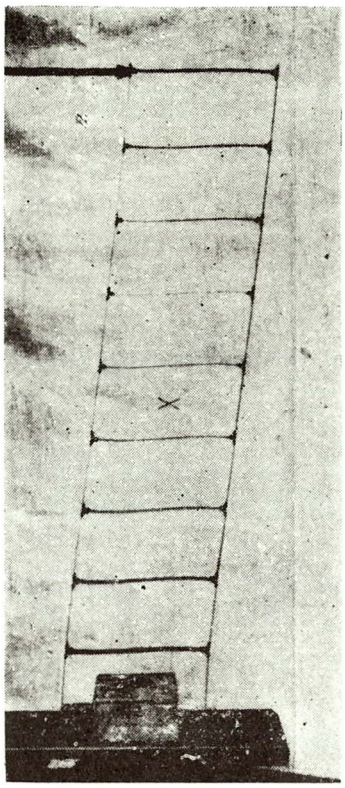
以上は主として從來の方法、即ち振動期と云ふやうな單一觀念を基礎としてスタチカリーに取扱ふと云ふ方法に就て述べたのでありますが、是から進んで、近來大いに隆盛になつて來て居る所の、所謂ダイナミカルソリユージョンの諸說に關して意見を述べたいと思ひます。是までは謂はゞ前置のやうなものでありまして、是から本文に掛らうと思ふのであります。

そこで茲に近來のヴアイブレーション說、所謂ダイナミカルセオリーの或るものを御紹介するに付きまして、特にお斷りして置きたいことが一つあります。それは、是から後に述べようとする、即ち世上雜誌其他に現れて居る所の、物部君、末廣君、眞島君、水原君其他の諸氏の御議論は、總て悉く是は大いにエラスチツノヴアイブレーションを爲す所のエラスチックボデイーに關するものである。其然らざるものに就ては、大體先づ關係が無いのであります。さう云ふ事を御承知置きを願つて置かなければならぬ。問題は煙突とか或はスプリングのやうな工合のもの、或は九層の建物のやうな工合のもの、斯う云ふ非常にエラスチツクな、ペリオツドから云へば自由振動期から云ふと 秒以上と云ふやうなものに就てだけ論じて居られるのである。私はそれだけを摘出したのではない。皆論じて居られるのがそれだけであると云ふ事をお斷りして置きます。即ち通常の木造家屋の如き、エラスチツクヴアイブレーションを爲さないものは御議論の中に入つて居らない。

木造家屋を振動さして御覽に入れる譯には參りませぬから衝立の如きものを以て實驗して御覽に入れることにしますが今之を横に引つ張つて放しましてもヴアイブレーションは殆んどしない。殆んどその位置に復つた所で少しビリ〳〵つとするだけである。それがスプリングの如きものであると、上端を横に引つ張つて之を放せば、引つ張つたと反對の方向に殆んど同じ距離まで復つて、さうしていつ迄もエラスチツクヴアイブレーションを爲して居る。今の衝立のやうなものは之を引つ張つても、エネルギーは吸收されてしまふからエラスチツクヴアイブレーションはしない。

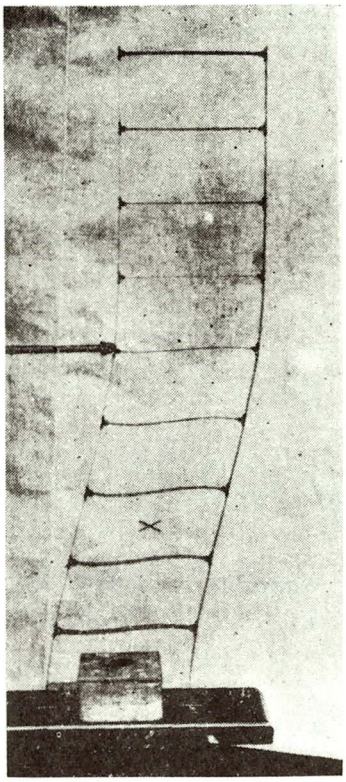
斯う云ふエネルギーの吸收の大きい、エライチツクヴアイブレーションをやらぬ木造家屋のやうなものは御議論の中に入つて居らないこと。それから又鐵筋コンクリート造の二階建三階建四階建と云ふやうなものは、通常自由振動期が甚だ短い。之も正確な事は申上げ兼ねますが、〇・二秒とか〇・三秒とか云ふやうなものらしい。然るに大地震の振動期は、前に御紹介した通りに一・三秒とか一・八秒とか二秒である。斯う云ふ大きい一週期の大地震に比べて甚だ少ない週期を持つて居る所謂二階三階四階と云ふやうな、鐵筋コンクリート構造のものも含まないのであります。其等のものは、所謂リヂツドボデイーとして、從來の方法で取扱ふ事に誰も異議は無いのであります。即ち今日の所、ダイナミカルセオリーの議論の中に入つて居るものは、之を簡單に云ひまするとと、煙突とか丸ノ内ビルデイングとか云ふやうな、自由振動期の相當大きなものに就てだけであると云ふ事を御承知置きを願ひます。其他のものに就ては未だ研究はされて居らないのであ

a



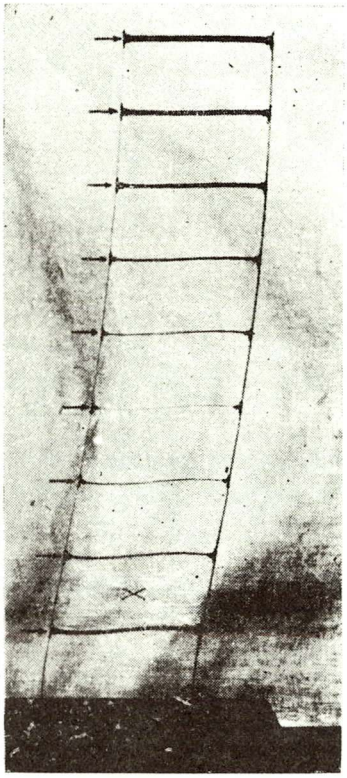
最上端ニノミ力存スル場合

b



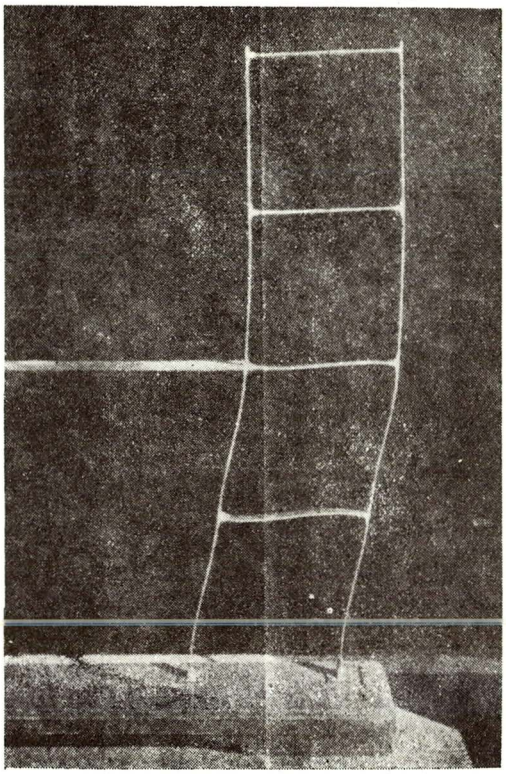
途中ニノミ力存スル場合

c

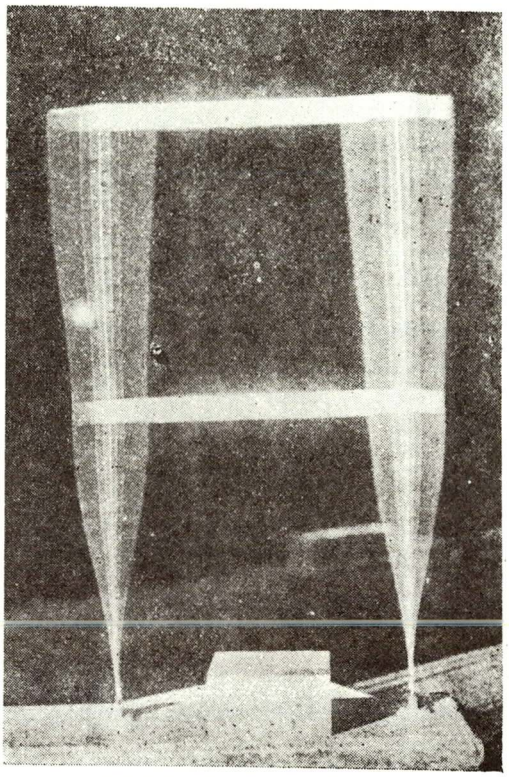


力等分ナル場合

×印ハ最大撓廣層



架構の撓み

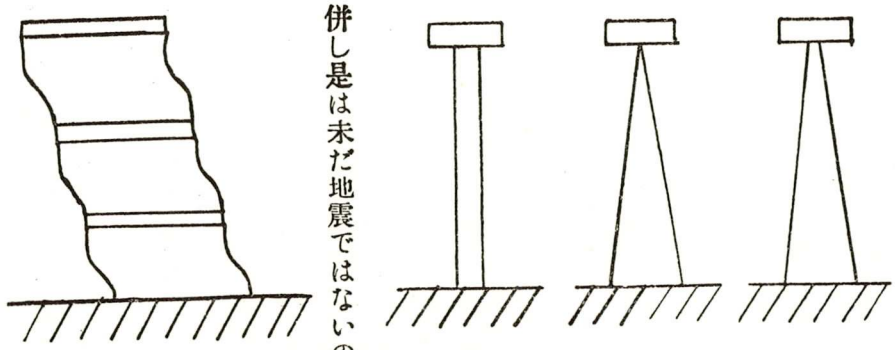


梁の剛な單張間二層架構の第一次振動

ります。

そこで物部博士の研究を御紹介致しますが、物部博士は御承知の通りに、内務省土木試驗所長であられ、兼てこの大學の工學部の教授であります。物部博士は實に土木學界で數學を以て名ある人であります。何事にも研鑽倦む所のない學者であります。物部氏の學位論文であり學士院賞を得られた有名な論文が、即ち今御紹介しようとするものでありますが、それは大正八年六月土木學會誌第五卷第三號に載つて居る『塔狀構造物の振動並に其耐震性に就て』と云ふのでありましてもう一つは大正九年八月に、矢張土木學會誌の第六卷第四號に發表された『載荷せる構造物の振動並に耐震に就て』と云ふ此二つの論文であります。此二つの御研究は相當多岐に亘るものでありまして、其主要なる點は、私は諸君に御紹介する便宜上、組合せを違へまして、茲に二つに大別して申上げます。其一は塔狀構造物の自己振動週期の算定、其二は塔狀構造物が强制振動を受けた時の曲能率の算定、此二つになります。初めは塔狀構造物の自由振動週期の算定を致し、後の方は、其塔狀構造物に强制振動を加へた時に、此塔狀構造物が持つヘッディングムーブメントの分布に就ての研究　斯う二つに考へることが出來ます。

其第一の、塔狀構造物の自由振動期の算定に就て、物部博士はどう云ふ事を云はれて居るかを御紹介しまするが、先づユニフォームセクションのバーの下を固定して置きまして、それに自由振動をやらせる。此場合に振動週期は、棒の長さであるとか、質量であるとか、斷面の形　大きさ等に依つて異るのでありますが、それに就ては、有名なイギリスのロードレーレーと云ふ人、此人は振動學の殆んど基本大家とも云ふべき人でありますが、此人の振動週期の理論の計算したものがある。それのやり方に基づまして圖の如き形のものに就て自由振動期を計算されたのであります。尙は其ロードレーレーのやつたもの外に、此上に重い目方を持つたもの、所謂橋のピーヤのやうなものを考へて居られるのでありませうが、塔狀構造物の上に重い物が載つた場合は、亦自由振動週期が違ひますが、其等の算定をせられた。是は數學的に非常に難かしいものゝやうであります。やられたのはユニフォームバー一本の場合でありまして、數學的には實際非常な手腕を要する貴い御研究と云ふの外はありませぬ併し是は未だ地震ではないのであります。唯フラ〳〵振れる物に就ての御研究である。此研究の中に、いま一つフレームの自由振動期の事もやつて居られる。併しそれはもつと低いものを對象にして居られるので、其やり方は梁だけは曲らない、曲るのは柱だけである、上の圖のやうにしか曲らないものとして

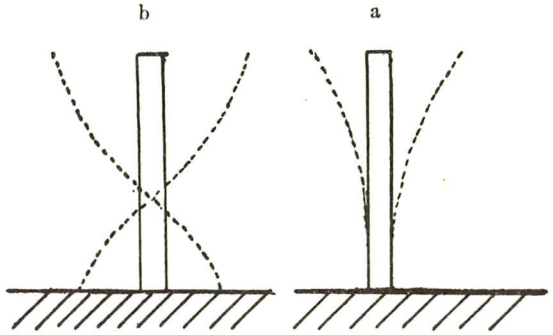


算定されたものであります。でありますから事實とは少し違ふ。

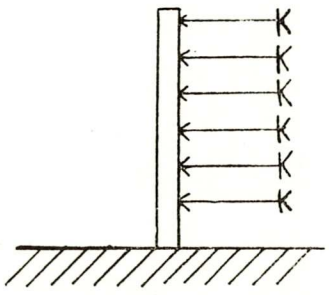
こゝに一寸、物部君の第一の點の御紹介の間に挾んで御紹介して置きたいものはフレームの自由振動期に關する谷口君の研究である。物部君の紹介の間に、序に挾んで紹介して置くのは少し氣の毒でありまするが、是は聽く方から云ふと其方が便宜であらうと思ひますから申します。

谷口氏の『架構の固有振動の週期に就て』と云ふのは、大正十三年及び大正十四年の建築雜誌に載つて居るものであります。是は實に細密正確なものでありまして、當然容されて宜しい。僅の假定を除きましては、全然誤りを含んで居らない、全く嚴密な算定であります。架構の振動週期に就ては物部氏も御承知の通りやつて居られまするし、それから眞島博士も水原氏も末廣氏も、それ〴〵式を作つて居られますが、それは矢張他の研究の便宜上の式でありまして、假定が相當粗大であります。けれども谷口氏の是は、唯架構の振動週期を求むることが目的であつたのでありまして、其故に非常に正確に出來て居る。架構の自由振動の週期に就ては、是がスタンダードであります。即ち高さを變へ、剛度を變へ、柱を變へ、色々樣々の場合に就て、谷口式に非常に細かに出來て居るのであります。

そこで再び物部君の紹介に立複りまして、今お話する通り第一は塔狀構造物の自由振動期の算定でありますが、其第二は、それに强制振動を與へた時の曲能率の分布の算定である是が愈々地震となるのであります。其計算の仕方は、與へたる振動が完全な綺麗なシンプル・ハーモニック・モウションである、先づ斯う假定して居る。それから與へて暫くして後には、自由振動の形が消えまして强制した振動だけになつてしまふ。其强制した振動だけになつてしまつた後に就て考へられたのが注意すべき點であります。繰返して申しますが、與へたる强制振動は綺麗なシンプル・ハーモニック・モーションであり、それを與へて暫くして自己振動が無くなつて、强制振動だけになつてしまつた時だけに就て計算をしたのである。さう云ふ計算をやつた其結束を見まするとバーに振動を與へた場合に自由振動期をtとし之に與へた振動週期をTとします。さうすると其自由振動期が與へた振動週期よりも小さいT＜tの場合即ちのろ〳〵ゆら〳〵振つた時の振動の形はa圖のやうになる。又自由振動期よりT＞tの場合には小さい振動を加へた、即ちb圖のやうな形になる。さうして初めの場合では最大曲能率の點が一番下にあつたが後の場合に就ては最大曲能率は幾らか上る。尤も個々に就て云まするとtの少さい場合でもマキシマムムーヴメントの少し上ると云ふ事實が出て居ります併し一般には前に申した通りである。さうして其のマキシマムヘッデイングムーヴメントの大きさから云ふと、之に何處も彼處も同じ力の加する圖のやうなやり方をやると、ヘッデイン



ムーヴメントは數倍大きくなると云つて心配して居らるゝ點に結論して居られます。



以上は有名なる論文の大體を御紹介したのでありますが、之に依りまして、其數學的に色々の事を解決せられた點は實に其手腕に敬服致しまするし、又色々發見せられた事に就て謝意を表します。又特にユニフォームに掛けたものはより數倍大きくなると云ふ此警告は、吾々は之を十分尊敬して考へる必要があります。但し其數倍になると云ふユニカルヴァリューの數を出されて居るのでありますが、數其ものに就ては遺憾ながら御同意申上兼ねる。即ちケミストリーなどで云ふ定性分析とか定量分析と云ふのでありますが、定性的には吾々大いに此計畫を尊重するのでありますが、併ながら定量的には未だ可なりの疑を存するのであり、敢て直ちに其數字に驚く必要はないと思ふ。

tがTよりも小さい、tがTより大きいと云ふことで數倍になると云ふやうな御心配はないのでありますが、若し提案された其算式で云ふならばT=斯う云ふ時に就て考へて見るとt
どんなものでも壞れなければならぬと云ふ結論に達する。斯う云ふ事は在り得ないかと云ふと、T=と云ふやうなことは、t
T<或はT>と云ふやうな前後を考へる以上は、T=と云ふ事は多t t t
々あるものと考へなければならぬ。若しさう云ふ風な事があるものとすれば、無限にどんなものでも壞れなければならぬ數倍どころの騷ではないのであります。

是は抑々假定に依つて斯ふ云ふ結果を生ずるのでありまして、假定は所謂假定であるから、若しT=と云ふ場合がありとすれば、どう云ふものでも壞れなければならぬ。及第するものは無くなつてしまふと云ふ、斯う云ふ所まで推論が行く筈である。今言つた通りに、假定が、綺麗なシンプルハーモニックにずつと永續して入つて來ると云ふ假定であります。故に御說其ものに就ては、所謂定性的のものとして、定量的にはそれに同意しなくても宜いと思ふのであります。

此假定に就きまして未廣博士は、强制振動の永續の後に、强制振動のみになつてしまつた時だけを考へるのは惡い。もつと前を考へなければならぬと云つて居られます。けれども之を私共から見まするとt、先づ五十步百步で、何處から考へても何處を考へて居られても、數學に於ては成程さうか知らないが、實際問題となれば、尙ほ吾々は考へる事がありますそれは其地震のフォーストヴアイブレーションが綺麗にいつまでも永續する、斯う云ふ考へ方が、是は假定であります。それは實際と合つて居るのではない。斯う云ふ假定に出發するから、其結果も斯樣に恐ろしくなつて來たのである。構造物のヴアイブレーションは、スチールのヴアイブレーションのやうに綺麗ではない。煉瓦やコンクリートと云ふやうなものは、例へば中に鐵骨があつて、それに壁を附けたりしまして、多少でもクラックが這入りますればエネルギーがうんと吸收されて綺麗なヴアイブレーションでは居ない。地震は先程御覽になつたやうに、節だらけの振動である。而も地震の振動期は、物部君も末廣君も、多くは一秒を取つて考へて居らますが、さう云ふ時もありませうが、一秒半、二秒と云ふ

時も多々ある、デスコンチユニアスな不行儀な振動であります。假定其ものが大ざつぱなもので、初めを粗大に定めて居るのでありますから、其後をどう云ふ風に細かく取つて行つてもデザールに行く筈は無い。粗大な假定なれば粗大並みに行つてうまく舵を取つて行かないと事實に合つて來ない。若し周圍が綺麗に精密に行つてレザルトを得ようとするならば前提が粗大であつてはならぬと斯う考へるのであります。

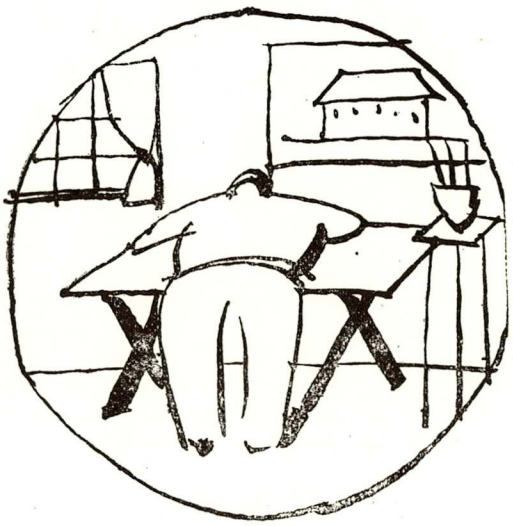
斯う云ふやうな事は、物部博士氣が付かれないのではないのであります。流石に物部博士であります。こんな自明の理に氣が付かれないのではないので、論文の頭初に、地震の事は複雜で到底單純には取扱ひ兼ねる、斯う云ふ事が書いてある。併し若し總てがシンプル・ハーモニック・モーションで現れるものと假定するならば次のやうになる、斯うちやんと初めから指示されて居るのであります。それ故に其結果の數字に就て若し吾々が驚くならば驚く方が餘程間違つて居ると云つて宜い位であります。此事に就ては末廣博士の場合でも眞島博士の場合でも水原君の場合でも同じことでありますからもう少し說明をしたい事がある、其時に復た申上げることがある事を御承知置きを願ひます。

物部博士の御研究には、其後大正十三年一月の土木學會誌に、『地震上下動に關する考察並振動雜論』と云ふ論文があります。是はリヂットボデイーの土壓の變化などを論じたのでありまして、それに上下動の影響を加へて論じたものであります。是は大正四年に私の發表しました例の『家屋耐震構造論』に書いてあるのに比べまして、其意義に於て新らし味を私は見出し兼て居ります、同じやうな事であります。物部博士は、其後益々研究を續けられて居ります。願くは更に近く色々な御研究の御發表に接することを希望するのであります多少暴言があつたとしましたならば、此處には居られぬかも知れませぬけれども御容赦を願つて置きます。

×

×

×



都市計畫の問題

渡邊鐵藏

一

都市計畫の問題は、法律が出來たのが大正八年で、其前後から喧しく論議されて居たのであるが、日本全國何處へ行つても、都市計畫の事業は一向進捗して居ない、無論六大都市以外は實に微々たるものであつて、六大都市でも先づ東京と大阪が最も之を重要視して行つて居るのであるけれども、此二大都市に於ても此事業の進行の狀況を見ると、洵に情ないやうな狀態である、殊に東京は先年の大震火災に依て其六割の不動產を燒き拂はれたのであるが、其復興がまた遲々として進まない、大阪市に至ては私の見る所では世界中に於て一と云つては、些と大袈裟かも知れないが、日本國中の大都市として都市計畫の事業を實行することの最も緊要な所であるが、其大阪に於ても殊に案外此事業が進行して居ないことを發見するのである、此意味に於て今此問題に就いて卑見を述ぶることは時機を得て居ることであり、殊に大大阪の地域も決定されたのであるから、此機會に於て根本的に大阪市の都市計畫のことを考へて置くことは、將來我々の都市生活の幸福が最も合理的に、永遠に享受されるかどうかと云ふ分岐點になると考へるが故に、少しく此の問題に就いて論議したいと思ふ。

都市計畫の意義に就いては今更言ふまでもないことであるが、都市計畫と云へば、內務省の法律　と云つては可怪しいけれども——には、都市の保安、衞生、經濟、交通等の點から都市の施設に對して適當な計畫をするのだ——と云ふ風に此意味を書き、即ち都市計畫はさう云ふ點で大切であると

云ふ風に見て居る、所が此點に就いて一應申上げたいのは、之に美觀と云ふ事が脫けて居ることである、都市計畫と云へば、先づ此都市を美しくすると云ふことが誰の頭にもピンと來るのであるが、それが無い、實は最初の草案にはそれがあつたのであるが、削られた、何故削られたかと云へば、美觀だなどゝ云ふと、無駄なことをすると云ふ風に考へられて、此都市計畫法が議會を通過しないからと云ふので、削られたのであるが、是は飛んでもない間違ひで、都市の建設に就いては前述の如き四つの點から之を最も合理的に行ふのは言ふ迄もないが、又美觀と云ふことも無論考へなければならぬ、唯人は朝早く起きて飯を食ひ、働きに出て、夜家に歸つて寢るものだと云ふ風な考へ方をする人は兎も角、私共は相當に趣味のある、又慰安のある生活をしたいと考へて居るのであるから、都市に住む我々として、之を働く場所にまで徹底することが出來れば　申分ないが、それは先づ我慢するとしても、切めて家に居り、市街を歩く時に、消極的に云へば、惡い刺戟を與へられ、不愉快な感じを與へられることがなければ、可いと思ひ、更に進んで、眼を慰め、疲れを休めるやうな周圍の狀況になつて居れば可いと云ふ風に考へるのは、誰しも同じことであらう、殊に私共は之を願ふのであるが、我國の都市の建設に就いては昔はさう云ふ事を考へたが、最近では些とも考へない、都市計畫の意味は國々に依て違ふが、獨逸などでは或意味から云ふと、美觀と云ふことを以て都市計畫の半ば以上の精神にして居るやうな傾きがある、青島の市街を拵える時でも、何處から見ても、綺麗に見えるやうな設計をした、又戰後の獨逸は非常に殺伐なものであるかの如くお考へになると、大違ひであつて、他の藝術のことは知らず、都市の建設に於ては建築規則が從來よりも嚴しくなつて色々な重なる建物、或は賣場（スクエア）、大道路と云ふやうな所に面した建造物に就いては公共團體が種々の指圖をする、甚しきは自から提案して此通りに造れと命令しても可いやうなことになつて居る位に、都市の美觀と云ふものを重んじて居る、其結果――と云ふよりは、數十年來のさう云ふ風の精神の現れとして、獨逸の都市は見るから洵に立派なものになつて居る、仍ち都市計畫と云ふものには此美觀と云ふことが入いるのが當然である、日本の法律にはそれが脫けて居るが、今後都市に於ける建物――と云つては、狹いけれども、建物は勿論、一般都市の建設に就いて美觀と云ふとを脫かして戴きたくないと思ふ。

尙ほ之を事業の方面から云つて、都市計畫は何をするかと云へば、其主なるものは言ふまでもなく道路系統を定めて道路の建設をなし、交通機關を造り、公園其他公共營造物の地位を定め、或は更に廣くなれば、運河、鐵道等の設備、又經濟的に利用すべき倉庫其他其都市の活動に必要な設備の地位等を定めるでのあるが、斯う云ふ事業の內容を一々述べることは煩しいから、省略するけれども、之を概括的に云へば、都市計畫は從來行はれて居る例から見て、都市の改造と建設になると云つて可い、而して我國の都市計畫は無論改造の點にある、それには今は非常に都合の好い時期にある、殊に地震の爲に其六割を燒いた東京の如きは最も然りであるが　其全體の土地の區劃整理をやらうとすると、或人は論じて曰くあの廣い所で　そんな莫迦なことが出來るものか、外國にも

そんな例はない――と、實に驚き入つた話である、外國に例が無いからと云つて、日本に於て出來ぬと云ふ譯はない、寧ろ日本だからこそ出來るのである、即ち別に土地に大した設備がある譯でなく、家は燒ければ、ぼう〳〵燃ねるし、地震で搖れば、直ぐに復へると云ふやうな狀態であるから、今ならばこそ德川家康の造つた市街を徹底的に改造することが出來る、大阪だつて同樣である、是亦太閤秀吉の造つた市街を根本的に變へることは今なれば出來るが、もう彼處此處に永久的の建造物が出來、其他の路面の設備や地下の設備が行屆いて來たならば、到底改造は不可能になる、今が絶好の時期である、倫敦でイーストランドと云ふ賑な所があるが、それに唯一本の直角の路を造るのにも七十年間喧嘩をして、ヤツと出來た、約り不動產の權利關係が非常に複雜して居るから、なか〳〵出來なかつた、大阪市の淀屋橋筋も今に喧嘩が出來て、やかましいことにならうと思ふが、併しまだ建物自體が至つて粗末なものであるから、今決行すれば、出來ないことはない、殊に都市計畫には各都市に依て使命がある、今日本では大きな都市だけに行はれて居るが、中都市は勿論、段々發達しつゝある八幡、大牟田、尼ケ崎の如き小都市でも必要である、是か閑却されて居るけれども、大阪の樣な大都會でも各々其使命に依て都市計畫の準備を考へなければならぬ、大阪は經濟的に非常に發達する都市であることは築港の狀況を見ても判る、十年前と今日とは大變に違ふ、聞けば今日は日々十五六隻、六十萬噸の船が碇泊して居るさうであるが、將來は木津川から神崎川まで突堤を新にしやうと云ふ位な狀勢に進んで居る、今は貿易や工業等の內容に就いて述べる事はしないが、大雜把に云つても、大阪の工業製造能力は、工場の數から云つても非常に大なるものがあるのであつて、殊に支那其他の方面に於ける貿易上の勢力は非常なものである何處までも發展する力がある、さう云ふ所であるから、今に於て其經濟活動を助け、又それに應じて、此處に人口が集中して來るのであるから、其人々が安全に、愉快に、又便宜に暮せるだけの計畫を立てゝ置かなければならぬ、即ち設備にはなか〳〵手間が取れやうが、切めて計畫だけでも早く立てる必要がある、あの築港方面の土地は私か前に來た時には大抵草が生へて居つたが、今は可なり開けて、已に百萬圓位の地代收入があり、市の財政上にも大きな助けになつて居るさうであるが、洵に結構なことである、之を世襲財產的に有つて居れば、將來結局何億と云ふ財產になつて、大變な市民の助けになる、こゝに敢て東京の惡口を言ふのではないが、東京の人間は目先のことばかり考へて居る、東京では大阪の人間は目先の利益ばかり考へて居ると云つて、貧六だと惡口を言ふのであるが、大間違ひである、實は東京の人こそ目先の喧嘩ばかりして、大事な土地も拋り放しにした儘、何等設備もせず、改良もしない、大阪ではあの大きな築港の如きも自分でやつて居るが、東京では直ぐ政府に賴もう〳〵として、芝浦の如きも何かとして貰いたいと考へて居るから、まだ何も出來ない、大阪の人は算盤が取れ、勘定が解るが、東京の人は、惡口ばかり言ふやうであるが、勘定が解らぬ、計數の方でない感情の方が强いものであるから、下らぬことで喧嘩ばかりして、仕事が一向出來ないと云ふ嫌ひがある、大分話が脫線したやうであるが、斯の如く有望な經濟的發展の範圍

を有つて居るアノ築港の全面を見ても、それが皆大阪全市民の生活に影響して來るのであるから、何等かの計畫を立てゝ行かなければならぬ。

二

そこで從來の都市計畫の規模を見ると、是も可なり大きなもので、地震前に一億四五千萬圓、地震後に於て二億六七千萬圓と記憶して居るが、さう云ふ大計畫が今後九年か十年の間に出來上ることになつて居る、洵に結構である、私はアノ地震の後で早速大阪へ歸付けて來たことがある、それは忘れもせぬ、大正十二年の十月の九日私は地震學者の今村明恒さんと大學の食堂で握飯を食べて居つた、まだ當時は梅干と握飯であつた——すると今度は大阪の方だと云ふことで、それは大變だ、日本は大阪と東京で立つて居る、東京が倒れて、大阪が潰れては、大變だ、此二つの眼が潰れては、日本は盲になつてしまふ、今から行つても役にも立つまいが、然し何か警戒せしめることは必要だらうと考へ、恰も武藤山治さんが帝國ホテルに來て居られるのに偶然會つて、此事を話した所、それは大變だから來て呉れと云ふことで、私は今村さんに隨いて來て、今村さんから府市の人に話して貰ひ、尚ほ中央公會堂では私も話をして、其時には大變大袈裟なやうなことを述べたが、それは事實である、東京では被服廠で何千かの死者が出來たが、大阪で若しあんな地震があつて、火事が起つたならば、少くとも船場や島の内は被服廠と同じ狀態になるかも知れない、秀吉に造つて貰つて、其儘拋つて置いた駕籠で交通する町、トラックなんか迚も通れさうもない町に大震火災でもあつたら大變だと云ふ意味で、色々威かすやうであつたが、正直な話をしたのである、即ち少くとも橋を地震でも壞はれないやう、火事にも燒けないやうにして、其他公園、廣場等を設けなければ可けないと云ふ話をした、大阪は不衞生な所だと云ふことは私も子供の時から知つて居るし誰もさう感じて居る、從て大阪の中流以上の人は大抵濱寺方面とか、或は芦屋とか云ふ方面に行つて住居して居るが、大多數の人はさうも行かぬから、矢張り市中にウヂヤ〳〵して精々近郊に出て生活して居る、近郊へも行けない者こそ迷惑な次第である、殊に西洋ならば、營業時間が五時間とか六時間と云ふことになつて居るが、早朝から夜の十一時十二時までも店舖を張つて居る家も大分あるだらうと思ふ、そこで切めて近傍に公園でもあつて、日曜には其處へ行くとか、小學校へも出ぬやうな子供を遊ばして置いても、怪我もせず、青いものも見られると云ふことになれば、大變結構だ、殊に私は都會の子供の事を熟々考へる、第二の日本國民も親が都會に住まなければならぬ職業をして居る爲に、それに附隨して外に出れば、電車や自動車に追はれ、家に入れば小さい洵に前栽と云ふものがあるだけで、而もそれすら無い家が多い、氣の毒な者である、仍ち切めて此等の段々と伸び行く子供だけでも、電車に乘らないで、時間を潰さず、金も使はず、お守が付かないでも、自由に遊べる所が家より三町か四町の間にあるならば可いが、大阪にはそれが無い、併し是等のことはなか〳〵望んでも、得難いことであるが、災害の場合のみならず、平常の交通、又市民の衞生、慰安と云ふことに對しても都市計畫の事業が進むか進まぬかと云ふことが根本の影

響をなすものである。

更に從來の都市計畫の問題の外に、最近大大阪と云ふものが出來て、私共の小さい時に蝗取に行つた所が皆大阪市の中に入つた、萩の茶屋などは無論のこと、隨分遠方まで伸びて、南は大和川、北は淀川まで足を出して、住吉區だとか東淀川區、西淀川區などが出來、頗る人口の稀薄な所まで大阪市が手を伸した結果、大阪は人口二百十萬と云ふことになり東京の人口百九十何萬に對して、一躍大阪の方が大きくなつた、さう云ふことには私は大阪人を發揮するのであるが、大阪が第一になつたことは洵に痛快である、併し纏つて考へると、人口ばかり多くなつたのでは結局誇るに足らぬ、殊に私共は彼の地震の經驗から見て、のみならず、日本全體としての經濟的發展、又都會と農村との關係、其他色々社會の將來のことを考へて見ると、大都會の發達することは可くないと思ふ、從て東京も出來るだけ小さくなつた方が可く、大阪ももう大きくならぬ方が可いと云ふことを理想として考へて居る、或時大東京會と云ふものが慶應義塾で出來て講演を依頼された際にも話したことがあるが、都市の餘り大きくなるのは可くない、寧ろ人口二三十萬の都會が彼方此方に發達した方が可いのである、理論はさうであるが　大阪は小さくしやうとしても、小さくはならぬ、と云ふのは、一寸日本國の他に無いやうな天然の地形と、天然の地位を有つて居る、即ち日本の中心に在つて、瀬戸内海の要衝に當り、又灣内に入つて居て、而もそれに大きな資本を掛けて居る、近傍には名古屋があり、神戸あり、京都あり、四國があり、恰も太平洋中に於ける日本國と云つたやうな立場に在るのであるから、發展せざらんとするも得ない、さう云ふ意味から自然と東京の百九十萬人を飛越して、二百十萬にもなつたので、將來も益々殖えるかも知れないが、是はどうも事實上さうなるのであるから、仕方がない、態々お願ひをして、東京の政府を持て來なくても、片岡博士の議論のやうに生駒山の麓に遷都をしなくても、大阪はどん〳〵發達して來る、後にも述べたやうに、大阪は寧ろ首府でない爲に發達する理由がある。

そこで大阪の大都市計畫も其必要に應じて豫め出來たものと思ふ、此點は關市長が非常に炯眼であると思ふ、併し若し唯人口が殖えて日本一の都會になつたと云ふだけならば、別に意義はないが、恐らく大阪の區域を大きくしたと云ふのは唯行政上の地域を廣くしたと云ふのではなからう、必ず其後ろに何か考へる所があつて、出來たことであらうと思ふて、實は大阪市役所へ行つて、訊いて見ると、チヤンと立派な案がある、併しまだ秘密なことを申しては可くないが——無論秘密ぢやない、近々公の手續を經て發表されるであらうと思ふが、なか〳〵よく考へてある、即ち將來大阪は其地勢と經濟的努力を以て益々其施設を進め、利便を進めて行くことを想像して、それに應適するやうに、それが進行し得るやうに此大大阪の區域に對し適當な策を立てんとして、大計畫をして居られる、それには街路の計畫もあり、軌道の計畫もあり運河の計畫もあり、下水道の計畫もあり、高速度鐵道の計畫もある、是は既に發表されて居ることゝ思ふが、尚又大規模な區劃整理を行ふと云ふやうな考もあるやうである、さう云ふ風になつて來て、初て意義のあることである。

三

斯の如く、大大阪が出來た以上、之に伴つて都市計畫が行はれてこそ、此大阪の發達と云ふものが將來合理的に進行し得るのである、東京は目下復興計畫で夢中になつて居て、なか〳〵進まない、燒跡に拘泥して、山の手方面には無論力が及ばぬ、況や郡部に對しては迚も問題にならない、大阪は地域の擴張を行ふと同時に、既に是が出來て居て、寧ろ大都市計畫を行ふ爲に、此地域の擴張を行はれたものと想像するのが當を得て居ると考へる、此計畫の内容に就いては無論述べる時期でもなし、何れ市の當局から種々發表になるであらうが運河も出來、住宅地帶に公園も出來る譯で、洵に慶ばしいことである、殊に公園は大阪に少いのであつて、是こそ實に困難な問題である、今外國の例は一切述べないが、家を出れば電車にも乘らずに、三分か五分で公園と公園を連絡する散歩道にブツ突かつて、直ぐ公園に出られ、一時間か二時間散歩して歸へられる云ふやうなことになれば、洵に結構である、さう云ふ風なことまでも加味されて居るかのやうに聞いて居るが、斯の如く經濟的活動、住居、衛生、慰安各方面に於て理想的の都市に大阪がなると云ふことは最も好ましいことに考へる。

而も斯の如く計畫は定つても、財政上の實力があつて、又市民の自覺がなければ、是が實行は出來ない、そこで實は此財政上の實力と云ふことに關して述べたい問題であるけれども、省略するとして、元來日本は經濟的にさう偉くなるべき筈はないが、大阪の如きは事實上將來日本の國民經濟を背負つて立つて行くやうな勢力を扶植して來るものと考へる、又色々な點から見て有利なこともある、先にも一言したことであるが、大阪は首府でない爲に、却て利益して居ると云ふことも言へる、と云ふのは、東京に於ては大學だの陸軍だの其他の諸官廳は總て稅を出さない、之に就いては稅を出さないのは怪しからぬと云つて、經濟と財政を混同した樣な議論をする人もあるが、飛んでもない間違ひである、兎も角東京では受益者負擔と云ふことが流行つて居る、大阪でも道路を改修すると、附近の者に其費用の三分の一とか二分の一を出させるが、東京でもそれが行はれて居る、最近ト水道計畫が定つて、受益者に費用を課けると云ふことになると、大學だの陸軍だの、何處でも官廳は出さない、此下水道の受益者負擔だけでも正直に取れば、大學は三十五萬圓位出さなければならぬし、陸軍關係では二百三十萬圓位出さなければならぬ勘定になる、其外鐵道省とか司法省とか官廳は澤山あるが、是はなか〳〵重大なことであつて、東京の中央には經濟上の活動もせず、財政上の收入にもならず、所得稅も、營業稅も、受益者負擔も取れないものが澤山あるが、大阪の中央は船場島の内で非常な經濟的實力を有つて居るから、其實力から云つても、都市計畫の費用を出し得る地位にある、從て築港も自力でやれたのであるし、此大設計をやる勇氣も出來たのである、既に二億幾千萬圓を費し、今度は何でも五六億になるさうであるが、さう云ふ大計畫の出來るのはなか〳〵偉いが又さう云ふ有力な立場に在り、實力を有つて居ると云ふことを自覺しておやりになつて可からうと思ふ、又土地の關係に於ても、東京は土地と建物とが別箇の所有者になつて居て、

借地權と云ふ煩いものがある、而も比較的此事業を爲すに就いて邪魔になる場所に於て此土地と家の所有者が別になつて居る、それが爲に東京の復興が遲れて居るのである、復興計畫が大阪で行はれたらばもう疾くに出來上つて居る、即ち大阪では土地と建物が同一人の所有になつて居る場合が多い、さう云ふ點からも都市計畫は比較的やり易い、併し如何に財政上の實力があつても、亦附隨に有力な條件があつても、市民の都市計畫に對する自覺がなければ到底實行は出來ない、各個々の利益を主張し、個々の感情に走り、傳統に拘り、目前の利益に捉はれて、此處に三十年住んで居た、百年住んで居た、お祖父さんが生れた所であると云つて頑張つて居つては、なか〳〵實行は出來ない、無論私の利益を濫に侵害することは可しくない、それは市でも、政府でも爲すべきことでない けれども、落付て聽けば能く解る計算と理窟に於て自分の利益が害されぬと云ふのに、それに反抗される人が東京にはあるやうである、此點は大阪の人は解りが可い、又私益と公益が衝突し、又個々の利害が衝突する場合にも能く冷靜に考へて、互に讓り合ひ、或は株式會社を起し或は組合を拵えると云ふ風に、共同的組織でやれば、其難關を切抜けることが出來ると云ふ場合もあるが、それを新しき方法を考へずに、俺の方は損だ、俺の方は損だと云つて居つては、何時までも出來るものも出來ないのであるから、互に共同的精神を發揮して新しい方法を考へると云ふことは都市計畫を實行する上に就いて最も必要なことゝ思ふ。

一例を云へば、建築のことであるが、一體道路と云ふものは道路ばかり造つたのでは仕樣がない、二十何間とか、十何間と云ふやうな大きな通過道路には、道路に面して、之を利用する家が必ず其兩側に出來るべきであるが、此道路と敷地の關係、及び建物の關係と云ふものは合理的に之を定めて置かなければならぬ、さうでないと、道路を造つた費用の持て行き場所が無い、淀屋橋筋を二十四間道路でブツ通すにしても、皆個人の利益、傳統的精神、傳統的感情は破壞されても構はぬと云ふやうなことで、幸にして彼處は切つて除けても其後で兩側に家が出來なかつたならば、何千萬圓と云ふ費用を要けても役に立たぬことになる、トラックは通つても保存費が續かない、又家が建つたとしても、燒芋屋や、うどん屋のやうなものばかりでは仕方がない、さう云ふ小さな商賣の平屋だの二階建では可かぬ、仍ち道を造る時に兩側の敷地が合理的に發達して行くやう、三階とか四階とかの適當な建築物が出來るやうに計畫して置かなければならぬ、此の點に就いて私は東京でもやかましく言ふて居つたが、實は東京では換地に依て區劃整理をして、敷地が狹くなつても、一遍に全體の區劃整理をやることは反對があつて、迚も實行出來なかつたが、淀屋橋筋とか其他の大阪のやうな場所であれば、路が廣くなつて、狹つた土地があれば、何十年何百年からの營業の場所を失ふと云ふことは面白くないことであるから、兩側の町が經濟的に合理的に發達するやうに、適當な方法に依て共同の建築でも拵え、適當な敷地割をして、其大きな建物の中に敷地の大小に依り、職業の種類に應じて、適當に配置して營業を繼續するやうな方法を考へる必要がある、此點に就いては、我々は熱心に主張して東京市政調査會を通じて共同建築の實行を提案したことがあるが、お互に三つか四つの

敷地が合同してやらうとしても、中に狹つた二間幅位のものが頑張つて居つて出來ないと云ふやうな場合もあらう、是は多少の損失はあるかも知れないが、折角所有權を一筆々々で分けて置いても、何時までも之を利用しなければ何にもならぬ、其方法としては組合でも株式會社でも何でも可い、兎に角さう云ふ新しい企業組織の下に、先づ土地を一體にして共同管理となし、其處に共同建築をする方法を取るが可い、土地が一體になれば、それを抵當にして建築の資金も調達が出來る譯である、さう云ふ風に、道路を造ると同時に其兩側の敷地が合理的に發達するやうに、其處に三階とか、四階の建物が出來るやうに區劃整理の方法をして置かなければならぬ又共同建築が組合なり株式組織其他の方法で行はれるとして平常なら放任して置ても可いけれども、東京のやうに五百萬坪を一遍に建てるのは何十年の後にするか、なか〳〵前途遼遠である、大阪の知き今後十年程の間に何十本の路線二十何里の道路を擴築し、防火地區には防火建築をやると云ふのであるが、それが櫛の齒のやうに建ても何もならぬ、出來るだけ速く完成するやうにしなければならぬ、道路を擴築しても兩側の敷地に草が生へるやうでは可けない、大阪はさう云ふ氣遣ひはないだらうけれども、東京の一號路線上野から新橋までの如きは今の儘で進めば、草が生へるだらうと思ふ、どうか船場や島の内の中央にさう云ふ事のないやうにしたい、之に就いて一寸耳寄りな事を聞いた、大阪では信託會社の方で奮てさう云ふ所の地區を纏めて、自分達の手で家を建てやうと云ふ意見があるらしい、大阪にはなか〳〵新しいことをどん〳〵自分でやると云ふ精神が盛であつて、甚だ結構なことである、何處かに見本が出來れば可い、又それに依て段々次々に出來るやうになる、尙ほそれに就いて一寸述べて置きたいのは、無暗な高層建築は御免蒙りたいと云ふことである、素人が斯んなことを言ふと、玄人から叱られるかも知らぬが高層建築は唯地位が出來るだけ其土地を經濟的に利用しやうとして大きなものを建てるのであるが、是は危險極る、建築家は最新の學術に依て設計もせられるので、素人が生意氣な批評だと云はれるかも知れないが、それは事實危險極る、即ち最新の學術を修めた建築家が地震にも安全だ、火事にも安全だと云つて、十分に研究を積み重ねて建てられた、東京の丸の内の東京會館はあの地震でおじぎをし、何とかビルディングは上から下までブツ潰れ、丸ビルも、もう少し地震が强く、横濱位の程度であつたら、無論やられて居る、東京は幸にして横濱などに比較して微震だつたから可かつたが、横濱位の地震があつて、丸ビルが潰れたら、どうなる、二萬か三萬の人は死んで、一つの市が全滅したと同じやうなことになる、尤も地震に對しては地盤も大變關係がある、私はあの當時葉山に居つたが、直ぐ下の所は瓦一枚落ちて居ないのに、二三町先へ行くと全滅して居る、建築も金を掛けて基礎工事を十分やつて、巖のやうに丈夫にし、鐵筋コンクリートにすれば、七階でも八階でも大丈夫だと云つても、さう云ふことをして地震と喧嘩をするのも目覺しいことであるかも知らぬが、特にやつて見せて貰ふ必要はない、矢張り安全第一で以てマア四階か精々五階位の所で止めて置いた方が可くはないかと思ふ、あの堂々と聳え立つ建築を見ると、何となく不安な感に打たれる、或は百年も百五十年もしないと、大地震は

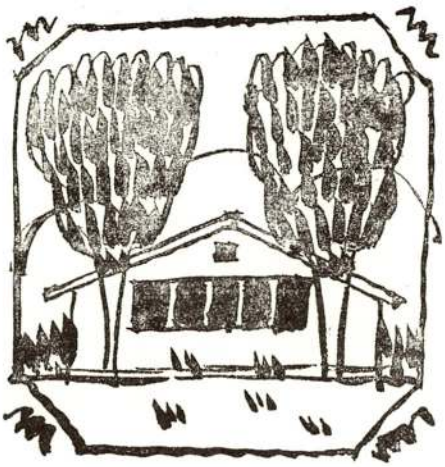
來ないと云ふし、殊に大阪は昔から大地震が無い所であるから、今後も起らないかも知れないが、東京には必ず來る——と云ふては横着なやうであるけれども、專門家に訊けば、來ると云ふことである、其の塲合あの高層建築が倒れないまでも其儘斜になつて、ピザの斜塔のやうなものが彼方此方に出來ても、幸福だとは言へない、餘り言ひ過ぎると、建築家から叱られるかも知れないが、私は都市計畫等で隨分建築家の聲援もして居るから、此位の惡口は免して戴いて可からう、兎に角あの高い建物が立つて居るのを見ると、我々は不安を感ぜさせられる、又交通の上から云つても、あの大きな建物から何千と云ふ人がどん〳〵出て來たのでは、今大阪で計畫されて居る高速度鐵道でも出來た後は卒ざ知らず、隨分混雜をして、面白くないし、衛生の上から云つても可くない、あの高い建物が立つて居ると、光線も入らぬし、通風が惡い、又斯う云ふ衛生的方面は偖て措いて、何となく人間が物質に壓迫されるやうな厭な感じがする、四階五階位までは我慢も出來るが、それ以上になつては反感を有つ樣になる、あの伯林のやうな地震の無い所でさへ、四階か五階に止めて居る、それに日本のやうな地震國で、あの殺風景な鐵筋コンクリートの障壁を彼方にも此方にも隆々と建てられては洵にやり切れないと思ふから、此建物の高さの點に就いては素人に於て確に干渉をする權利があるだらうと思ふ。

四

色々話が横路に入つたが、尙ほ先に都市計畫には市民の協力が必要だと云ふことを云つたけれども、併し是は政府も相當に考へて呉れなければならぬ、何を申しても、先だつものは金である、財政の力が豊富でなければならぬ、都市計畫には特別の財源もある、受益者負擔もあつて、大阪の人などは能く出される、私は東京で色々委員會にも出るが、大阪は斯んことをして居るのに、東京の人は何かと云つて、よく大阪を持出す、洵に有難い、市民が洵に能く理解をされてゐるから、うまく行くのであるが、結局此事業の財源は公債に依らなければならぬ、所が日本は中央政府の力が強くて、地方の力が弱い、又話が横に入るやうであるが、日本では國の事とか、中央の事ばかり研究して、一流の偉い人は地方の事は等閑にし、二流三流の人が地方の事に當る嫌ひがある、役人でも偉い人は多く官の方に行つて、地方の方へ行かないが、それでも可けない、近頃は國家の財政より地方の財政の方が段々多くなつて居るが、公債だつて、今にさうなるであらう、又人間でも今に政府の役人よりは市の役人の方に立派な人が行くやうになるだらうし、又、官吏より其民間の會社の重役の方が良い頭を有ち、實力を有つて居ると云ふことになるだらうと思ふ、私の教つた亞米利加の先生は、日本では大學でも出ると、皆官吏になるが、官吏は定つた仕事をやるもので誰でも出來る、もつと民間の仕事をするやうにしなければならぬと云はれたが、其通りである、都市の問題などは一向論じない、それは論じても餘り派手でない、外交問題などで、亞米利加は怪しからぬなど〻威張つて居ると、全國に響くから、演說して歩いても、其方が派手である、都市の問題などは聽いて居る方でも眠くなるし、大學でも地方の財政は研究しない、而も國と都市との關係は、國ばかり發達しても仕方

がない、地方あつての國家である、大阪などは本當に其實力を以て發達して居る、殊に商工業に對しては、政府から色々指圖をして、大阪の商工業を發達させてやらうとしても、出來るものでない、邪魔にこそなれ、益になることは少い、最近にさう云ふ實例も見たのである、そこで財政に於ても從來の如く何でも國へ取上げて、公債でも地方債は可かぬ、殊に緊縮の場合だから可かぬ、不景氣だから許さぬと云ふ樣な一本調子の抽象的の政策は間違ひである、今日は段々地方費が膨脹して大藏省で憂ひて居るが、洵に旦出度いことである、國費の中でも一番大きいのは國防費と教育費である、其他司法とか產業奬勵とか、色々あるが、國防や裁判の費用が一文も要らなくて濟めば洵に結構であるが、地方の事業費に至ては皆要るものばかりである、即ち道路は國もやるが、地方でもやるし、其他電車でも、上下水でも、公園でも、何でも總て我々の日常生活に必要なものである、マア工場で云へば、地方費は直接費、國費は間接費で、此間接費が段々要らなくなれば、結構であるが、直接費が多くなつて來たからと云つて、少くとも慌てるべきものでない、無論無生產的なことに使ふのは可かぬけれども、數字的に見て、國費より地方費が多くなつて來ると云ふことは大體に於て寧ろ目出度いことである、即ち從來國家が基礎工事を行つて居つて所に地方で建物を建てゝ行くと云ふ關係になることは大變結構だと思ふ、無論全般の財政政策から、金融界の狀況と云ふやうなものを觀て適當に加減はしなければならぬが、もつと地方債を自由にして、內容さへ適當であれば、之を許すと云ふことにしなければならぬと思ふ、大阪で既に計畫された何億かの募債でも政府に抑へられて出來ぬと云ふことであるが、日本第一の經濟的實力を有つて居る大阪市に於て是で出來ると云ふことで、算盤を取つて借金をしやうとする場合、其事業の內容が適當にして必要なものであるならば、其爲に數千萬、數億の借金をしやうと云ふことに對して之を外部から壓迫すべきものでないと思ふ、況や唯抽象的な非募債主義と云ふやうな概括的方針の下に、大阪の都市計畫事業の進行が阻止されたと云ふことでは、大阪市として非常な損失であり、又事業の衝に當る人も洵に不安で困ることだらう、斯う云ふ事は政府の方に於ても出來るだけ眼を開いて貰はなければならぬと思ふ。

そこで問題は唯計畫だけでは可かぬ、實行が之に伴はなければならぬのであるから、市の實力と政府の理解と云ふことも必要であるが、市民諸君自から能く此問題の內容に就いて理解をお有ちになつて、協力して此事業の遂行に當らるゝと云ふことになれば、曾て太閤秀吉が造つたものよりも、非常に立派な近代的の大大阪が實現されるに相違ないと思ふ、此點に就いては現在の關大阪市長が非常な炯眼を以て大計畫を立てられたと云ふとは曾て佛蘭西のセーヌ縣知事ホスマン氏が巴里の大改革を計畫されたと同じ、否それよりも遙に大きな事業であつて、是が遂行は固より計畫者の熱心だけでは足りない、市民諸君の理解協力と云ふことが最も大切であらうと思ふが故に、私は幸にして大阪は昨年日本一の大都市になつて、洵にお目度いが、併し其內容も良くしなければ本當の意義が無いと云ふことを茲に一言して、大阪に住まれる諸君の將來の生活を幸福にし、或る程度まで理想的の生活を行ふに就いて必要な此大大阪の都市計畫事業が着々として進行せられんことを希望する。（文責在記者）



道路と住宅

都市問題の一考案（二）

楠原祖一郎

三　道路問題

a、路幅の問題

一昨年の大震災の事跡に鑑みて、市區改正的道路計畫が、その根本に於て用を爲さゞるに至つたと云ふ事は、前章の總論的考察に於て若干述べて置いた所であるが、元來日本の道路開鑿の標準は、兩側の建築物の高さ及びその形狀、又は其の附近街衢の人口密度等に比例して科學的に算定せる絶對交通量と、その路面を交通する移動交通量即ち相對交通量とを比較し、その最高最低時並びに平均時交通量を考察對象として設けられたものではなくて、封建時代の都市形態の上に歐米都市の形態を据附けんとした結果として、道路の如き極めてそれに相應しからざる狀態を呈するに至り、交通量の如き平時に於て何等の統整もなき狀態であるから、一朝有事の場合の如き混亂名狀すべからざるものあるは豫想するに難からざる所である。一昨年の事態を體驗せるものにありては如實に判斷し得る所であらうと思ふ。されば私共の考へでは一本の道路を開鑿せんとするに當つても、絶對的並びに相對的交通量の一方のみに偏せず、その平均絶對數を算定して以て、その數の自象交通量を先づ第一のスタンダートたらしめねばならぬと考へる。これは少し技術的の問題であるから、吾々の如く都市問題を經濟政策的に見むとするものに取つては、評論し得ないのは遺憾ではあるが然し乍ら專門外の事ではあるとしても、之れだけの論據を市街交通量の科學的推定に當つて生み出すには敢へて困難ではない。

ブラッセルの市街は、小巴里の如く極めて整備された道路を所有して居る。而して市街全體が實によく行屆いたものであつて、それは此の市の富の程度が、比例の上から見れば世界

一と云はるゝ紐育の富よりも勝れてゐるためでもあらう。そしてその富の程度がよくその市街を整備するの負擔に堪へたものであらうと考へられるが、今ブラッセルの大通りの一つアベニュウ、ルイズの例を取つて見やう。

ブラッセル市のメーンストリートたるアベニュウ、ルイズは、路面の交通量を整理せんがために、何れの部分も五つに分類されて居るが、其の兩端の煉瓦道は又各々二つに分たれて、それが市街軌道（ストリートレールウオー）と側道（サイドウヰーク）となつて居る。中央の道路は貨物自動車の專用路に當てられ、是等の路面を區劃するために各々二列に樹木が植へられて居る。而して此の通りは合計七筋の路に區劃されて居るのであるから、その交通量の如きどれだけ增減があるとしても決して混亂に陷る樣な事はない實に市街美は建築美よりも樹木美にあるのであるから、かくの如き幅の廣い樹林が大廣路の上で綠のトンネルを形成してゐると云ふ事は、都市美觀の增大もさる事乍ら、一朝有事の場合に際遇すれば、完全に近き防火壁の作用を呈し幾多の危險を免れしむるは、彼の帝都大震災の事實に鑑みて說明を要せざる所であらう。

要するに路幅の問題は、都市計畫上の實際問題であつて、議論のみに依つて決定いたし兼ねるは素よりであるが、併し乍ら一片の地圖の上に赤色線を描いて以て、道路幅員の基本たらしめんとする從來の計畫は、大いに考省すべき餘地がある樣に思はれる。

b、路面の補裝問題

帝都の大震災の實際に徵して路面の補裝を考ふるに、アスファルト、タークレー等に依る補裝は、火災に依る强烈なる溫度のため、可燃體たる是等の補裝材料は自壞作用を起した結果、安全地帶への避難に際して甚だしき障害となり、そのために貴重なる生命財產に大なる損害を蒙つた人の多々あつたと云ふことは著明なる事實である。而して又現に路面補裝の理想的手段たる木煉瓦の如きも、可燃體たるに於ては前同樣であるから等しく危險と認むべきではあるが、併し乍ら前者の如く可溶性物體ではないから、路面補裝の木煉瓦は燃燒するに至ると云ふ事は、先づあまりないと見て差支へないが其他の補裝材料たる石材及び同物質の如き、路面補裝材料としては少しく考へなければならぬと思ふ。路面を補裝する直接の目的は、交通の安全にあり、路面の淨化、都市美の增進等も重要なる目的であるから、平常はその質の問題に止まつてゐても、有事の場合はその可否が問題となるのである。かゝる場合は寧ろ自然の儘である事が安全であり得ることもある。即ち有事の場合に想倒すれば、路面の補裝必ずしも是ならずとも云ひ得るのである。

更らにブラッセルの實例を引用すると、同市は往來の美くしさよりも、裏町通り（バックストリート）の美くしさを以て有名である。故に如何なる裏長屋（テーニメント）に面せる路面でも、石材や煉瓦を以て隈なく補裝されてゐるので、實は足を傷めるものが非常に多いと云ふ事である。そうした積年の餘弊が終いに不具者を生み出す結果、同市は跛足者が極めて多いと云ふことである。故にブラッセルの人々は日曜日になるのを待ちかねて遠足に出かけ、土の道を步ゆむことを一日の樂しみにしてゐるとは、我國の實情に照して實に皮肉の感を禁じ得ざるものがあるのである

是の例は單に平常に於ける一例に過ぎないが、以て他山の石たるの價値を有するであらう。

飜つて我國の狀態は如何と見るに、先づ如何なる都市と雖もその都市計畫事業は　路面の補裝から開始されてゐる狀態である。即ち現に六大都市の該事業の如き、巨額の費用を投じて、先づ自然の路面を人工によつてそれを補裝する事から初められて居るのは周知の事實である。

さて然らば路面の補裝は好ましからざるものであるかと云ふに、決して然るものではない。現今の都市を整備し淨化する上に於て路面の補裝は不可欠の問題であるが、要はその補裝の質の適不適の問題であつて、より自然に近き狀態で、而かも完全に補裝さるゝ手段が發見されゝば補裝路に勝つた道路はないのである。只だ至る所石材又は硬質煉瓦を用ひて補裝するよりも、木煉瓦等の軟質物體を以て全路面を補裝しては如何と思ふが、然かし本問題は技術上の問題であつて、尙それらの特殊的手段に依つて都市衛生上如何なる影響あるやの問題をも考察する必要があるから、吾々の範圍外に屬する問題である。只だ一言附加したいと思ふのは、先年衛生學者の一部から都市路面の木道補裝は、空氣中の必要なる水分を吸收し、且つコルタールの惡臭を放散するは却へつて宜しくないとの說が出た樣であるが、木煉瓦補裝を以て理想に近いものと考へてゐる吾々も一考すべき說であると思ふ。

c、道路の機能

我國諸都市でも、又英國の諸都市中殊に倫敦市でも道路の形狀は極めて不規則で、そのために交通の形が隨分亂れ易いものとなつてゐるのである。

普通道路計畫の大綱は、ハワードのレッチウォース田園都市の例、又巴里の例等に徵するも、市街形態の如何に依つて先づ都市中心（都市心臟）を形成し、然る後それから市の郊外に通ずる少くとも八條以上の直線放射式路線を設定せらるゝ事になつて居る。而してそれを多數の環狀式補助路線に依つて各放射路線に連絡し恰かも蜘蛛の巢式道路網を張る形になるのである。この計畫に基づいて市街衢の關係を推定して路幅、補裝材料の種類等の考察に及ぶのである。是の關係が齟齬して道路の機能を決定する重大なる因素となるのである。一の路線の機能が、充分に發揮されないと云ふ設計上の誤謬が不注意の間に實現したとすれば、その路線に沿ふ街衢の居住者は永久に取返し得ない損害を招く事になるのである。

世界の各都市から放射路線の模範として尊ばれつゝある巴里の路線は、都市研究者の垂涎を禁じ得ない所のものである故に市の中心部に大なる激變事が突發する樣な事があるとしても、直線式に伸びた放射路によつて速かに安全地帶に搬出し去る事が出來るのである。元來巴里の計畫は、ルイ第十四世が皇居を有する市街を壯大且つ優美ならしむるための計畫を以て、皇帝の威嚴を增進するものと認め、當時倫敦大火災後の復興計畫に當たれるイリストフア、レンの計畫を以て過大なる事業として、時の倫敦市民はそれを容れず、それより後ナポレオン第一世が更らに帝都修築に意を用ひ、巴里市長オースマンは熱心にレンの計畫を取り容れて以て今日の巴里を築いたのであるが、レンの計畫は今日に於て尙よく世界各都市の模範とするに足るものがあると云ふ事實を見て、吾々

は深く考へさせられるのである。

都市計畫と云ふ概念は約言せば、都市生活から危險と云ふ文字を無くするにあるのである。所が英國の數多の都市や我國の諸都市の如き迂餘曲折甚しき市街路線を有するものにありては、此の概念を除去すると云ふ事は中々困難であらうと思ふ。

我國では震災以後の都市計畫事業實行の上に於て、當時の倫敦市民の轍を踏まざる程の度量と企模を以て、必要なる計畫を進捗せしむべき覺悟がなければならぬ。

四 住宅問題

a、石造住宅と木造住宅

石造住宅即ち洋風住宅と木造住宅即ち和風住宅とは、吾々に別個の感を與ふるは云ふまでもない所であるが、日本人にして初めて外國に旅行し、アッパートメント式の住宅に居住したものはその時の感じを以て甚だ不愉快なものとしてゐる人が多い樣である。そは何故なるやと云ふに、西洋諸都市の住宅は、何れも石又は煉瓦を以て築き上げ、吾々日本人の日頃居住せざる家屋に居住するためでもあらうが、第一に甚だしく窮窟であると云ふ事がその不愉快ならしむる直接の原因と見らるゝであらう。我國の住宅の如く隣室をば隔一枚を取り外して自由に併用すると云ふ事は、アッパートメントに於てはそう云ふ自由が利かないと云ふ事が、かくの如き感を懷かしめたのは勿論である。而して又一棟の住宅に多人數の異家族が出入すると云ふ事も、習慣上一戸一家族主義の我日本人に取つては同化し難き原因の一つであらう。

併し乍ら一歩飜つて國内の事情を察する時は、是れ又甚しき矛盾を感せざるを得ないのである。それは帝都震災後の傾向として、不可燃物を以て住宅を築かうとする傾向が、大都市特に東京、大阪等の地方に著しくなつて來た事である。此は素より當然の傾向であるが、外國での不愉快を日本で更らに繰替へすと云ふが如き事になりはしないかと思ふ。私共は素より都市の中心部は、此の不可燃體の建築物を以て充して行くと云ふ事を當然の事としてゐるのであるが、所謂市郊外（ガーデンサバーブ）の住宅地域に於て、不可燃體の住宅を充して行く程も、我國風を無視するの必要もなからうかと考へるのである。それは兎も角として地價の高い市中央部（シヴィックセンター）に平面的な日本住宅を建設すると云ふ事は、危險率の上より見るも、都市衛生の上より云ふも、それは當然避けなければならぬ所のもので、該地區は不可燃質の高層建築を以て充す事を當然としなければならぬ。

而して石造住宅と木造住宅の可否の問題であるが、一般的に見るならば、單なる一義的な可否の問題ではなく、地域の如何に依つてその可否を條件づけなければならぬと思ふ。

帝都の大震災では、木造家屋に於て比較的倒壞率少なく、石造其の他類似のものに於てより多くの建物が倒壞したのに見るも、前者に比して後者の方が倒壞率少なく、隨つて危險率も輕るいと云ひ得るが、その代りに火を失すれば忽ちにして燒盡さるゝは免れない。

故に一都市に於てその地域を按じ、住宅地帶として有事の場合に危險率尠なき地域に於ては、改良されたる我國古有形式に則れる木造住宅を以て可とすべく、又市の中央部にして

有事の場合危險を感ずる事最も高き地域に於ては、石造又はその類似の建物を以て可としなければならないのである。されば木造家屋可、石造家屋否とも云ひ得ないし、その反對の場合に依るも絶對的に可否を明にし得ない。要するにその可否は地域の如何に隨ふを以て最も至當としなければならないのである。震災後の住宅問題を論ぜんとするものにありては常にこの見地に立つ事を以て最も必要としなければならぬ。

b、人口密度と戸數

東京市の人口密度は、震災前の狀態に依つて見ると、一方里の地域に四七一、九六五人と云ふ事になつて居る。即ち東京市の總面積は五、一六平方里であつて、そしてその人口總數は二、四三五、三一〇人であるから、密度に換算すれば右の如き數字が現れるのである。又此の狀態を一戸宛平均居住人員に換算すると、戸數總計六三九、八五九戸であるから、一戸宛の人員は三、八二人となる譯である。又同じ論據に依つて大阪市の狀態を見るに、同市の面積は——尤も舊市域に屬するものゝみによれば——三、七九平方里であるから、現住人口一、三四六、四七一人を一方里宛に換算すると、その人口密度は三五五、六六三人と云ふ數字を示すことになる。而してそれを一戸宛平均居住人員に割充てゝ見ると、現在戸數三〇〇、三二四戸であるから、恰かも一戸宛の平均人員は四、四八人強と云ふ事になるのである。（大阪市の數字は接續町村編入前の數字に依つたものである）

今兩市の狀態を比較して見ると、震災前の東京市は、大阪の舊市街に比して、面積、人口並びに現在戸數の三者とも、全く二倍せる數字を有してゐる事を知り得る。而し兩市の一方里宛平均居住人口密度は、東京市の方が大阪市よりも、同一面積内に一一六、三〇二人だけ多く居住して居る事になつて居る。又一戸宛の平均人口を見ると、東京市は一方里につき十一萬六千餘人も大阪市のそれより過群であるにも不拘、一戸宛の人口は大阪市のそれよりも〇、六六人方居住率が少ない事になつて居る。而して更らに是の狀態を百萬坪の廣さに換算すると、東京市の中震災時に其の慘害の度最も甚だしかりし、本所、深川、淺草の各區に於ては。同面積内に約十二萬人の人々が居住してゐた事になるのである。が而し之を大阪市の狀態に比較すると、大阪市中最も居住狀態の過密なる地區として有名なる西北部、豊崎、福島・野田の各地區の如きでさへ、百萬坪の中に約八萬人位の數であるから、東京大阪兩市の何れが他に勝れてゐるかと云ふ事は少し判斷に苦しまざるを得ないのである。併し乍ら此の數字は何れも社會統計の上での示數であつて、之を以て實情を臆斷する事は少し妥當を缺ぐのである。その故は、一戸宛平均人員に見ても東京市の三、八二人、大阪市の四、四八人は如何に實際的居住狀態と相去る事遠きかに依つてもそれを知り得るのである若しジャコビーの言の如く、人口密度の高き地域を以て文明の度高きものとするならば、人口密度低き山の手方面は、本所、深川、淺草等の文化に劣つて居ると云はなければならないが、這は然かし何人もその妥當ならざるを容易に發見し得るであらう。

凡そ人の居住する所には自然的に或る目に見へざる統制が作用しつゝあつて、そは頗る正確なる度を刻みつゝ進行する

ものである。かくの如き作用は人口密度の超過せる上に加へられ、極度に人口密度が高張せば、そこには自から密度の自壊作用が起り、自然的に過群狀態が低下する傾向をも吾々は考察の中に加へて置かねばならないが、さり乍ら僅か百萬坪內外の面積內に十二萬人以上の人口が、混住してゐると云ふ事は、一朝有事の場合に如何に大慘事を演出するかは、贅言を要せずとも、彼の本所、深川の兩區に於け震災當時の大慘害を想像せば、何人と雖も慄然として言ふ所を知らないであらう。

c、市民生活と人口密度

人口密度の稀薄なる田園地方では、慘禍が發生してもその受くる所の損害の程度は極めて僅かであるが、東京大阪の如き大都市に於ては一方里の地域に數十萬の人口を包含してゐるのであるから、一朝有事の場合は一昨年の如き人智を以て測り得ざる大慘害を蒙むるに至るのであつて、かくの如き市民生活の上に降り來たる大なる危險は、全くその人口密度の疎密に依つて判斷し得る程に、市民生活と人口密度は不離不即の關係にあるのである。

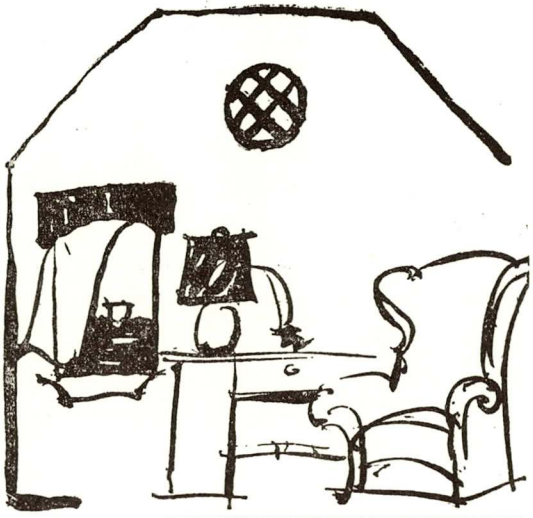
而して凡ゆる都市問題研究家の等しく着目しつゝある所の如く、かくの如き人口密度の過群狀態は、非常狀態に際しては不測の火災害を逞しふせられ、而かも平時の場合に於ては市民生活を極めてルーズに導き、環境の不自然に依つて幾多の犯罪が生み出さるゝのである。即ち男女間の醜惡なる性的鬪爭や、强盜、殺人、放火、姦淫等の忌むべき犯罪の動機が不斷に媒養されつゝあるを憶ふ時、吾等は實に慄然たらざるを得ないのである。

而して此の如き人口の過群は、人口食盡者としての都市的頽廢を生み出すと云ふ、前述せる人口の都市集中に關する諸學者の說の如き論據を造る事にもなるのである。

憶ふに人口が都市に向つて年々集中して息まぬと云ふ直接の原因は、文化が都市に停滯して動かず、爲めに地方田園を調ふしむるに至らないと云ふ事が、その原因の一つであるがその文化と云ふは即ち凡ゆる人文機關が都市にのみ設置せられ、地方に放散されない所のものを云ふのであつて、かゝるものを適宜に各地方に配置する事によつてその弊害を矯正する事が大體に於て可能であろうと思はれるのである。かくの如き考察が田園と都市を調和し、震災後の分散的都市計畫への一傾向を益々助長するために加えられなければならぬのは云ふまでもないことである。

市民生活を潤ほし、その危險率を除去するがための都市計畫事業は、特に震災の洗禮を受けたる帝都を初め、其の他の大都市に於ては、先づ人口の密度を如何にして放散し以て適當に緩和すべきかの方途を講ずる事を以て緊急の目的としなければならぬと考へる。

而して此の目的の實現に積極的の効果を與ふるものは公園の利用であろうと思ふ、私は以下公園の問題に就て若干の論議を加へたいと思ふ。（續く）



不良住宅地區改良法要綱を見て

伊藤俊雄

新聞紙の報ずる處に依れば、曩に內務大臣から社會事業調査會に諮問されてゐた不良住宅地區の改良事業は、同會に於て其の法案の要綱を審議の上、內務省社會局ではいよ〳〵該法案を來議會に提出すべく決定したとのことである。

我國に於て都市計畫と稱する事業の殆んど全部が單なる土木事業に止まつて道路改良事業の別名に過ぎない現狀を深く遺憾としてゐる吾等は、社會局が不良住宅改善の叫びを擧げたことを聞知した時、心からの悅びを禁じ得なかつたと共に果して如何なる方策を樹てゝ此至難なる問題を處理するかを多大の期待を以て待ち受けてゐたのであつた。然るに這般傳へらるゝ所の改良法案要綱なるものを見るに及んで——素より夫れは新聞紙上に傳へられた文字通りの要綱に止まつてゐるのであるから今日之を評するは早計に失するが——著しく失望せざるを得なかつたのである。

即ち其の要綱として傳へられた所は九月末の各新聞紙上に報道せられて居るから、其全文を再び茲に繰返すの煩を避けるが、之を摘記すれば概ね左の八項である。

一、不良住宅及不良住宅地區の定義
二、改良事業の內容
三、事業執行者
四、事業執行手續
五、地區內居住者の保障
六、費用負擔、國庫補助及補償
七、土地、工作物の收用、並に改築、除却、使用禁停止

八、強制及救濟

之を通じて最も吾人の失望に堪えない點は、その內容の殆んど全部が既存の法規、換言すれば市街地建築物法若くは都市計畫法中に規定せらるゝ處であるのみならず其の手續を從前より却つて複雜煩瑣なものとしてゐる事が其の一である。

市街地建築物法第十七條は建築物が

一、保安上危險と認めらるゝとき、

二、衞生上有害と認めらるゝとき、

は其の除却、改築、修繕、使用禁止、使用停止其の他の必要なる措置を命ずる權能を行政官廳に附與してゐる。若し更らに不良住宅の收用を圖らむとするに於ては都市計畫法第十七條は

衞生上若くは保安上の必要に依る建築物整理の爲必要あるときは建築物其の他の工作物を收用し得ること、

を定め、且その收用に關しては土地收用法を適用する旨をも規定してゐるのである。此等規定に依つて、行政廳又は都市計畫事業執行者が比較的簡易に不良住宅若くは不良住宅地區の改善を施行し得る途が拓けあるにも不拘、本改良法案に依れば改良を要すべき地區の指定にすら主務大臣に對する申請關係市町村の意見諮問、內閣の認定を經ることを要するのである、何を苦んでか手續を更らに複雜困難にせむとするのであるか、形式の尊重が我國官場の常套であるとは謂へ、さりとは餘まりな煩はしさではないか。

更らに吾人が本案に就いて遺憾とする第二は、地區關係人の庇護厚きを致して、其の結果却つて改善事業の實施を困難ならしめはしないかと謂ふ點である。

前述の如く市街地建築物法は、不良住宅の除却、改善　行政處分に依ることゝし、之に對して補償の規定を設けて居らぬ。即ち同法第十八條第二項の規定に依り、損失補償は其の施行令第十七條に定められたる五號の一に該當する場合に限られ、這箇不良建築物の除却其の他に對しては何等補償を要せないのである。蓋し之當然の規定であつて、保安上若くは衞生上危害ある建築物の除却又は改善の受忍は該所有者當然の責務である。

然るに本要綱は建築物其の他工作物に對し改築、除却、使用禁止、使用停止其の他必要なる措置を命ずるときは公共團體をして命令の定むる所に依り其の損失を補償せしむとするものゝ如くである。

一方之を社會政策的に觀察するも、此規定に依つて救濟せらるべきは、斯る不良住宅に居住を余儀なくせらるゝ人々にあらずして、反つて之等不遇の境地に在る人々に對し、比較的不廉一時として或るものは甚しく不當なる家賃を徵取しつゝ而も賃貸物の改善に關し毫も意を用ふる所なき家主の輩であるといふ不合理を見るであらう。

更らに改良住宅の使用條件は地方長官の承認を要する旨を規定せむとする如きに至つては、國の機關として不良住宅地區改善の任に當る行政廳を貪慾なる世間並の家主扱にせむとするものであつて、何の必要に基くや吾人の了解に苦しむ處である。

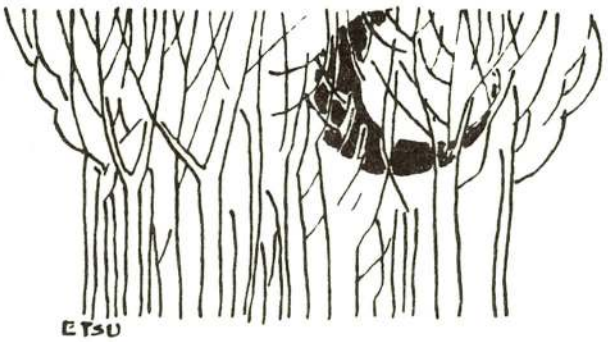
不良住宅改善の提唱あるや吾等の最も期待したる處は寧ろ改良住宅の建設手段であつた。事業の主體が國家であると公共團體であると將又私人であるとを問はず、如何なる方策に

依つて住宅建築の目的を達成若くは助成せむとするか、之が爲に如何なる資源を事業執行者に與へむとするか等の點こそ吾が踵を擧げて待ち望んだ事項である。此點に關して法は僅かに二分の一額以内の國庫補助を以て解決せむとするものゝ如くであるが、今日の如く財政的多難の時代に遭遇せる公共團體が果して半額國庫補助に隨喜して能く之を敢行し得るであらうか。或は之を私人の經營に俟たむとするも、其の條件にして甚しく寬大ならざる限り、恐らく探算を無視して此至難なる事業を企つるものはあるまい。蓋し下級階級を收容する住宅管理の困難なるは今更言ふを俟たないものあるからである。

更らに法は一定期間後に於ける事業着手を强制せむとするものゝ如くであるが、必要なる權能と財源とを伴はざる强制は畢竟死物である。殷鑑遠からず同じく國の事業として行政廳の執行すべき都市計畫事業——公共團體の負擔すべき費用最低限度の强制迄も法定せる事業が費用負擔者の熱烈なる要望にも不拘、反つて政府當局の冷淡に禍せられてその進捗の極めて微々たるは既に人の識る如くではないか。而も都市計畫事業に於て政府は六大都市の道路事業の如き其費額三分の一を國庫補助すべき當初の言明を惜氣もなく放擲し去つて公々然として補助の打切りを聲明してゐる有樣なのである。

不良住宅の存在は獨り六大都市に限られずして、若干の都市に於ては其慘狀更らに甚しきものがあり、之が改善は實に一日を忽にすべからざる當面の急務である。大都市のそれにのみ力を盡して、他都市を顧みざる如きは爲政の正道と云ふことが出來ぬ。而も十年の後を待つて之を及ぼさむとするならば之餘まりに悠長に過くるの譏を免れぬであらう。

以上は只新聞紙上に散見する所に依つて之を論じたものであるから事の眞相を謬まれるもの定めて多かるべく、決定せらる可き不良住宅改良法は當局の經綸と抱負を活現するに於て還憾なきものであらうと考へるのであるが、不取敢世上宣傳せちるゝ所に就いて吾等の思ふ處を述べた次第である。幸にして吾人の杞憂に止まらば悅び之に過ぐるものはないであらう。（十月二日夜稿）



人間の都市

（下）

藤田一郎

四

今日の西洋の大都市は、みな、産業革命後において、にはかに發達したものである。わが國には産業革命なるものはなかつたが、産産革命後に發達した西洋の文化を直輸入し、それにまねて、現代の文明をつくりあげたがので、わが國の大都市も、西洋の大都市とおなじく、産業革命の産物、産業主義の結晶といつていゝことになつてゐるのである。

産業主義と、藝術美とが相容れないことは、今さら説くまでもない。産業主義は、その殘忍酷薄ともいふべき現實性と實用性とをもつた、すべての藝術美を破壞して、あらゆる醜惡をうむ。現實の價値ばかりを問ふて、本質の美醜は一切問はない。ちやうど、目的のために手段を選ばないのと同樣に實際に役だちさへすれば、それで絶對價をつけられるのである。産業主義を譬ふれば、口に頗る苦き良藥のごとし。藥そのものには、何の味もなく、匂ひもないのみならず、却つて舌の快感を損ふものであるけれども、一命にはかへられずにせうことなしに呑みくだすのである。現代の大都市は、實にこの産業主義の良藥を過度に滿喫して、むしろ不消化に陷りまさに嘔吐を催さんとしてゐる。

産業主義と藝術主義との相容れない理由には二つある。第一にそれは、常に新奇を逐うて、革命的であるからである。すべての製産品に、永久性なるものを求めない。すべてその場かぎり、目さきだけをゴマかせばいゝので、けふの事はけふのこと、明日のことはまた明日のことである。さういふ商品に、力をいれ、心をこめる氣になれないのは當然である。しかもそれが主として機械によつて大量製産されるといふわけで、人間の創造本能の働らかなくなるのも已むを得ぬ。

第二にそれは、競爭的商業的であるからである。すべての製品は、本來の價値によつて評價されずに、利益の如何を標準として、その價格を定めるのであるから、だゞ見た目の上で價値のあるらしいものを尊んで、本質の如何は少しも問題にならない。ちよつと見た目に缺點の分らないやうな、イカさまものばかりがもてはやされる。いかに本質上すぐれたものでも、生産過剰となりて、その商品的價格が忽ち下落すれば、本質上の價値までも失つてしまはなければならず、本質上何等の價値を有しないものでも、市場の缺乏によつて、法外な商品的價格を生じると、本質上の價値までも、向上したやうに受けとられる。賣買とか、利純とか、多少とかいふ第二義的の事情によつて、その價値を上下するから、たゞこの第二義的の事情にのみ氣をとられて、本質的にどうしやうといふことを念頭におく遑がなく、またこれを念頭におくのは馬鹿の骨頂といふやうに考へられる。

この産業主義がらでき上つた産業都市に、美的要素のかけてゐるのは、これまた極めて自然のとり合せである。産業主義からできた産業都市は、勢ひ産業主義からできた商品のやうなものでなければならぬ。産業主義からできた商品が、競爭的商業的の賣買本位、市場本位であるとほり、産業主義からできた産業都市は、たゞそれ實用的である。空地などは殘さずに、方寸の土地も、これを最大限に利用しなければ已まぬ。土一升に金一升のやうな場所に、公園などを設けるのは贅澤極まる沙汰だといふ。美術館や音樂堂は、無用の長物だといふ。土地の上に建てる家屋なども、たゞ〳〵實用本位で藝術美はホンのつけたりである。政府が建築物法をつくつても、單に能率本位、保安本位であつて、美的要素については一言半句も發見することはできない。都市のシヴイック・センターは美觀地區とも呼ばれてゐるが、これを見ても、美觀はたゞシヴイック・センターに限るものといふ、極めて極限された不徹底な考への一般にきわだつてゐることがわかるのである。全市いたるところ、美觀地區であるやうにならなければ、本當の人間の都市は建設されるものでない。

さらに、本當の人間の都市は、たゞに外觀の美を整ふるだけでは不十分である。必ずそのうちに、藝術家が惠まれたる生活をし、その才能がはぐゝまれるやうなものでなければならない。そのうちにすむ個人が、その藝術的能力を十分に發揮し得るやうな生活の雰圍氣を磅礴せしむるものでなければならない。藝術の歷史を見ると、藝術的能力の十分の九ほどまでは、その社會の傳統的能力に依存し、僅かに十分の一ほどだけが、個人的能力に依存してゐるやうであるけれども、しかし、藝術の美花を開かしむるにとつての重要さにいたつては、この二つの間に、何等優劣の差を設けるわけにはゆかない。常にその社會の傳統的能力と、その時代の個人的能力

とが、相助け相伸ひあつて、初めて藝術の精華が土かはれてゆくのである。ところが産業主義一點ばりの都市の生活は、この二つの能力を、無殘にも萎縮させてしまふ。むかしのアゼンスや、ヴエニスや、フロレンスに、藝術の發達したのはそれ〳〵商業都市であつたとはいへ、いまだ産業化され、もしくは競爭化されなかつたからである。

都市の區域内に、藝術家の安住を不可能ならしむるやうな都市はわざわひである。

ニューヨーク市のずつと下町の方に、グリーンニッチ・ヴイレージといふ一區劃がある。あの極端な産業都市のまつたゝなかにおいて、奇異なる特殊の地方色を發揮し、文學者や畫家や、音樂家はみなこゝに集まり住み、みなヴイレジヤースの一人と稱して一つの別個の社會をなしてゐる。あの雜閙の都市、現代のレヴイアサンともいふべきニューヨーク市のうちにも、産業主義の澎湃たる狂瀾怒濤にとりかこまれながらかうした平和な精神的王國がとりのこされてゐるのである。事務と能率とのばけ物のやうな摩天閣の影にかくれて、かうした藝術家のアトリエや、スチユデイオの集團する藝術の巢窟のあることを見逃してはならぬ。

いかなる都市も、間口と、表玄關のこけおどしばかりで、ゆかしく、美しき心の奥行を缺いてゐては、決して人間の都市とはいへない。

五

産業の發達に科學の必要なことは、いふまでもない。産業革命以來の學科の發達には、眞に驚くべきものがある。しかしてこの科學の進歩とともに、今日の都市は膨脹して來たのである。この意味において、現代の都市は、科學の産物といつていゝ。それは實に科學的智識の淵叢なのである。

しかし、この科學的智識の發達は、人間を、人間とせずに人形にした。科學的智識の發達による都市を、人間の都市とはせずに人形の都市にしてしまつた。これは何によるのであらう。智識があまりに實用一方に傾いたからである。何人も多少の智識をもつものは、まづそれを何かに役だゝせねば、智識をもつてゐる甲斐なきものと考へ、また智識を獲得するにも、これを用だゝせるのが唯一の目的で、智識を智識として樂しむといふやうなことがないので、學問を研究しても、心にすこしのゆとりも出來ないのみならず、それが却つて、智識の創造性を殺してゐるのである。人間が科學を驅使することができずに、科學が人間を驅使してゐる。人間が科學の主人ではなくして、科學が人間の主となつてゐる。

メンデリズムの發見者メンデルは、特に遺傳の原理を發見せんがために、豆作りをしたのではない。その餘暇を樂しむために、利害を離れ、實用を超越して、豆作りの喜びに我れを忘れたのである。實際の百姓がいかに豆作りをしても、メンデリズムなどは發見されない。無線電話の發明者ファラデー、マックスウエル、ヘルツ等も、單に物理學に興味をもつてゐたゞけである。その智識のために智識を愛する熱心と公明とが、遂に無線電話を發明したので、今日のやうに戰爭の兇暴に用ゐられたり、ニュースや音樂の放送に用ゐられやうとは夢にも考へなかつたのである。アメリカでは純粹理論があまり發達しない、今日廣く應用されてゐる基礎的發見でア

メリカ人の手になつたものは、まだ一つもない。これは科學智識の實用的方面のみが重んぜられるからだといはれてゐる

現代の都市生活では、偏へに智識の應用が說かれ、實用の點のみがやかましくいはれる。智識を智識として樂しむやうな施設は、全く缺如してゐるのである。しかし人間は、智識の應用よりも、むしろその鑑賞に本能的の滿足を感ずる。

バートランド・ラッセルは、その『產業文明の前途』中に左のごとく述べてゐる。

第一に純粹科學は、その應用よりも、無限にもつと價値あるものである。第二にその應用は、大たいにおいて、從來は殆んど測るべからざるほどに有害なものであつた。有害でなくなるには、一般の人生觀は、今少しく餘裕のある悠長なものにならなければならぬ。

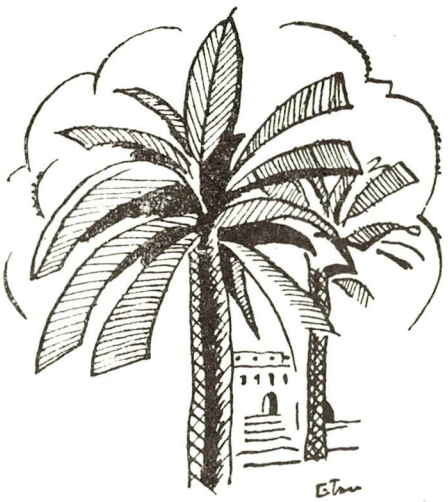
まづ第二の點からいうと、科學はこれまで、主として三つの目的のために用ひられてきた。一は商品の全製產を增加するため、二は戰爭をしてもつと恐るべきものたらしむるため、三は藝術的、衛生的價値あるものゝ代りに、ツマらない安ツぽい娛樂を供給するためであつたのである。

全生產を增加することは、今から百年も前ならば、頗る重大のやうに考へられてゐたが、それは今日では、餘暇を增すこと、生產を賢明に指導することよりもむしろツマらない問題と考へられるやうになつた。

娛樂の墮落については、劇場に代ふるにキネマをもつてしたことだけをみてもわかる。蓄音機のレコード音樂と、ロシア土民の美しい民謠とは、とても比較にならない。科學が娛樂の世界に入りこめばいりこむほど、それは、ます〳〵非藝術的となり、いよ〳〵ツマらないものになつてしまふのである。

純粹科學は應用科學よりも、一層大なる價値をもつてゐるといふことについては、問題はいよ〳〵深遠となり解說がむつかしくなるが、應用科學は、人間が現在のやうな考へを捨てない限り、ます〳〵好もしからざる結果を生ずるより外に道はない。自然界のプロセスを研究したり、いかに宇宙が構成されてゐるかを發見したりする純粹科學は、人間のする仕事のうちで、最も神の業に近いものであると思はれる。余はしば〳〵地球上の人物が、ある彗星の通過によつて、一筆に拭ひ去られるやうなことがあれかしと望むときには常に、科學的智識と藝術とを考へる。この二つは實に人生をして全然空漠ならしめまいものである。しかし科學の『効用』は、その最善においても、結局低き水準にある。科學よりも價値ありとする哲學は、結局誤謬であつて、いつかは科學を破壞するものである。

いろ〳〵都市的施設が、科學の應用、智識の實用ばかりに重きを置かず、純粹科學の研究、智識そのものゝ法悅をひきおこすやうにしむけられなければ、結局人間の都市はでき上らぬ。



朝日會館

中尾保

最近渡邊橋畔に眞黒な大入道の樣なヌッとしたしかし何處となく犯すべからざる或物の存する建物が出來た、そこには「朝日會館」と明記してある。

專門家であると否とを問はずこの建物を見て果して何を感ずるであらう。吾等は今この建築の巧拙を論ずるものではない、よいとかわるいとか云ふことは見る人各自の主觀である。たゞ吾人はこれによつて多少エクザイトされるところあつてよからうと思ふ。何れを見ても行きつまつたスタイル許りの大阪にあの愉快な建築が出來たことを吾々は深く喜ぶものである。帝國ホテルが出來た時世間では兎や角と非難したが施主が技術者の人格を信頼してすべてを一任した結果建築に何處となくノビ〳〵とした一種の品位をもつて居るところは誰の眼にも映じたであらう。朝日會館もこれと同じ意味に於て一種の尊さをもつて居るものである。

又一般の人々があれを見て建築に多少趣味を持つであらう何んな人でも何とか感ずるものと見え口々に批評して居る。一般世人が新しい建物を見て批評する時代が來たのである。今に立派な批評家も專門家外に出てくることであらう。そして建築家達よりももつと趣味の洗練された人もゞし〳〵出てくることであらう。此際目覺めなければならぬのは建築家である。都市の美觀は一に建築家に負ふところ大なるものあるを知る時、吾々はエクザイトせざるを得ない。

それにしても現今の建築家と云ふものは不徹底極まるものである。建築家とは一體何か、美術家たる程の腕もなく理學者たる程の頭もなく商人たる程の奇才もなく而もそれ等の少量づゝを持つて居ると云ふ人か、左もなくば萬能の人でなければならぬ。即弘法大師の樣な人でなければ理想的の建築家となる資格に何處か缺けて居る筈である。これでは二百年に一人か三百年に一人位しか本當の建築家が世に出來ない譯になる、それでは心細い。

然らば何うすればよいかと云ふに現在の建築家を先づ三分すればよい、短所ある人にも長所もある、トリエのない人と云ふものはない筈だ。建築家を三つに分けると云ふ意味はそこである、即1、設計を專門とする。2、計算を專門とする人。3、施工を專門とする人である。又これ等の技術者を養成する機關に於ても今日の有樣では到底その目的に添ふことが出來ない。先づ學校の組織から大改革を試みるがよい。學校と云へば今の日本の學制ほど不徹底なものがない。文政の任に當る人々の頭には「教育機關」と「練習機關」との區別が判つて居ないらしい。

よく耳にすることであるが高商を出たのに算盤が出來ないで直接仕事の間に合はぬだの、高工を出ても出た當時は一向役にたゝぬなどとこぼして居る者がある。

これ等は全く學校の制度が悪いからである。專門學校は教育機關でなく純然たる練習機關であることを教育の任に當る者が知らないからである。

即、小學校、中學校、高等學校、大學乃至大學院と云つたものがすべて教育機關で實業學校や專門學校は練習機關である。大學を出た人が直接仕事の間に合はぬと云ふことは或は有り得可きことでもあらうが、高工や高商の卒業生が實際の役に立たゝぬとは聞えぬことである。

一體日本の教育殊に工業教育の機關は他と獨立して根本から改革すべき必要はある。

純然教育機關である可き大學でも一部を除く他はすべて練習機關の如く取扱はれて居る。反之專門學校は教育機關の如く誤まられて居る。專門學校の學生や教授達は何か機會があれば昇格運動を起す、專門學校が昇格すれば何になるのかと云へば「大學」だと云ふ。練習機關が昇格すると教育機關になる。こんな滑稽な話はない。それで專門學校のデイグニテイーと云ふものは何處にあるか、專門學校は專門學校として尊いものである、決して大學の下にある可きものでない。

商船學校の卒業生が高等船員として役に立たぬと云ふことを聞いたことがない。又海軍兵學校や陸軍士官學校の卒業生が陸海軍の將校として間に合はぬと云ふことも耳にしたことがない。全くこれ等の學校では練習機關としての目的を充分果して居るからである。

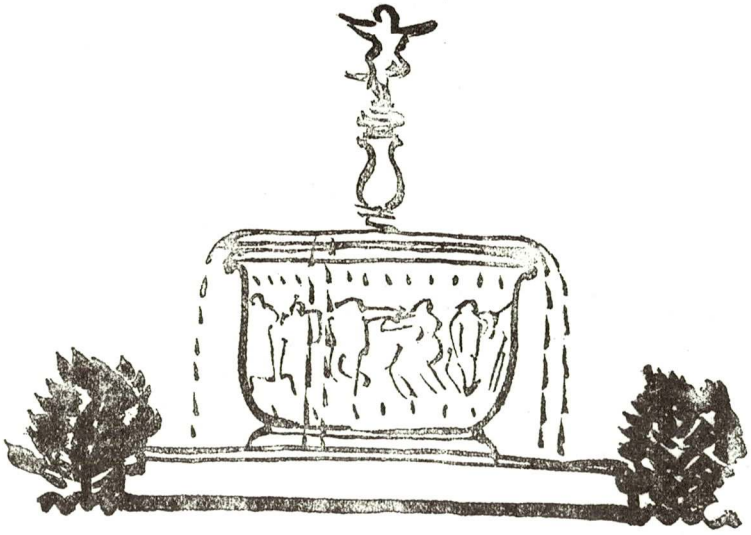
話は思はず横道へそれたが、要するに將來立派な建築を生むには練習機關たる立派な建築の專門學校の出現を切望するものである。そしてその學校で設計科、計算科、施工科の三科を置いて各その目的に添ふべく徹底的な教育を施すと云ふことは必要なことである。

一體日本人は事大思想の強い國民で何でも彼でも「大學」と云はなければならぬ樣に心得て居る。名稱だけでも「大學」となればその卒業生は「學士」と呼ばれる。それが終局の目的の如く心得て居るのだからお話しにならぬ。

今の日本に大學らしい大學は一つも無いと云つてもいゝ。昔は日本にも大學はあつた、札幌農學校、同志社、慶應義塾等は何れも立派な大學であつた、而し現在ではこれ等の學校も何等大學としての價値がない。勿論帝國大學と雖も大學ではない。たゞ法令の上の大學で眞の大學は日本には一つも無いと云つて決して過言ではない。しかし吾人は大學の多きを望むのでない。たゞ日本に一つ位は大學はあつてもよいと思ふ。そして他は何れも專門學校として立派にその使命を全ふすべきものになつてくれたらそれでよい。

良建築家養成の事から學制問題になつて仕舞つたが、これも「朝日會館」が吾人に聞かしにくれた警鐘である。

兎に角「朝日會館の建築」が大阪の建築界に多大の刺戟と教訓とを與へてくれたことを吾人は深く感謝の意を表するものである。



五十年前の米國建築界（三）

葛野壯一郎

米國建築界の過去五十年に於ける樣式の變遷に就て、トールマッヂ氏は更らに其所說を續ける。

『斯うした建築的鬼つ子を宿したパンドラ（希臘神話の美女）の小屋は、一層善い內容について往々價値あるもので有つた。何故ならば、一般にヴイクトリアン・ゴシック風の家は、フランス風のものよりも善かつたからで有る。それ等の尖塔、切妻屋根、碁盤縞の石盤葺、木製格子、鐵製棟飾、高い煙突は常に繪畫的であり、また愉快なものであつた。富裕と尊嚴を表す圓屋根や棟飾が、若しも所有者の地位が許すならば、何れの樣式にも採用せられた。凡て斯やうなものゝ混合が、恰うど『クイーン・アン風』と呼ばれた時代に相當したので有る。その原因は多分チユードルの後に於ける英國復興期の仕事によると考へられる。クイーン・アンの治世に於けるレンだのグリンリング・ギボンスの仕事は、最繪畫的であつ

た。而して千八百七十年乃至八十年に於ける批評は、吾が米國に於けるヴイクトリアン・ゴシック・イーストレーキを少なくとも繪畫的で有ると許して、クイーン・アンに續けて特筆したので有る。私共は英國の事情の如何に係らず、續いて起つた世界的混亂には關係なく、自由に次に私共の採用した建築上の冒險は、八十年代に於けるローマネスクの復活で有つた。今記述して居る樣な斯ういふ時代を今日から視て、笑つたり又はげしい非議を加へる事は容易である。(併しそれは本當に其時代を知らないものから云ひ得る事で)、其時代の樣式や藝術に對する全般の態度が成金であつたので有る。少なくとも建築上では、是れを『バーヴェニュー・ペリオド』即ち『成金時代』と呼んで然る可きで有る。』

此成金時代といふ言葉に今私は少なからず興味を感ずる。建築上から觀て吾が日本の如き今も、やはりそんな時代が有つたのではなからふか。或は又今現に左樣した時代に屬するのでは無からふか。二千年以來支那風の構架式建築より外に何にも知らなかつた吾が建築界に、突風的に入つて來たものは西洋風建築であつた。最初に最深く影響したのは英國風であり、續いて獨、佛、伊といつた樣な次第で、最後に米國風が控へて居る。古今東西一切のものが一度に流れ込んで來たので、取捨も撰擇も其餘地はなく、只もう建築上の成金氣分で淺薄な模倣に今日までをすごし、更らに今後にも及ばんとして居るかの如く思はれる。比較的若々しく創造的のものと考へ、又一般からも左樣思はれる樣な種類のものでも、實は中歐諸國の新傾向に影響せられた一種の物眞似に過ぎない樣に私には感ぜらるゝ。

再びト氏の記述を紹介すると

『一千八百七十年代の建築が、其形式に於て全く一變して居らないのは當然である。當時の事務用建物は鐵骨構造や客用エレヴェーターの發明による進歩ほどに、趣味の上からは發達しなかつたのである。暗い細長いホール、細長い店、細長い窓、地下店舖及び其結果として起る路面からの昇降階段を知らないでは、五十年前の商業的建築を理解することは出來ない。一千八百七十六年代も一千九百二十六年代も、事務用建物としては一樣に採光、通風及び利便を要せられたのであるから、是等の事實は著しく其建物を不愉快な非實用的のものとしたので有る。樣式上からいふとフランス風、又は常にラスキンのヴエネチア風の色彩をもつたヴイクトリアン・ゴシック風の何れであつたにせよ、其文樣は粗く馬鹿氣て無意味なものであつた。理由とするところは別に考へた譯ではなく單なる無邪氣と無關心からではあるが、當時に於ける建物の各階を只譯もなく下から上へと積み重ねて行くやり方は一千九百年代の建物を底部、軸部、頂部と均衡を保たしめるやり方よりも一層論理的だとも考へられる。停車場、議院、旅館、病院、寺院、銀行、校舍、美術館、工場と是等建築せられた各種の建物に就て觀て、何處に一貫した時代の趣味があるか、何れが眞にアメリカの生んだ型であるかと尋ねた時に、實はその答に困るのである。私はやつと次の一二を採り出して答へるより外はない。それは一千八百五十六年レンウイックの手になつたニューヨークのセント・パトリック寺院と、一千八百七十五年ミカムミングスとシアースの手になつたボストンのニュー・オールド・サウス敎會及びハーバード大

學の記念館位のものである。何と慘めではないか。各地方には丁重に保存せられて居る學校の會館の様なものは澤山ある併しそれ等のものは價値や美のためからではなくて、全然他の理由からなのである。』

こゝまで讀んでくると、つくづく私は日本の過去五十年に於ける建築についても、亦同じ様な事を考へざるを得ない。アメリカとは比較にならない經濟的に貧弱な日本・それでも可なり多數の建物は出來た。宮城・官廳、裁判所・學校、劇場、商店、銀行、旅館、病院、公會堂と數ね上げると相當の數にはなる。殊に歐洲大戰を畫期として異常なる經濟界の活躍以來建築の隆盛はめざましいものが有つた。しかしそれ等多數の建物の何處に一貫した精神があるか、何れが本當に日本人の手により、日本の生み出したものであるかを尋ねたならば、同様に私共は返答に困るのではないか。近頃出來た大きなものに就て觀ても、成る程偉觀には相違ない。しかし其前に立つてつくづくと是を眺める時、是れが本當に自分達のもので有るか何うかを疑はざるを得ないので有る。日本の建築家は何時までも外ばかり觀ずに、今は一面深く內に顧みなければならぬ時期では有るまいか。

ト氏は更らに言葉を續けて居る。

『合理的なプランニングと、意匠の洗練がほの見え出したのは、一千八百八十年代からで有る。英國に於けるウイリアム・モリスや前ラフワエロ主義(寫實主義)を考へる事なしに、此新らしい動機に關して二つの事實が特筆されなければならぬ。其の一は少數の建築事務所の個人的影響であつて、其經營者は主として外國に學んだ人達であつた。是等の目立つものとしてはガンブリルとリチャードソン・マッキム、メード及びピグロー、及びリチャード・エム・ハントの諸氏が有つた。第二は建築學科の創設であつて其最初のものはマサチューセッツの專門學校に於ける建築學科であつたので有る。

『藝術に眼覺めた最初の印章として、アメリカン・アーキテクト誌の當時のものを通覽するのは愉快なことで有る。一千八百七十六年發行の第一卷には、前途に横はる希望はあつても未だ觀る可きものは無い。例令ばそれにはバリーからの新歸朝者で若い勇士アール・エム・ハント氏の最初の論文があり一つの建物に種々異つた意匠を取り雜せる事の批難がある。又アール・アイ・ビー・エーの會員の記事があつて、アメリカの建築士は全然熟練を缺いで居ると論じて居る。特に著しい事は、クイーン・アン式に對する學問的質疑や論爭、バーテノン等の優雅に對する投書家の大なる興味である。第貳卷即ち一千八百七十七年刊行の分にはアール・エム・ハントの手になる住宅がある。併し此若い鬪士は、家はラ・ブラストの新希臘風、又はガルニエ式の醜い組合せであるといふ以外一步も踏み出しては居らなかつた。偉大なるリチャードソンの名が初めて現はれたのは此卷である、挿圖はないが其トリニチー敎會の記述と、ウォーバーンに於ける圖書館の圖が出て居る。リチャードソンは今や軟風に、ローマネスクの旗をなびかせたので有る。同じ卷にシー・エフ・マッキムの手になるエリザベサンの田園住宅、アール・エム・ハントの手になるレノックス圖書館、及びアメリカの建築士は宜しくコロニアルに歸る可しと論ずる英國人の說が出て居る。第三卷には『アメリカ式』に對する喊聲が先ずあげられ、『繪畫や彫刻に於けると同

じ様に建築や裝飾術に於いても、アメリカは新らしい進路を案出し得る事の最微の證據すらあげて居らないのである』といふ聲明が出て居る。ビーボデイとスターンの手になるコロニアル住宅が一方に現はれると同時にシカゴからすつと離れて若いバーンハム及びルートが、最一般向の趣味の家を示して居る。』

吾が建築學會の建築雜誌を初年貳年參年と、是れと同じ樣に其內容を檢べて行くと餘程興味の深い事と思ふが、相憎く雜誌が手元にないから差し當りの間には合ない。兎に角明治年代に於ける吾が建築界は誠に單純であり、それは辰野片山妻木の三巨頭の分野となつて天下は三分の形で、別に橫河氏が一城廓を築いて居つた。辰野氏を英國風とすれば片山氏は佛國風であり、妻木氏は獨逸風で橫河氏は米國風である。辰野氏以下三氏は不幸すでに故人となられたが、橫河氏は依然として健在で、後進の誘導につとめて居られるのはお芽出度い話しだ。是れに加へて伊東、中村、塚本、關野の大學の諸先生や曾禰氏の如きが、直接間接今日の日本の建築界の基礎を開拓せられた恩人だ。吾人は斯うした先輩に對する尊敬を忘れてはならない。

兎角自分の附けたりが多くなつて本文が進まない。大急ぎでト氏の記述をつゞける。

『年から年へとページを繰り行くにつれて、ハントやマツキムやリチヤードソン　諸氏が各自の武器を以て——といふのはハントはネィ・クラシック、マツキムはレネサンス、リチヤ　ドソンはローマオスク——如何に雜薄な成金主義の趣味と戰つたかゞよく判る。西部に於ける私共はローマネスク復活の適用範圍と重要さを寧ろ見積り過した樣に考へられる。私共は一千八百九十八年の世界博覽會に當つて、ローマネスクが『亞米利加式』とまで發達するかも知れないとまで思はせられた。事實それはニューヨークの外方では野火の樣に燃え擴がつた。又中央西部では立派な強い其主唱者バーンハムやルートを見出した。マツキム、リチヤードソン、ハント及び其門人達の賜物は、單に美とか趣味と云つた方面に止まらず、其プランや構造の上にも及んで居る。當時建てられた圖書館、田舍家、事務所建築の凡てが革命的であつた。假令ばバーンハムとルートの手によつて一千八百八十年、シカゴに建てられたルッカリー・ビルデングのプランの如きは、前時代に於ける事務所建築の幼稚さを一掃したものである。神秘的な鐵骨構造が一千八百八十九年に創つた。それは人の眼に觸れる事を欲せざるものゝ如く煉瓦やテラカッタの衣に包まれて、天空に昇らんとする人間の努力に新時代を畫せんとする樣に見えた。ホラバードとローシユの手になるシカゴのタコマ・ビルデングが、鐵骨構造による摩天閣の始めである。それは建築術進展の基標であり、今日の隆盛の元祖であり、それが血をうけて、ウールウオース塔、トリビユーン塔、ブツシユ・ターミナルの如き偉大なる子孫が生れ出たので有る。』

日本に始めて鐵骨構造の輸入せられたのは三井銀行本店で設計者は橫河氏である。竣工は明治三十六年かと記憶する。大學に鐵骨構造といふ講座が設けられたのも同年で、最初の講師は橫河氏で有つた。

『私共は何かしら豫期して居た。一千八百九十一年にはローマネスク式が秤にかけられた。而して重さの足りない事が

發見せられた。其審判者は執行者では無かつたけれども建築士の會議によつたので有つた。その會議といふのは、コロンビアの博覽會の設計を準備する爲めにバーハム氏によつて招集されたもので有る。その理由とする條項に就ては私は知らないが、私の想像する處によると、下品で大博覽會の目的には適はないといふ事では無かつたらふか。恐らくはそれはローマネスクを活かしむるには一つの缺點であり、且つ無智な手で處理されたローマネスク式は甚だ下品に陷り易いので有る。雄辯に是を辯護す可く務めたならんと思はるゝ聲が突然聞かれなかつた。それは委員會が評議を開始する前に、ジョーン・ダブリユー・ルートが死んだ事である。クラシック式が撰ばれた。即ちギリシャとローマが灰の中から又もや出現したので有る。ミネルヴァやアポロの神がオリンパス山に最高權威を示し、華想主義(ローマンティシズム)が頭を下げ、マツキムがリチャードソンに勝つたので有る。

『世界博覽會は何の苦もなく其樣式を全國に宣布した。クラシックの土に育てられた短髮の若い建築士達が年々成熟して行つた。手近な大問題は摩天閣の解決で有つた。而して同時代の人々が凡て其解決に悲しむ可き誤を爲て居つたので有る。ヴイトルヴイウスやミケル・アンゼロの法則によつて處理せられた前面は、單に理論に欠けるばかりでなく、氣分の上にも欠點のある事が過去に證明せられた。

『シカゴの第一國民銀行又はニューヨルクの市廳舍の如き型のもので、壁が自分で孤立し、恐ろしく大きな蛇腹が全體を支配して居る形は、一步誤れば地獄に突き落されさうな型で有る。より簡單なものに就ては、クラシック主義者は成功して居る。圖書館、美術館、停車場、住宅の如きは不斷の進步を示し、多數の實例を提供して居る。ニューヨークのペンシルヴアニア停車場、ワシントンの大ターミナル、ニューヨークのユニヴアンテイ倶樂部、ボストンの公共圖書館、インディアナポリスの郵便局、シカゴのフイールド博物館、ワルドルフ・アストリア・ホテルの如きは、特種建築に對する一定の標準軌範を與へた好い例で有る。だが建築史家は世界博覽會と世界戰爭との間の四分の一世紀間を、クラシックと斷定するには躊躇する。折衷主義といふのが最適當だと考へる。指尖や書棚に充分な參考物を持つて居る相當年輩の建築家は彼自身又は注文者の意圖をいかに表現すべきかの方則を求め且つ發見する。折衷主義は是れに反して、若い勇敢な鬪士クラムやグードヒューに最よく用立つた。それ等の人々は九十年代の中頃に『Moyen Age』の旗をひるがへし、アチックの方陣やローマの步兵隊の突擊をうけて『Montjoie St. Denis』の叫びを擧げた。藝術家や豫言者には流派に拘泥する事はない。ゴシック風敎會の立派なものが、此國に於ける此革命的折衷主義建築から發出した。而してそれは十五世紀以來罪つて知られなかつたゴシック式に新らしい呼吸と血を盛つた。若人の大勢が誇らしい步を是れに續けたので有る。』

吾が邦でも明治末に盛んに樣式論が彼是れ論議に上つた事がある。『吾が邦將來の建築樣式を如何にすべきや』等と大眞面目のもので有つた。而して何等結論らしい結論の得られなかつたのは寧ろ當然の事である。議院建築懸賞募集論の喧しかつたのも其頃と記憶する。一國の主要な畫期的大建築を、一省の官選技術家の意志によつてのみ左右せしめる可きもの

では無いといふ様な主張であつたのだ。理屈は兎に角元氣は盛んなもので有つた。現在の建築界の勃興には、其奥底に斯うした元氣の流れがあつた事を思はなければなるまいと考へる。

『世界戰爭は一千八百八十年代に普及して居つた、凡ての古い型や樣式を一掃して了つた。新らしい藝術が一千八百九十三年に初まり、そこ此處に目立つて建つ建築が其モデルとなり、標準型となつたので有る。プランニングの技術が殊に發達し、アメリカの建築がある廣さと簡單さと大さによつて知られ初めたので有る。一團のプランニングに於て美と實用の可能性が、コロンビアの博覽會に於て發見せられ、それが實用化された。又都市計畫の新らしき職業が起り、バーンハムとベンネットの手によつて大シカゴ市の美くしいプランが出來るや、大小各都市が是れに習ふ樣になつた。都市のプランの重要なる隨伴として地帶制度が有つた。而して壯大な都市計畫の不可能のところでも、地帶制度だけは採用されたので有る。

『千九百年頃に、柱と楣と拱とトラスで成り立つ、有名な家族の新しい一員が表れた。それは鐵筋コンクリートで有る。なほ未完成な幼兒の內から、其れは凡ての蒲團を奪取する計りでなく、年長の兄弟や姉妹を寢臺の外へ蹴り出さうとする。誰れもが知つて居る樣に、それは工場建築の構造や意匠を一變せしめた。極く低い一エンジニアーですらも、信賴す可き意匠を提出する事が出來た。それは建築に於ける美的要素と工學的要素を同等とする事に於て、將來深い効果を與へるならんと考へられる。』

鐵筋コンクリートの工法が吾が邦に紹介せられたのも亦明治末であつた。而して其應用が大正に及んで漸く盛んとなり現在の隆盛を來したのは、時代の要求の然らしむる處とはいへ、東大の佐野氏や內田氏の努力にまつ所が多い事を思はなければならぬ。建築にあつては常に從位に有つた構造學が、今では寧ろ主位を占め、新らしい構造美の上に、從來の古い裝飾的建築美學の立て直しが始まらふとして居る。是れは確かに建築界の一大革命には相異ないが、事その事は決して新らしい事ではなく、建築本來の面目が構造美にある事は當然の事として知られなければならぬ事と思ふ。何んなにキャピタルやベースの彫刻が立派でも、それだけでは建築美とはならない。柱そのものが完全に荷量を支持する僞のない力の表現に眞の建築美があるのではないか。構造美の高調は、結極建築本來の眞面目に復活する事で有ると私は信ずる。都市計畫の問題が論議され始めたのは大正四五年來の事である。是れには當會頭片岡氏の如き有力なる先覺者であり、當協會の是れに對する努力も亦決して鮮くなかつた事は讀者熟知の事實である。此問題が大阪を發詳地として起つたにも係らず、大阪市の都市計畫事業が遲々として進まず、建築界の諸士も近時是れに對して頗る冷淡なるが如く見えるのは何うしたものか、是れはたしかに一考を要する事實と考へる。

『自働車が現はれた。而して交通整理の新らしい問題が起つた。ゴルフの學校や、カントリー倶樂部の新らしい建築の型が生れた。ラヂオや飛行機は未だ建築士に新奇の要求はして居ないが、併し富と人口と國民的熱心の增加は、大團圓に導きつゝあるものゝ如く見へる。一千九百十七年の世界戰爭

のショックは、蛹を破り、一層力強くアメリカを前進せしめた」

大小多寡のスケールこそ違つて居るが、是等の諸點に就ては日本も同樣である。人口四人に對し一臺の自働車等といふアメリカとは比較にはならないが、それでも近年著しく增えた自働車が、街路交通の事情を一變せしめて了つた。ゴルフといへばやつと六甲山の頂で物數奇な外國人の閑戲とのみ考へて居たが、今ではそこゝにゴルフリンクが出來、ゴルフ・スクールも經營せられて相當な入門者もある世の中となつた。ラヂオも最う珍らしくもなければ、飛行機ものべつに飛んで居る。世界大戰からうけたショックも國相應に可なり大きなものが有つた許りでなく、吾が邦には未だ其外に大正十二年の關東大震火災が有つた。それでは如實に耐火耐震建築の緊要な事實が見せつけられたのだ。蛹を破つたのはアメリカだけではなく、日本も今や全然新らしい進路に向つて大行進を開始せんとするもので有る。人口の增加については何の國にもひけを取らないが、富の增加と國民的熱誠といふ點に就ては遺憾ながら欠けて居る。人間ばかり增えて仕事の增えないのは何より痛事だ。そこに國民としての熱誠があらゆる事業界に必要とせらるゝのでは有るまいかと感ずる。（續）



うき世繪と其時代の劇場

池田谷久吉

この一編は「Feature Arts Monthly」Vol. x—No. 4 に Arlella Hill の執筆したものであるが外人の見た我が國德川時代に於ける劇場と浮世繪の一面觀の面白い評論であるからこゝに譯述した。

今より三世紀前長い戰國時代の惡夢の後に於て急激な覺醒が日本に起つた。一六〇三年に德川時代を打ち立てたのはたしかに自我意識の高唱であり個人的勝利であつた。

かくして出來たところの新大名は悉く獨力で自己の地位を開拓した人であつた、そして彼の政治上の功績といふものは日本の社會全般に浸潤したので下層階段の者等に至る迄自己の價値といふ意識に目醒めて來たのも當然であつた。

次の泰平無事繁榮の御世に於て冷酷な戰國時代の反動として一般人民は新しい享樂を求めていつた。

個人的第一歩の解放と一般民衆の熱心なる慾求とに刺戟せられて文藝の三形式たる、即ち文學、繪畫(版畫)、演劇の同時的な發達を見るに到つた。

此れ等の所謂文藝の三形式の各々は數世紀の間、皇室、貴族の保護の下に培養され來つた詩、繪畫又は能、の如き古き貴族的文藝にとつてはたしかに繼子扱のものであつた、此の民衆的文藝はその僅かほんの一部分に於てのみ次ぎの次ぎにと傳へ來つた過去の貴族文藝の光輝を反映してゐるに過ぎなかつた。

事實に於て多數者の藝術的本能とその趣味とは新しき一般の劇場が非常に急速に發達してゐる點より見て其の變化の大いに急であつたものと想像する事が出來る。

然し此の民衆劇場の發達は日本の劇、文學と色刷版畫法の發育を促進する要素となつた。

十七世紀の終には最早色刷術は未だ曾て到達し得なかつた程の巧妙さにまで達し得た。近代的な版木から作られ、然かも支那風にならつて手刷りで色附けをしたものは本の插繪に使用されたばかりでなく當時の流行姿繪だとか種々な貼紙とか又は都へやつて來た諸國の旅の者が國元への音信に色刷の版畫を用ひたりしたものである。

うきよ繪といふ名は其の名の如く此の木版畫は其の當時の浮世のあらゆる方面の世相を描いてゐる木版畫蒐集者にとつ

て親しみのあるもののほとんど凡ての役者の名は或る方法に依つて此等の刷物に描出されてゐるものである。

否、むしろそれのみか劇場の生活狀態の鎖細な點やその興味さへもが彼等の內に寫し描かれてゐるのである。

此處に揭げた挿繪は芝居小屋の通をあらはしたものであつて、恰度初日開きを祝ふ所謂「顏見世」の場面であらうと思はれる、着物の袖には夫々其の家の定紋を附けた役者を狹い道路で澤山の群集が物珍らしさうに彼等に取捲いてゐる所である。

次の挿繪は豊春が描いた芝居小屋內部の繪で今、曾我兄弟讐討の舞臺演出のところである。此の繪に於て花道（日本の劇場では主要人物の出入口に用ひられ又高頂點の所作は此處で演じられるようになつてゐる）の中央に居るのは立役者の一人である市川團十郎丈である。

天井から多くの提灯がブラ下つてゐて其の一つ一つにも又定紋が書かれてゐるのが見物人はそれによつて舞臺の上の役者を見分ける事が出來るのである。

それから見物の群集が相並び相摩す時に愉快げに微笑みながら彼等の桝の前に胡座をかいて坐つてゐる小屋の世話役等を描いた面白い刷物や、作者の名前を揭げ、芝居姿を生々と色彩あでやかに描かれた芝居のポスター等もある。

又有名な芝居の場面、場面を全部描いた續物もある、斯の廣重は四十七士赤穗忠臣藏の場面を完成してゐる、この忠臣藏といふ芝居はメースフイールドの作つた「忠義」のオリヂンをなしたものである。

此の芝居はもともと人形芝居の爲めに書かれたものであつたが後、廣く日本の一般各所の劇場に於て演ぜられる有名なる芝居の一つとなつた、そして其の場面の動作の詳細は芝居書のうちに現はされてゐる。

就中、其の流行をもたらした他の原因は今日に於ても人氣俳優の舞臺姿の版畫が數多く買はれると同樣に藝術的に百樣に描き出された當時の役者の似顏を寫し出した點にある、役者は彼が演じた最も有名な得意な場面に於て彼の初舞臺の披露の爲に或は彼の死後の追憶の時等に彼の似顏は描かれたのである。

日本では女子が普通の芝居に女優として加はることは許されてゐなかつた時代があつたために當時、或る役者は女役の役者として立派な熟練を見せた。

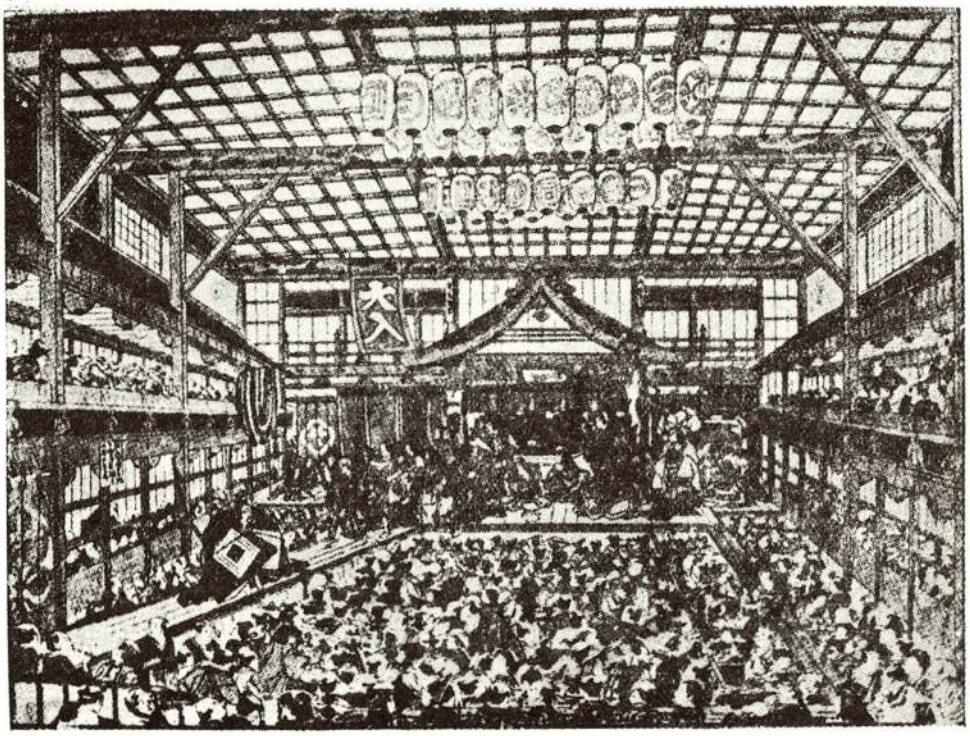
彼等は英雄的な、或は悲劇的な役者の到達し得た程度に於て女の役を性格化し扮裝に依つて殊によく女子の姿態を表はしてゐた。役者が樂屋に衣裳を着けるときから、或は食事に入湯に亦は雜談に花を咲かす時、又夜遲く家庭に歸る其時まで四六時中の日常生活が此の浮世繪に刷られてゐない時は殆どないといつてもよい。

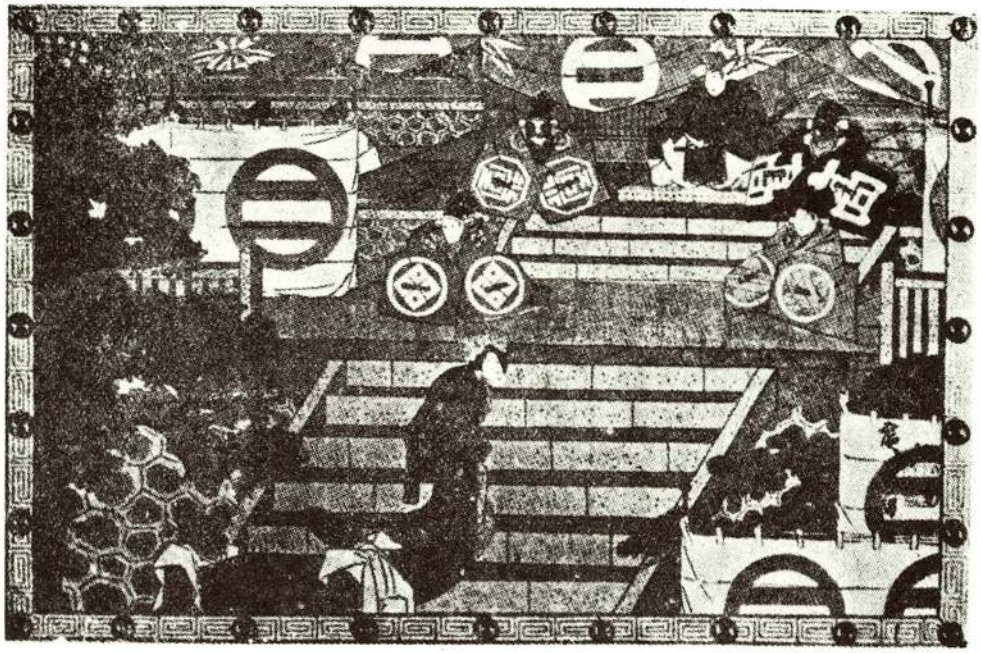
此等の色刷といふものは十七世紀から十八世紀へかけての日本の役者の非常に完全な生活記錄をなしてゐるのみならず一方歌舞伎の劇場的技巧、又は一般日本の劇場といふものを著しく確實にあらはしてゐる。

斯の如く浮世繪は非常に流行を極め其の効果又確固たるものであつたので一八四二年に歌舞伎の此の傾向を憂ひた時の幕府は次の如き禁令を發布した。

『役者、娼婦、藝者、又は斯の如き種類の者にて風俗にを









害するものの版畫は一葉といへども賣買すべからず、又右同樣のものの新版は此れを絶對に禁ず。

此れ等のものを蓄積、所藏せるものに於ても然り

尙芝居の長い複雜な傳書きを記述しそれに役者の繪姿の挿められた繪本や色彩を施こした表紙と無用に時間と手間とをかけた刷物の包紙にて裝幀され高價に賣買されてゐた繪本の類の賣買も禁止す』

こうした奇妙な矛盾が起つて來たが、この歌舞伎の創始は十七世紀の初め「お國」といふ女が巫子として神社で神樂舞や念佛踊をやつてゐたが間もなく神社を去り京都に出で河原で小屋を開いたのだといつてゐる。お國は彼女自身の現實主義の爲にあらゆる古い因襲を打破してかゝつたのでそれが非常に強い刺戟を與へ直ちに自然主義的劇場の基礎を作り上げて終つた。この調子でどし〳〵進歩發達したために後年に至つて風俗壞亂の徴を認め終に禁令を出して女子の役者として舞臺に立つことを嚴禁したのである。

其の當時は、現在に於ても然りであるが歌舞伎は單に自然主義傾向に流れ「能」に於て感じ得る樣なところの微妙さと暗示性とを持つてゐなかつた。

固より此等の二つの劇の形式は全く相離反したものである日本の一般劇場の發達を見るに到つた最も重要な影響、否原因の一つは他方に於ては長らく一般に行はれてゐた操人形芝居であつた。

即ち傀儡（人形芝居）は動作が豊かでユーモアに滿ちてゐる勇敢な動作、英雄的な行動の苦心になれる芝居にピッタリと通ずる樣な型式化された動作を作り上げたといふ事は此の人形芝居を特徴づけるものである。

が後に到つては歌舞伎芝居も此れを取り入れるようになつた、操人形は其の舞臺に對して多くの獨自性を與へてゐる。昔の劇の構想の凡ては人形芝居の因襲を基礎として科白は非常にすくない。

役者は無言で演じ、他方で能に於ける如く舞臺の後方で三味線ひきと唄手とが坐を占めてゐて其處で劇の物語は語られて行くのである、能の極端な傳統主義とお國一派の寫實主義との間に一般劇場で常に惹起される爭のうちに於て人形芝居は中間の道程をつき進み劇場に對して多くの藝術的貢獻をなしてゐる。

東洋的習慣を全く脫却し得ず尙著しき特異性を持つてゐるにかゝわらず歌舞伎には初期の英國に於ける劇場の發達形式と共通性を多く持つてゐる。

英國に於ける旅廻りの役者のように綠野の俳優と呼ばれておる流浪の旅の踊子等は劇場の基礎を築いた人等であつた、英國の俳優等の樣に日本の役者も同じく彼等は相當の力量を持つてゐるに拘らず社會的にはひどく擯斥せられてゐた、即ち河原乞食などの如き侮辱をさへ與へられてゐた。

又女子が歌舞する事を禁ぜられたために役割は男、若くは童子等によつて其の代役にあてられた。

歌舞伎の凸出舞臺は觀客土の間や棧敷に席を占めて見るグローブ劇場のエプロン舞臺と似てゐる、エリザベス時代の劇場に於ては演伎は晝間の間に於てなされてゐたが然し日本では人々が芝居を見る其の態度に於て根本的な相違があることを見出し得る、即ち芝居は早朝に初まり十二時間も續けられ色刷り版畫で示されてゐる樣に提灯をつけて夕方まで芝居が演ぜられてゐる。

お寺で宗教的な踊を見たり一年一度のお祭に見るものと思つてゐる能を記憶してゐる一般の人々も尙劇場をば休日に行

くべきところだと考へてゐた。

人形芝居の精神を捉へたセクスピア舞臺の因襲と寫實主義とを相並行させて初期の東洋の傳統の骨格をうちたて、日本の劇場は二世紀前に於てすでに多くの劇場の工夫と革新とを發見し使用してゐた。

其等は近代的劇場に於ても尚最も新しき舞臺設備として考へられてゐるものがある、例へば日本の廻り舞臺の如きそれである。我々の多くの進歩した設計のうちに於ても役者は異つた精神的方面を暗示するか爲に異つた水平面の上に置かれてゐる。

實際に於て舞臺を一段高くするといふ事は我々近代象徴主義の特徴であるがこれは日本の舞臺構造の特長ある點である此の劇場の機械の異常な發達も特に所作の形の發展といふ事が諸外國と比較して勝れてゐないとなれば同樣である。

日本人は決して動作の迅速といふ事を目的としたのでもなければ我々が西洋の舞臺で馴らされてゐる速い感情漸次強音を目的としたのでもない。

日本の所作の著しき特徴は緊制なる點と型式的なる點とにある、そして此の二者が劇的緊張に非常に與つて大なる力である、能樂の面といふものは取捨てられたといふのは最初お國は面をかむらずに演じたからであつた。

而も尚彼等の演技の効果は因襲的な表現法と重々しいつくり立に依つて幾度面をかむつてゐると同じやうであつた。

何故なれば役者の動作は人形芝居の動作を模倣したものであり、歌舞伎に於ける誇張法は顔の表情であらはすよりむしろ感情其物を象徴化した態度を以て表現せられたのである。

此の特性は色刷り版畫に於て描かれてゐる役者の型式化された樣子を見ればよくわかる、歌舞伎の役者等は夫々彼等の持役を彼等の子に甥に孫に又は子弟に傳へて行くばかりでなく其の所作の型をも殘して行く、そして自分の名前は後樞に其儘名乘らせて何代目と呼んでゐる。

かゝる方法に依つて立派な演戯目錄ばかりか個人のなし遂げた所作までもが遺されて行く、日本の舞臺に團十郎を見出せないといふのは二百五十年このかた現代が初めてである。

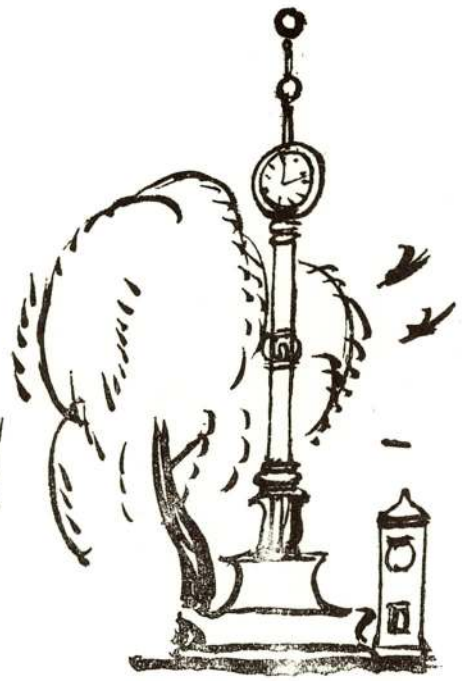
廻り舞臺の發明に從つて起つたのが動かし得る道具立てと寫實的背景の革新である、此等はオリエンタル劇場で使用された後の事である。かくて益々日本の舞臺は我々西洋劇場の繪畫的額緣構造の舞臺に接近して來た、又セリ上ゲセリ下ゲ吊り道具等の機械的工夫も用ひられた。

傳統的であり甚しく因襲的であつた所作も大袈裟過ぎる程の寫實主義に感染して來た、例へば我々をして嫌惡せしむる程にまで「死」を自然的に描寫演出してゐるものさへ現はれるに到つた。赤い流動物を何か袋に入れて切腹する役者が衣裳の下に隱し持つてゐて切腹した時其れを血の代りに流して見物はそれを見て喜こぶといふ風な取扱をする樣になつた。

演技の技巧が下劣になつて行くに從つて觀客の趣味も同樣に腐敗して來た、今日巴里に於けるグランド、ギグノールで滿足せしめられてゐる切望、その戰慄と激動と恐怖に對する一つの切望が日本の當時の劇界にあつたのである。

此の時代の日本の芝居の觀客は「マリフイの公爵夫人」に就てほしいまゝな激情にしたり喜んだりエリザベス朝時代の人等の如く素朴で且陽氣に粗暴さをすき好んでゐた。

最後に奇妙な事實は吾々西洋人の考が東洋劇場の因襲に靈感を感じ其れに例を見出して轉換せんとしてゐる時に當つて本國即ち日本に於ては所謂歌舞伎なるものは衰運の色を示し却つて日本人の興味は益々西洋の劇と其の形式を愛好する傾向があるといふ一事である。（完）



米國の小住宅に使用せる家具の種類及價格の實例

樋口辰太郎

私は此度大阪鐵道株式會社が沿線にて住宅經營を營むに付き米國へ參りまして專ら住宅の視察をして參りましたが此にサラリーマン階級の小住宅に使用せられて居る家具及道具の種類と價格を或る住宅に付き調べたものを御紹介致します、案の數は廣間、居間、食堂及び寢室二間臺所の六室でありまして家族は夫婦に子供三人であります高價な家此も月賦販賣で樂に買ふ事出來るのであります。

左に家具の種類及び價格を記して御參考に致します。

居間の部

三ッ揃安樂椅子　三百六十九弗。マホガニノ机　二十六弗。床敷物　一百二十七弗。蓄音器　一百五十五弗。ラジオ　一百二十四弗。テーブルランプ　三十三弗。フラワーブンブ　二十八弗。額緣及繪(五枚)三十五弗。花タテ　七弗。扇風器　十六弗。本箱　四十九弗。テーワゴン　二十七弗。ピアノ　六百四十弗。小計　千六百三十六弗

食堂の部

テーブル椅子(八脚)二百八十七弗。食器棚　八十二弗。額緣及繪(二枚)十四弗。ローソク立(二本)四弗。子供用椅子(二脚)二十四弗。小計　四百十一弗

寢室の部

寢臺ダブル一揃　二百二十弗。子供用寢臺(二臺)八十弗。敷物　一百四十弗。椅子(二脚)二十二弗。子供用椅子(二脚)八弗。主人用化粧タンス　八十三弗。婦人用化粧タンス　一百六十五弗。コーチ　一百七十二弗。フローソランプ　二十五弗。テーブル　十二弗。小計　九百二十七弗

廣間の部

カサ立　十六弗。コンソールテーブル　十二弗。鏡　二十八弗。帽子掛　八弗。小計　六十四弗

臺所の部

電氣洗濯器　一百六十五弗。同クリーナ　四十三弗。テーブル　十二弗。冷藏庫　四十六弗。戸棚　一百二十六弗。湯沸器　六十二弗。小計　四百五十四弗

合計　三千四百九十二弗



十人十色
〔2〕

リツチ嬢と結婚した 上野伊三郎氏

TN生

建築家仲間で隨分風變りの人も居るがその中でも最も毛色の變つた人達を數名御紹介することもまた一興……

ながくホフマン氏につかへてオーストリーを中心に中歐の建築界に雄飛した上野伊三郎君が昨年の暮神戸港入港の諏訪丸で歸朝した。

惡い洒落

船が着くと云ふ早朝僕と友人N氏が何かアッ！と云はしてくれるものと前夜からたのんでおいた稅關のランチに便乘させてもらひ和田岬沖合まで乘出した、午前七時十二分水煙模糊の中に巨體を現はしたのは待ちかまへた諏訪丸であつた、ランチからの信號で船は大きく廻轉して停止した、檢疫がすんでからこつそり乘船し先生のキャビンを訪れたが居ない、ボーイに訊けば「上野さんは香港で行方不明になりましたとのこと、キャビンにはアイ、ウエノと印されたトランク三つが淋びしく遺つて居る。二人は呆然として居る中に船は徐行し出した、やがて神戸港にさしかゝると岸壁には出迎への人は黒山をなして居る、その中には上野君を迎ひに來た人達も澤山居る筈。

船が突堤に近づくにつれ人の顏の誰彼がわかつて來ると、A君、C君、H君さては上野御兩親の顏も見える、こちらに向つて萬歲を連呼する者もある、船がピッタリと突堤について停止した。

手摺にもたれて下を見て居ると民衆を掻き分けてこちらへ急いでくる中折帽子を冠つた色の黒い丈の高い紳士が「オーイN君」と僕の名を呼ぶので見れば、こはそもいかに、それは上野君であつた、出迎の人達も開いた口は塞らなかつた、「この鮮やかな早業には一本まゐつたらう」とは惡い洒落だ聞けば普通の歸り方は面白くないから香港で快速船に乘かへて前夜神戸についたとのこと、兎に角變つた男で御ざる。

タクシー代をねぎる

その後旬日先生上京した時のこと、須田町から東京驛までタクシーに乘つたところ運轉手は一圓八十錢也を要求した、先生大に憤慨して「そんな馬鹿なことはない、一圓二十錢にまけておけ」「でも規定ですからそれは出來ないのです」「それなら今一度須田町までメートルをかけて見ろそして出たゞけの代價を拂つてやるから」と云つてもとの須田町まで歸つて見るとメートルは一圓四十錢を示した、「何うだ君は四十錢も山をかけたのだ」「ハイ誠に相濟みません、今後一切謹みますから何うか御勘辨願ひます」「ふんそれならわかつた」と一圓四十錢を彼に與へ再び東京驛へ急がせて又一圓四十錢拂つた、そんな事をして居るうちに汽車の時間を忘れて居て寢臺券四圓五十錢がフイになつた、合計五圓八十錢也の損害。

『そらまたそれでよろし』

上野君と云へば吾人はすぐに「そらまたそれでよろし」を連想する、先生學生時代からこの言葉をさかんに使用する癖があつた、クラスメートの誰かゞ自分のデザインを見せて、「上野君これは何うだらう」と訊くと必ず「ふんそらまたそれでよろし」と云ふにきまつて居た、それでこれを心得て居る連中は「そらまたこれでよろしか」と訊くことにきめて居た。

四年間日本の土地を離れて居たのでこの癖はやんだかと思ふと決してさうでない。相變らず用ひて居る、讀者諸君是非一度お試しあれ。

「東洋趣味」が取もつ緣かいな

上野君と云へばも一つ聯想することがあるそれはフラゥ上野のことである。夫人はホフマン門下生の中での才媛で全歐洲に名聲嘖々たる女流裝飾家であることは近頃の人ならよく知つて居る筈、殊に東洋趣味に少なからぬ憧憬をもつて居らつしやる方である。

この東洋趣味と云ふところから御兩人の間に一篇のローマンが生れたのであつた。或園遊會の日互に見初め合つたのはそも〳〵の起り、この日フトしたことから歸りは道連れとなつた形。

夕日は西に沈む頃ウキーンの町にはもう電燈がついて居た行き交ふ人々は振りかへつて二人の姿をみるのは氣がかりになつて來た「公園の中を抜けませう」「ハア僕も公園はすきです」ポプラの並木の間を步む二人の影法師は公園のアーク燈によつて地上に投げられた、二人は思はず顏を見合はせてきまりわるげにほゝ笑んだ。

それがラブシーンでなくて何であらう、「日本は隨分いゝところですつてね」「えゝそらいゝところもあればわるいところもあります、しかし東洋趣味にも亦捨がたいところもあります」「妾日本が大好きよ」てなことから双方の胸の中は何時の程にか常温を越して來た「では日本へ一度おらつしやい」「でも女一人ぢやあね」「じや僕と一緒に……」「うれしいわ」二人の會話は最早理性を通り過して居ることに氣づいてかお互の顏は紅を呈した。

こんなことがあつてから數日の後一通の赤い封筒が上野氏

の下宿へ舞込んだ。

先日は御見送り下さいまして誠に有難う存じます、その節は又思はず失禮なことを申上げて本當にすみません、お赦し下さいませ、でも妾あの言葉は取消したくは有りませんわ……あれから妾何だかへんになつて仕舞つて何物も手につかず取止めもない空想に耽つて居ます、お察し下さいませ、實は妾昨夜思ひ切つて兩親にお話申して貴方と交際することが許されました、それで今日は何時になくセイ〳〵します、今日のデザインは定めしよいものが出來やうと思ひます、何れその中御伺ひいたしますさよなら

淋みしき　リツチより

伊三郎様

と云ふのであつたか何うか知らないが、兎に角正式の交際が許され遂に共鳴するところあつてホフマン氏の媒介によりウキーン市役所の大廣間で盛大なる華燭の典擧げられたとはさて〳〵お芽出度い限りでござる。この結婚や驚く勿れ金壹圓八拾錢フラットなり。

式典がすむと早速手に手をとつて新婚旅行と云ふ運び、今日はベニス、明日はパリーと蜜の様な生活が續けられた。

やがて日本へ歸るべき日が來た新郎は一足先へ出立し新婦はそれより數ケ月遲れてこの九月二十日に來朝せられた。

新郎は云ふ「僕がウキーンを立つ時向ふの習慣では接吻するのだが日本人になつたのだから公衆の面前でキツスはまかりならぬと云ひふくめておいたので、それをせなかつたが本當に可愛さうだつたよ」とは人を馬鹿にした話。

京都の御本邸では嫁が來ると云ふので新しく家を造るやらバツスやベツド忽ち洋式にすると云ふ大騒ぎ、この有樣を見た友人の一人「君西洋人をワイフにもつと何かに困ることもあるだらう」「いやこらまたこれでよろし」ワ、ハツ、、、。



女性中心の建築及び環境に就て

平田春江

前號で、わたしは甚だ抽象的では御座いましたが、我が國現狀の建築界が何かしら本當に國民性といふものに立脚してゐないことを申述て置きました。尤もこれは全然アマチュアの觀察で御座いまして、專門家の方々とはその意見の相違あることは今更申すまでも御座いませんが、しかしその時に素人の瞳に映じた事柄が如何ばかり役立つことがあるかは、往々他の場合に於て聞くことで御座います。

で、本號ではそのわたくしのアマチュア觀を更らに圖々しくおし擴げて、少しく內面的に所感を申上てみたいと思ひます。

で、まづ第一に指を屈するのは臺所で御座います。これはこれまでにも殆ど大方の人々によりて論議されつくして來たところであり、また近代建築法では洋風を取り入れて今ではまつたく昔日の感はなくなつたのは均しく知るところでありまして、寔に結構なことで御座りますが、しかもなほかういふことをどの程度まで加味されてゐるかは興味ある研究だと存じます。

それは外でもありません。如何にも洋風建築法の發達につれ、また一面衛生的思想の發達につれて、從來の建築法に比較すれば、その周到なる注意は一見して克く解るところでありますが、更らにいま一步進んで、家庭がどの程度まで女性中心主義で建築されてゐるか、といふ問題であります。この謂ふところの女性中心としての家庭、こゝにわたしの申上たい點がある で御座います。

如何にも今日の建築では昔日に比較して、殆ど隔世の感のあることは前述の通りで御座いますが、しかし何と云つてもその建築に際しては家長である男性を中心として、若くはあまりにも實務的であることが、延ては女性といふものが建築上、まつたく忘れられ勝ちである場合が多いことを遺憾に存じてゐるので御座います。たとへば、なるほど茶室や離れを建て得る程度の家庭にありては洗面場や浴室 或ひは化粧部屋といふものも忘れないのですが、それ以下の、所謂中產階

級以下の家庭にありては、その建築にありては何と云つても今日はまだ！、男性本位に營まれてゐると思ふので御座います。なるほどみやびやかな趣味の發露としての床の間に一幅の山水畵をかけることを忘れないのは、國民性として、これを捨てよといふのではありません。しかしその大多數がその建築の當初に於て、床の間をつくることを忘れなかつたに反し、半歲すぎても一年過ぎても同じ一幅の石版刷りをかけてゐたり、その下には造花の色もあせた一枝が投げ出されてゐるにいたつては、何處に本當に趣味といふことが出來ませうしかもさうした家庭にあつては、それはさうした趣味にひたる餘裕を有つてゐないからだといふかも知れませんが、それなどはなせいま少しその當初に於て考察する必要がなかつたでせう。のみならず、さうした家庭にあつては、まつたく台所などといふものは一顧だに値されてゐません。驚くべき非衛生的であり、驚くべき非家庭的に營まれてゐます。それが特に關西でも大阪などの建築ではよく見受るところで御座います。かういふ點から觀ますと、たしかに洋風建築の方がより合理的であり、合法的であることは何人も首肯出來るところで御座います。

とは云ふものゝ、わたしは決して今日行はれてゐる洋風建築を以て日本人としてのわたしどもは決して滿足してゐるものではありません。古來營んで來た日本建築にも捨て難い趣きがあり、また洋風建築にも立派な長所はこれをみとめますが、いまお話したいのはさうした專門的なことではないので御座います。そしてわたしの申上たいのは、その和風であらうと洋風であらうとを問はず、前にも申した建築に際してどの程度まで女性といふものを考察中に加へてゐるかといふ一點で御座います。

殊にそれが現代のやうな急激な生活を營まねばならぬ時代にあつては、男子は都會であると山間僻陬であるとを問はずまづ大部分は對外的に生活せねばならぬ立場にあるものですから、家庭はよろしく女性を中心として經營されなければならぬものだと思ひます。勿論今日では所謂職業婦人なるものが年々その數を增加して行く趨勢にありますが、しかしこれとても全婦人としては九牛の一毛にも過ぎぬものであり、また結婚後に於ては何時までさうした生活に從事してゐることが出來ませう。巖ては母性としての本務を全ふせねばならぬ時代が來り、遂に完全に家庭の人となつたとき、子供のための世話として、また一家の主婦として、更らに女性そのものゝアプリオリに於ける素質として、その環境の齎らす必然の結果が、如何ばかり子弟敎育上にも及ぼすかを考へて見ねばならぬと存じます。さうした秋、わたしたちは、現今の建築が何と云つても男性本位に營まれてゐることを否まれないと同時に、かうした時代から女性中心主義の建築法にいたるまで眞の家庭生活はまだ相當の距離があるものと思はねばなりません。

眞に男性が男性としての本分を發揮して、その向ふところに活動なさしめんとするには、先づ本當に家庭内の些事を忘れしめねばなりません。同時に、女性をして眞に女性たらしめるにはその女性をして眞に生きるの道を講じてやらねばならぬ筈です。さうしたとき　現代の建築、殊に洋風建築はその點に於て餘程歩み寄りの觀はありますが、しかし本當に意

識的にどの程度までこれを表現してゐるでせうか？潜在意識として、乃至は傳統として、幾分舊來の日本建築などに比較して進歩的であり、實際的ではありますが、なほこの本來の性質の前に一考を要することがありはしないだらうかと思ふので御座います。

次には環境に就てであります。これは詳細を申上たらはてしが御座いませんから、極く簡單に申上ますが、これは如何なる人でも餘程大切なことだと思ひます。と云つて、一見直接生活とか住居といふものと關係がないばかりではなく、延ては建築といふものとは餘程間隔があるやうに思はれますがその實、實際は紙一枚の裏表のやうなものではないだらうかと思はれます。わたしは今更ら孟子の母の三遷を云はんとするのでは御座いませんが、昔は人々が衣食足つて禮節を知ると云つて、住宅のことはそれほどにも申してゐませんが、それが時代が下るにつれて今日ではどんな文明國でも健全な住宅なくては何の禮節も行はれてゐないといふやうになつたことを痛感いたします。小川市太郎氏は其著「住宅及土地問題」中に、「人間の爭ひの分量は我れ〳〵の占むる空間の分量と反比例すると。古來裏店に喧嘩が附き物であることを考へると或はさうかも知れぬ。穢苦しい豚小屋のやうな家の建込むだ路次裏に何處の國のものとも判らぬ大勢の家族が割據して子供が泣き叫ぶ、女房は口汚く罵りわめく、何の禮讓があらうか」と。（——同著四五頁裏店に喧嘩が附物中より——）殊にこの社會になると、夫婦と子供とが一つの部屋に寢る。甚しきに至つては、寢る蒲團までも共通である。そこで子供は覺へないでも可い事までも覺へる。しかも幾組かの家族が同じ家に雜居するやうな處では、互に心安くなるにつれて、その間に野合姦通の盛んに行はれのは自然の勢で、彼等の亂倫壞俗は殆ど口にするに忍びないものがある」とて、氏は詳細これに關する伯林地方裁判所であつた少年少女の刑事被告に就て記述されてゐるが、思ふにかういふことはその依つて來るところは環境が如何にその人となりの背景をなすものであるかを最も克く語つてゐるものだと思ひます。「大大阪」第二卷第七號誌中、村島歸之氏は「都會に蝕む不良兒團」に就て語つてゐられますが、これによるも大阪市内には大正十二年から十四年七月までに不良少年少女が三千餘人、それに無職無住の浮浪の少年千四百人あると云はれてゐます。そして彼等の唄ふ歌の一節を引用して「歸るに家はあるけれど、愛する人が待つじやなし」と云つて、惠まれざる家庭の子であること、愛の翼で抱擁してくれる親兄弟を持たず善導してくれる良き環境を持ち合さず、誘はるゝきゝに毒の花とは知らず、不良の群に投ずる樣をまざ〳〵と述べられてゐますが、わたしはこれを見てどんなに深く考へさせられたことで御座いましたらう。

キング、ジョウヂはかつて『國家の榮光は家庭より發す』と云ひ、『家庭生活が鞏固にして素朴純潔なる國は、國家は難攻不落』と云つてゐることは一體何を語るものでせうか。さうしてわたしたちは自己の身邊を省るとき、家庭生活——子弟敎育——過集生活の害等々、ルウソウの「都市は人生の墳墓なり」の言葉を考へさせられたとき、種々の問題が眼前に投げ出されてゐるやうに感じさせられます。

かくしてわたしは、再びわたしの論旨にもどつたとき、より内面的に考察して見ることの必要を感じさせられますが、いまはその時間を有しませんので、次號で更らに再說したいと思つてゐます。

朝日會館工事概要

一、建坪及び延坪　建坪二百五十九坪〇四九、延坪一千四百七十七坪五八

内譯

地下室二百五十九坪〇四九、一階二百五十九坪〇四九、二階二百五十四坪七七五、三階二百五十八坪一一三、四階二百九十七坪〇九二、五階百二十一坪二五三、六階一二十八坪二四九

二、建物の高　中央最高軒高一〇〇尺

三、外觀に就て　近世ドイツ式にて建物全體をめぐる單一でそして高雅な黒と金とのリズム其中に平調を破る大きなガラス面具全體の感じは會館の使命をそのまゝに表現せり

四、外部　玄關入口廻りテラコッタ（伊奈製）を使用し他の壁面は黒色人造石洗出し大きな額縁は京都秦山製金色タイルを使用軒蛇腹は金泊塗とす

五、構造の大様　柱、梁、トラスは鐵骨構造、床もは鐵筋コンクリート造屋根は鐵の上にハーリップコンクリート打とす

六、基礎　地盤線下十八尺掘下げ出中式「コンクリートパイル」打の上割栗石敷込コンクリート打とす

七、床仕上げ　鐵筋コンクリート床上に「モルタル」にて班直しの上、各階タイルヲはリノリューム敷とす

八、内部壁及天仕井上げ　地階　天井大連ドロマイド仕上げ、壁モルタル仕上げ

一階　玄關天井大連ドロマイド仕上げ壁洋光石張、其他の諸室は二階共何れも大連ドロマイド仕上とす

三階　天井大連ドロマイド壁の上キルクをふきつけ仕上げ腰壁日華石交り人造石洗出しとす

四階　廊下天井砂入りドロマイド塗り壁石交りドロマイド仕上とす、腰五尺通りタイル張仕上とす、觀覽席天井キルク及砂交り大通ドロマイド仕上げ壁新聞紙型張りの上ペンキ塗腰英國レキシン革張りとす

九、階段　各階鐵筋コンクリート製段板蹴込板共タイル張り人造石仕上げ手摺は鑄鐵製手摺鞿地製とす

一〇、窓及入口　外部窓、出入口何れも鐵製兩開一部廻轉付、玄關入口及び舞臺外部入口シヤッター取付とす

一一、電氣時計、電話電鈴、報鈴設備　電氣時計二階、四階エレベーター上部に設置す、電話各階各室、玄關切符賣場、四階廊下に公衆電話、電鈴は電氣室其他に、開幕報鈴は、三四階に取付けたり

一二、エレベーター　日本エレベーター製二基取付く

一三、避雷針　本館屋上に二基取付く

一四、電燈及動力設備　電力は大阪市電氣局より地中線により供給を受け四階變電所にて三〇KVA三臺の變壓器により二五〇〇ヴオルトより七〇五ヴオルトに變電一般及舞臺照明に使用す

一五、煖房設備　眞空式低壓蒸氣暖房裝置を用ひ直接暖房裝置とせり

四階　公演場

一、高さ其他に就て　天井高三十四尺舞臺高三尺五寸、小プロセニアス高二十一尺五寸、大同二十六尺五寸、舞臺間口六間、小舞臺奥行三間半、大同同五間、舞臺天井高三十四尺

二、坪數及收容人數に就て　四階百三十八坪九〇（坪數）、一千〇三一六人（收容人數）、五階百二十一坪二五三（坪數）、五百五十四人（收容人數）總計千五百九十名

三、内部様式に就て　埃及式、太く重々しき柱、左右高く舞踊と音樂を表はせし薄肉彫、ゆるやかな三色の光は物靜かさと落着きを見せてゐる

五、舞臺裝置　舞臺を使用し得る最大の範圍を取る、クツペルホリゾント葡萄棚、樂屋、映寫幕、電氣室、大道具室、講演者控室等を取る

六、舞臺照明及各席照明　山本電氣商會の施行にかゝり舞臺照明はボーダーライト五列を取付け得、尚ボーダーライトに替り得る一個五〇〇ワツト迄使用し得る反射器數十個を設け自由に適當なる箇所に吊下げるものとす、尚客席左右中二階、舞臺左右柱裏にスポットライト室を設け七十五アンペアのスポット六臺を使用せしめ共に38VC變燭機二臺に依り變燭せしむ、客席の照明は露出器具を避け中央明り取窓及左右天井樋より採光せしむ、大天井明り取窓一ケ所毎に一色五百ワツト電球二十四個を設置しギヤラリー明り取窓には二〇〇ワツト電球六個を設置し左右樋内部には四〇ワツト電球三〇〇個を設置せり、全部38VC用變壓機を用ひ照明度を自由に加減せしむ、尚全部三色に變色せしめ得る裝置をなし舞臺調色につれ觀覽席も適當なる配色をなさしむ

七、館内採光　活動寫眞用として15VCの直流電動發電機を常備す、會館周圍の雜音を防止する爲めと館内の氣分を表はすため天窓のみを取れり

八、音響　最も愼重に留意し音響の吸收、反響につき苦心せり、壁には紙型、腰は皮張り、天井はドロマイドキルク入としその完全を期せり。なほ紙型と革張との間には本社特製の亞鉛凸版張とせり

九、客席と舞臺との關係　客席床（三越家具部）に十分の勾配を附し觀者を十分に舞臺を見得る樣設備せり

一〇、非常時に於ける設備　昇降は二個のエレベーター、巾八尺の大階段二個をもつてしなほ非常及常時用として會堂より直接、街路に通ずる鐵骨、鐵筋コンクリート造大階段二組を設備せり

一一、暖房　換氣暖房裝置を採用し舊館三階の屋上に機械室を新設し空氣加熱器、空氣洗滌機、送風機等を設備し新鮮なる空氣を取入れて加熱しなほ塵埃を除くため空氣洗滌機によりて洗滌したる後これを會堂内に吹き出し室内の溫度を適當に保つと同時に衞生的な空氣狀態を持續し得る裝置とす

一二、冷房裝置　前記暖房裝置を夏季は冷房裝置を使用す、地下四〇〇尺の井戸より吸ひ揚げたる冷水をもつて空氣を冷却洗滌しこれを會館内に吹き出さしめ溫度を下げしむ

工程

一、工程　起工大正十四年三月二十五日、竣工大正十五年十月九日

二、主なる材料　鐵材（松尾）一千一百噸、セメント（小野田）九千四百樽、防水劑ロータス三、二〇〇封度、スチールサッシ一〇、〇〇〇平方尺、タイル六〇、〇〇〇枚、大連ドロマイド一、二〇〇袋、使用人數四萬五千九百九十五人

三、工事擔當者　設計　施工合名會社竹中工務店　設計主任　松下莊三郎　構造計算　青柳良世　現場主任　瀧邦一

酣秋の夜を罩めて
摩天閣上に展開された
近來罕なる大歡境

そは日本建築協會の秋季大會であつた

江村恒一

吉例の大會は、十月二十日の夜を以て、浪華殷賑の巻、新建の裝ひあでやかなる「灘萬」の五層樓上に開かれた。

五時半の集合といふに、來會者ははや定刻前より、受附子の前は引ッきりなく、來會者の襟に飾つた色取り々々の菊花の徽章も、季節がら裝飾電燈（サンデリヤ）の燦ゆき光りに榮へて、休憩室に當てられた「ホール」を立ち罩める紫煙とともに、はや當夜の大會氣分が渦巻いてゐた。

開宴までの待ち合ひの無聊を慰せんとて、五時半から、旭堂南陵の講談「義俠の仇討」といふのが始まつた。――「講談師見て來たような嘘を云ひ」と川柳子は悪まれ口を叩いてゐるが、その嘘々實々一上一下、張り扇のさきから叩き出す「義俠の仇討」、流石に名師匠南陵ならではと、新人の多い建築家だが、暫し講談に興を過した。

鰮て講談は果てた。誰もの拍手が起つた。と同時に、階上の大宴會場の一隅から、高島屋音樂隊の華やかな管絃樂の音が起つた。名師匠南陵の古典氣分を強か味つたあとのこの一轉換は、いかにも面白い取り合せであつた。

紅紫綠黄・絢爛の裝ひをもて飾つた宴會場を緩かに流るゝリズムは、熱踏轣音の巻を拔いて、百尺中空の窓外、折柄の星月夜、燦たる濃紺の空らを仰いで、この世のありさまとは思はれなかつた。

一と頻りフォークとナイフのきらめく影、かち合ふ音、灘萬お自慢の料理と氣の利いたサービスに、暫し歡宴は續けられ、その中を、管絃樂の音が、燦照（サンデリヤ）の光りを綯へてなごやかに絶へず流れた。

やがてデザートとなるや、日本建築協會片岡會頭は、臨場の拍子に迎へられつゝ徐ろに立つて左の如き意味の挨拶を述べられた。

「茲に、日本建築協會の秋季大會を開くに方り、斯く多數の御參會を得まして、互ひに胸襟を披き相語るの機會を得ますことは、御同慶の次第と存じます。實は本秋も何處か郊外に然るべき催しを致さんと存じましたが、徐り適當な方法も見當りませんので、本秋は斯く行き方をかへまして、委員諸氏の御盡力により、幸ひに斯の盛會を得ましたことと



片岡會頭の挨拶(中央に起立)

を欣幸とする次第でムいます。

顧みますれば、日本建築協會は大正六年三月を以て創立され、本年を以て茲に十年の星霜を經ました。この間に於て種々なる余餘曲折はありましたが、現在會員一千二百餘名を有して今日の發展を遂げたることは、畢竟會員各位の御協力によることゝ存じます。殊に、この機會に於て最も欣ばしき御報告を申上げたい事は、日本建築協會より過般當局へ社團法人組織の許可申請中でムいましたが、恰も斯の大會當日に於て其筋より許可指令の電報に接した事でムいます。どうぞ向後とも日本建築協會のため、尚ほ一段の御盡力をお希ひする次第でムいます云々。」

またも拍手は割れる許りに場を撼がした。次いで、來賓大阪毎日新聞社々長本山彦一氏は、拍手に迎へられ、來賓總代として左の意味の祝辭を述べられた。

「日本建築協會が過年堅實なる發展を遂げて、建築學會と相俟ち今や斯界に重要なる位地を認められてゐることは、寔に慶賀に禁へざる次第である。殊に、今夕の如き建築界の指導者たる各位が斯く多數集まられて斯る盛會を告げて居りますことは、一面に建築協會の充實性を語るものであつて、自分等も御招きに預つて、斯の盛會を共に祝き得ることを篤く御禮申上ぐる次第である。日本建築協會が從來各種の方面に貢献されて居ることは多々推稱すべきものがあり、殊に「建築と社會」といふ最も充實せる立派な雜誌を發行されて、名の如く、建築が從來特殊の存在性を有つて居るが如くに餘り普遍化若しくは民衆化されず——云ひ換ゆれば、生活の重要素であり、殊に都市計畫の如き市民共

同生活の福利問題を構成すべき建築については從來市民の理解が甚だ薄い憾みがあつたといふような斯ういふ方面に對して努力されてゐることは、私共の多とする處である。併し我國の建築界は今當に過渡期に在ると思はれるから、斯る時機に莅んで日本の建築界をよく誘導されて建築の社會化に益々御貢獻あるよう希望致すと同時に、日本建築協會の多々增々堅實なる御發展を祈る次第である云々。」

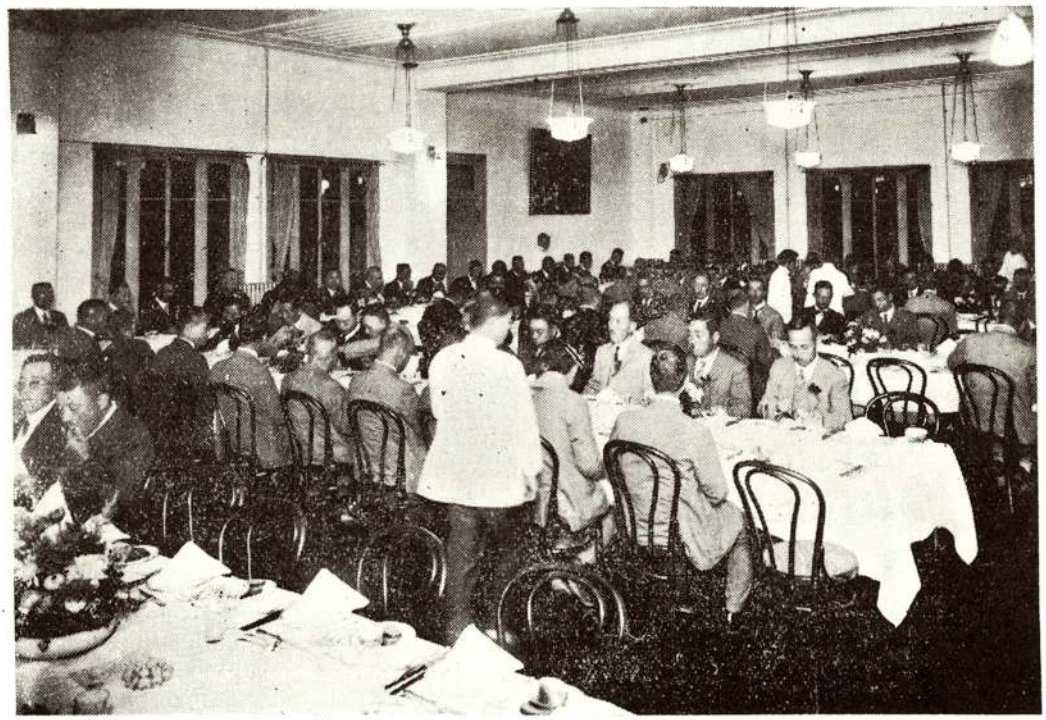
拍手の音は割れる許りに起した。突如、管絃樂の晴れやかな音はまたも會場を流れめぐつた。

やがて當夜の呼びものである笑劇「有限責任珍論百選會」の幕となつた。當大會の委員長であり、笑劇の舞臺監督である横濱勉氏は、態と勿體振つたユーモア氣味たつぷりの態度と口調で、先づ笑劇の筋書きを紹介された。

横濱　勉氏原作
阪口芳三郎氏脚色
笑劇　有限責任珍論百選會　一幕

舞臺監督　横濱　勉氏
演　出　阪口芳三郎氏
外十數名

時、　現代　秋の中頃の夜分
所、　賑やかな町の或る洋食屋の樓上
人物
會合の人　阪口芳三郎（一人一人について珍妙滑稽な紹介書きがあつたがちよつと憚るから省略）
池田　實
中尾　保
池田谷久吉



宴會場の一部

波江　悌夫
古宇田　實
其他大勢

踊り出すような賑やかな前奏、陽氣なる氣持ちにて幕開く。

舞臺一面　大宴會の模樣宜しく。

上手には會頭、副會頭、來賓など居列び、其他會合のもの大勢。

下手には、宴會の世話人らしき頭の禿げたる滑稽味ある男、立つて何かしきりに辯じ立てゐる。

（以上原文の儘）

紹介が終ると、忽ち場の一角から、チーン！、といふ鐘の音が響くとゝもに、音吐朗々と場を壓して、擬じつた「白骨の御文章」を讀み上げられた。誰かと見れば、道化頭巾を被つた如何にも和尙然たる阪口芳三郎氏であつた。

「夫れ建築の發達の相をつら〳〵觀ずるに、凡そはかなき者は建築家に賴まずして建てる人々なり、されば未だ之等の建物にして千歲をもちたるを聞かず、一軒建てるにも誰か百年の末を考へざるべけんや。

我やさき人におくれず今日とも云はず明日とも云は、おくれずさき立て建築家に賴まざれば朝には金殿玉樓も夕には燒野原となるなり。

すでに無常の震災來りたれば即ち二つの都も忽ちに燒け一つの港も潰ぬれば都は空しく變じて林立の裝を失ひぬるとき國民全體集りて嘆き悲しむと云へども其の効あるべからず。

さてしもあるべき事ならねばとて燒野に灰かきたれば唯燒瓦のみぞ殘れり　哀れと云ふも中々おろかなり。

されば、たれ人も早く今後の一大事を心にかけて、日本建築協會々員にふかく賴みまいらせて、設計監督願ふべきものなアーり。

あなかしこ。

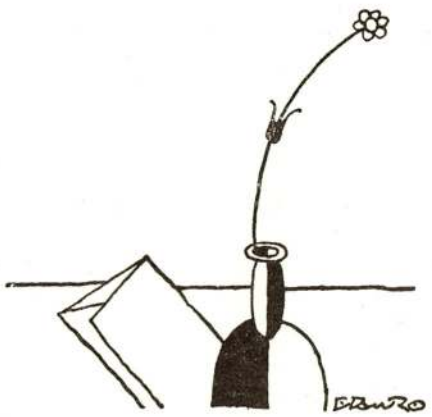
あなかしこ。』

各所に起る失笑と哄笑と拍手とは、滑稽にして眞面目くさつた朗讀振りを綾つた。

先づ、開幕第一、所謂大向を唸らせたのであつた。

それより、池田谷氏の「色彩演說？」、池田氏の態と田舍者口調の「おツ魂消演說？」波江悌夫氏が、能の橋掛りの態度よろしくあつて、本誌前號に同氏の江間式療法を書いた中に「京都大學での記事が全く間違つてゐる正誤」があつて、のちに、明皎々たる白刃で頰をこすつて安全な處の實驗を示されたのは、餘興の壓卷であつた。終りに、古宇田氏の「大會委員長刑罰演說？」に腹の皮を捻らしたのは、流石にお手のものであつた。斯くして、興は竭きず、ざよめきは衰へず、徂く秋の夜も、今夜いばかりは、我會のために暫し足を留めたかに思はれた。

されど、惜しくも、日本建築協會宗副會頭の音頭にて、日本建築協會の萬歲を三唱し、勇ましき管絃樂の音に、われも誰も祝慶し合ふて散會した。因に出席者百餘名、蓋し近來室に覩る盛會であつた。



俳壇

溪舟

秋雨の中を車や寺巡り　八鳥
秋雨や舟してわたる湖の島　東蓬
秋雨に灯りゐるなる野の小寺　岐路
沼べりの泥濘み道や秋の雨　孝則

稻

稻の穗に竿すれ〳〵や田舟やる　紫波
白壁に映ゆ陽の薄れ稻田風　同
稻雀飛んでボプラのさ搖れ哉　同
滿眸の旭に打伏して稻うるゝ　同
大稻田風晴れの空のちぎれ雲　稻村
堤にそれて草に沈みぬ稻雀　同
祭太鼓どこから響く稻田哉　八鳥
稻雀稻田に朝の日晴れたり　同
黃稻に群がり飛や日の蜻蛉　朧月
引板鳴子繁き綱手や稻うるゝ　同
低く高く夕日とんぼや稻靜か　光子
稻熟れて柿熟れて日和つゞき哉　秋雨
日の霜に群がりとぶや稻雀　汀舟
風の日の稻出うねりや大河內　栞辻

雜吟

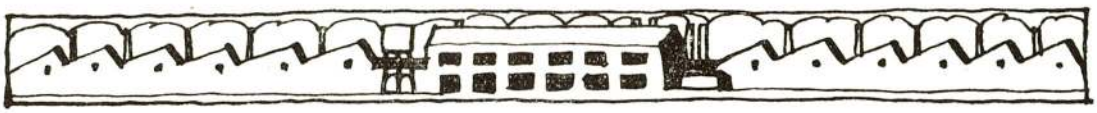
垣の菊影ゆるゝなり月に掃く　溪舟
柑橘の黃になる宿や菊晴るゝ　同
崖くづれの砂地の菊に風を傷む　同
茸狩や瀧寺の菊佗びて去る　同
茸狩るや松皮ずれの手のほてり　同
月將に茸山の松澄み暮るゝ　同

秋の雨

谷深く流るゝ靄や秋の雨　紫波
秋雨に垂れて水漬く纜ヒかな　同
あか汲めば田舟のゆれや秋の雨　同
秋雨や傘さして萩の井ゞを汲む　同
この庭に花乏しさや秋の雨　陋巷子
コスモスに冷たくふるや秋の雨　同
秋の雨桐に來しが在る星の影　同
他人の傘に電車まつ間や秋の雨　栞辻
神戶の客晴れを云ひしが秋の雨　同
秋の雨雛は雛舍に靜もりて　同
木の子りに蓑着てゆくや秋の雨　光子
秋の雨に蓑虫安き葉裏かな　同
讀み更ける灯寒くなりぬ秋の雨　同
秋雨に寒々ゆれて銀のすゝき　秋雨
新ラ障子暗しともなし秋の雨　同
秋雨や木槿垣添ひ傘さして　同
秋雨の芝生にぬれて竹床几　生々地
廢墟出て馬車に乘るなり秋の雨　同
秋雨の森に日暮の鴉かな　稻村
秋雨の底に灯るや谷の町　同
片明りの土間に研ぐなり秋の雨　樹次路
秋雨いつかあがりてゐるや塀ボプラ　同
秋の雨山門の楓染むるかと　朧月
秋霖や寫眞なき其人を思ふ　同
秋雨や腹冷え癖の畑仕事　蕩々
秋雨や土間の暗きに畑の物　同
門過ぐる花荷車や秋の雨　金城
柳ちる鋪裝道路や秋の雨　同
秋の雨垣根わびしき草紅葉　鴛兒
馬の背の荷覆桐油や秋の雨　同
秋の雨の中に黃淡し庭の花　鴻雨

次號課題

◇『霜』『秋日和』各五句まで別紙に認むる事
◇期日十一月二十二日・十二月誌上發表
◇屆先　大阪市中之島江商ビル六階日本建築協會



俳話 句談雜談

溪舟

◆私は此間ある處で「虫」五句を作つたが、その中で四句はぬけたが唯一つ「方丈記また讀めと鳴くや障子虫」だけが取のこされた、ところでこの五句の中では、私は自分の一番得意だつたのがこの「障子虫」であつた、ある一人が「障子虫」とはどんな虫だと私にきいた、しかし、私も障子虫といふ虫はまだ聞いたこともない名なので、どんな虫だとハッキリ答へる事ができないと答へた。

◆すると其人は、知ぬ虫を何うして詠んだとまたきく、私は、知ぬ虫だが、それは私の「主觀から生れた虫」で、折々障子へ來て鳴く虫なのだ、障子へ來て鳴く位ゐだから、こほろぎやきり〳〵すや、鈴虫松虫のやうな大きな蟲ではない、障子の紙へピン〳〵とささやかに響く位ゐの低い音である、それがまたいつものやうに障子にきて鳴いてゐる「方丈記をまた讀めよ」と催そくしてゐるやうに私には感じられた、斯ういふ意味なのだが、主觀から生れてくるものは兎角他人には分かれる場合が間々ある、しかし主觀は各人ともに尊いものである。

◆ある女の俳人が私に一句を示した、

湖青し菊植えてわらじなどをうる

といふのである、これは「湖青し」といふのと、菊の色彩とが照りはえて如何にも感じがいい、がしかし「湖青し」と「菊植えて」のつゞ目があまりにハナれてゐるのでいけない、詳しく云へば「湖青きほりの菊植えてある家」とでもふやうになくては完全でない、心持はいゝが形ちにおいて不完全であるから採れない。

◆そこでこの句は、句の中のドコかの言葉數をへらして「青し」と「菊植えて」の間に他の文字を挿入して、意味を明らかにする必要があるのだが、何うもウマくゆかない、己むをえないから「青し」と取りのけるとその女俳人が云つた。

◆なる程此句は、單に「菊植えてわらじなどをうる」丈けでも句になつてゐない事はない、がしかし「青し」がないと、平凡な句になる、何うも「青し」をとる事が惜しい、「湖」だけでは、それから受とれる感じは、灰色か、白か、淡青か銀鼠色かで、色彩印象がよほど弱くなる、「青し」と作家が云つたのは、自分の主觀を強く主張したもので、そこに動かぬ價値がある。

◆結局この句は、そのまゝになつてゐるが、要するに意餘つて言葉の足らぬ場合が多いのは遺憾な事である。

◆某氏の句に「稻妻や雲間に見ゆる峰の松」、稻妻がするたびに、峰の松の影が雲に浮いて見えるといふのである、その意味はすぐ分るが、しかし此句の字面では、峰の松が雲の間に包まれてでもゐて、稻光りの度に見えるやうに受とれる、或ひはモット極端に判斷すると、雲の間に松が生えてゐるやうにもきこえる、そこで私は「稻妻のほのめくたびや峰の松」と直しておいた、期うしておけば、「見える」とことわらなくとも、峰の松が見える、と受とれるであらう。

◆モウ一つ、「稻妻や障子にうつる木のゆらぎ」といふのがあつた、ちよつと働きのある面白い句だとも思つたが、よく考へると、瞬間の稻光りに、木のゆらぐ影などがさうハッきり分る筈もなし……と思つてすてた。

◆「稻妻に鳴やむ籠のきり〳〵す」といふのもあつたが、それを私は「簾透く稻妻や籠のきり〳〵す」とした、何うもきり〳〵すが稻光りに肝をつぶすといふやうな事はちよつと有りえない事で、それは恐らく作家の想像だけの話にと思つて「鳴やむ」を削つた、尙ほ原句のやうな場合でも、私は「鳴やむ籠ノ——」と棒を引くやうにいふのは文章の上で不賛成である、ヤハリ「鳴やむや籠の——」と「や」を切つてハッキリさせても損はゆくまいと思つた。

◆前號に一茶の事を書いたが、この頃はまた惟然の研究が頭をもたげてきてゐる。

◆惟然にも一茶に似た生活がある、しかし一茶は、ヒネクレて「死にともない、死にともない」とガン張つて活きたが、惟然は生死の境涯を超えて一生を放浪した、一茶は自分の痛し痒しに比べて、雀や虫けらにまで同情したが、惟然はすべての執着をハギ捨てることにかゝつてゐた、つまり執着をのがれ廻つてゐた形ちがある。

◆惟然が暫く住んでゐた美濃の關にある辨けい庵にいつてみると、

今日といふけふの花の此曝かさ

といふ句がのこつてゐる、句情はどこか一茶と相通じたさびしさ、親しさがある。

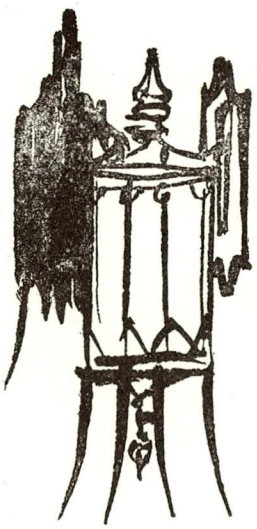
◆惟然が妻子をすて、放浪して、京都の俳本屋某方にゐたところへ、娘のおもとといふのが遙々さがして來た、惟然はそれを知ると、障子のハグレ紙に

雪たさの雪はらへども〳〵

といふ句を書いて、それを置き逃げにして裏口から逃けさつてしまつた。

◆惟然は斯ういふ風な俳道人であつた、彼れの研究は、彼の俳道生活の面白い一面を見る事ができると共に、また元祿俳風の一面を見ることができよう。

——(十月二十七日)——



附錄

市街地建築物法施行細則の改正に就いて（一）

津田敏雄

大正九年十二月一日に初て此施行細則が發布され、同十二年八月六日に多少改正せられたけれども、其後是と最も密接な關係に在る都市計畫の事業も漸次進行して、當時の計畫路線の工事も着々實施され、周圍部の區劃整理も大分捗り、地域の指定、防火地區の設定、隣接町村の合併等も行はれ、大阪市の土地の狀況が非常に變化して來た、從て此細則にも更に又變更を加へる必要を生じて、急に此改正を見るやうなことになつたのであるが、大體は地域に關する分と、建築線の條項が新しく加つたのと、空地の制限其他手續等の上に多少の變更を來したのである

所が現在此地域の制限に付て地方令で規定して居るのは大阪市だけであつて、各地とも地域の制限と云ふが如きものは從來全く經驗の無いことであるし、直に外國の例を引用すると云ふことも日本の國情として無理な點もあるから、もう少し經驗を有つた上で規定したいと云ふ希望であつたけれども、地域の制限と云ふことの性質から考へると地域の指定と同時に、地方令は之を規定しなければならぬ筈のものである、そこで前記池田課長の當時さう云ふ點を見越して當初の府令が規定されたのである、從て今日私共が考へて、更に附加へなければならぬと思ふものも隨分あるのであるが、事柄が他に及す利害關係が大きい爲に、大體の案はまだ別に有つて居るけれども、なか〳〵之を取纏めることが困難であるから、差當り現行府令の不十分な點のみ改正することになつたので、此改正は極めて消極的な意味のものである、以下其改正條項に付て少しく說明をしやうと思ふ。

第四條は施行令の第三條第六號地方長官に委任して居る事項に基いて規定したものであるが、其第二項第一號中「棉花」の次に「原綿（製綿ヲ含マス）」を加へ——「羽毛」の下に「（皮革、獸皮、羽毛ニ在リテハ精製シタルモノヲ除ク）」を入れ——「上屋」の次に本文の如き「但書」を加へ、同時に同項第二號に於ても本文の如き「但書」を加へたのである。

こゝで「棉花」と云ふのは種のある棉で、其種を落したのが「原綿」であり、更に進んで「製綿」と云ふことになるのであるが、初め此府令制定の際には唯「棉花」として原綿も含む意味に於て規定されたものゝやうであるけれども、別に此「原綿」と云ふものが明記されてないと、實際の取扱上疑義を生ずるが故に、今度是が加へられたのである、又「上屋」の次の但書及び第二號の但書の加へられたのは、現在河川運河等を利用して建てられた倉庫が隨分あるが、さう云ふ方面に於て穀類澱粉類、豆粕の如きものを貯藏し或は處理することを絕對に禁止すると云ふことになると、大阪の產業上少からぬ故障を生ずることになるから、或程度までは之を許容しなければ無理である、のみならず、別に倉庫等の取締規定もあつて、それ等のものを貯藏し、或は處理する所を鐵骨造か鐵筋コンクリート造、或は石造か煉瓦造と云ふことにすれば、消毒等のことも完全に行はれ、病菌の傳播を防ぐと云ふやうなことも十分に行はれるであらうし、さう云ふ構造にしたならば、必ずしも工業地域と限らなくても可いと云ふことが確められたので、

大阪の現在の事情を考慮して此改正を加へられたのであるが、此地域の制限に付ては前述の如く極めて消極的に行はれて居るのである。

次に「第五條ノ二」及び「第五條ノ三」と云ふのは從來何の規定も當府令に於ては無かつたのであるが、先に述べた通り、周圍部に於て大分區劃整理なども行はれ、建築線がさう云ふ方面に對して之を助成して行かなければならぬ使命も有つて居るし、又建築線自體に於て市街地建築物法全體の內容として地域制も相並んで十分其効果を擧げねばならぬ性質のものであるから、此際之を加へたのである。

又第五條第一項の前段は從來のそれと全然同樣であるが、更に其「但書」以下の運用の途を開いたのである、第二項從來の規定は實際の運用上不便なるが爲に之を改正したのである、即ち第二項に於ては、先づ幅員九尺未滿の道路にして行政廳の管理に屬するもの（是は大體に於て道路法に依る認定道路と見て可からう）に付ては道路幅の中心から各六尺距りたる所を以て建築線とすると云ふやうに、概括して指定してしまふたのであるが、元來此建築線なるものは法律の第七條を見ても明瞭の如く、道路と云ふものと全く別にしては考へることの出來ぬ性質のものである、從て茲に地方長官が斯の如く概括的に建築線を指定するにしても、無論道路と云ふものを考へて指定して居る譯である、即ち其道路は法律の第七條及び第二十六條に基き其最小限度を押へ、幅員九尺の道路が出來上るものとして、更に此五條の一項に基き、其九尺の道路から一尺五寸づゝ退き、結局道路の中央より六尺の所を以て建築線とすると云ふ風に指定して居る、無論此場合に於ては九尺の道路を前提として居るのであるが、其建築線たるや九尺の道路から一尺五寸後退した所と考へるのであるから、其部分は當然建築敷地として考へて差支ないものと思ふ、所が是は行政官廳の管理に屬するものと限つて居るのであるが、其以外の私道のやうなものであつても、其私道の狀況——卽ち其周圍の狀況なり其地區の狀況、或は其道路に依る建築敷地の狀況なり、其道路の效用の狀況等を考へて、是は行政官廳の管理に屬する道路に準ずべき性質のものであると云ふ認定が付いた場合には、豫め告示をして、先の行政官廳の管理に屬する道路と同じく其中心から六尺距りたる所を以て建築線とすると云ふことになるのである、而して此兩者を通じて「但シ必要ト認ムルトキハ別ニ指定スルコトアルヘシ」と云ふ但書があるが、此「別ニ」と云ふのは卽ち「道路ノ中心線ヨリ各六尺距リタル線」と云ふ事柄に對することであつて、例へば道路の一方に川があり、或は崖があると云ふやうな場合に、其道路の中心から測ると云ふことになると、前述の如く九尺の道路を前提として云へば、其九尺の逢路は出來ぬことになる、仍ちさう云ふ場合には、一方だけ九尺測つて、更に一尺五寸後退した所を以て建築線とすると云ふ風にしなければならぬ、其他道路の「うねり」を直したり、或は敷地を整理する爲に屈曲を直すとか、種々手を加へなければならぬやうな場合には一概に中心線から測ると云ふ譯に行かない、或場合には偏らなければならぬ所もあるから、其場合の運用が利くやうに茲に此但書が附けてあるのである。

尙ほ第三項に「前各項但書ノ建築線ハ之ヲ告示ス」とあつて、第一項の「但シ必要ト認ムルトキハ別ニ後退シテ指定スルコトアルヘシ」——第二項の「但シ必要ト認ムルトキハ別ニ指定スルコトアルヘシ」と云ふ是等の建築線は矢張り之を別に告示することになつて居る、蓋し其他の中心線より正しく測られるものに付ては全部に亘つて前二項の規定を以て建築線が指定せられたるものと考へて可い譯である。

第五條の二は、第五條は府令を以て指定して居るのであるが、更に又地方長官が指定する側の規定である、蓋し土地所有者、或は借地權者、或は又土地區劃整理組合と云ふやうな方面に於て、或土地に對して建築敷地の造成をしたいと云ふやうなことから、それを助成する目的を以て建築線の指定を受けたいと云ふ場合がある、さう云ふ場合に地方長官が進んで其處に建築線を指定すると云ふことは不可能であるけれども、土地所有者とか借地權者、或は又土地區劃整理組合などが自から建築線を指定して貰ひたいと云ふことの申請を爲すことが出來る途を茲に新しく開いたのである。

五條の三は、法律の第十條に「行政官廳ハ市街ノ體載上必要ト認ムルトキハ建築線ニ面シテ建築スル建築物ハ壁面ノ位置ヲ指定スルコトヲ得」と云ふ風に規定せられて居るのに基いて、新に加へられたもので、「市街ノ體載上必要ト認メ特ニ指定スル道路ニ面シテ建築スル建築物ノ主要壁面ハ之ヲ建築線ニ平行セシムヘシ――」となつて居るが近來都市計畫の進行と共に道路の開鑿或は擴築も着々行はれ、其道路に接して居る所の建築敷地を切込んで行く結果、洋服の羅紗地の裁屑のやうなものが殘つて、其處へ建築する建築物が木造の日本建築のやうな種類のものであると、其敷地の恰好に捉はれて、前面の壁體が道路と平行し得ないやうな場合が頻々と起つて來た、而もそれでは折角新しく出來た街路の體裁が非常に惡いから、是はどうしても其道路に對して餘り凹凸や傾斜などが出來ないやうに、建築線を基準として、それに壁面を平行さすやうに建築させなければならぬと云ふので、此條文を加へたのである、所が此指定はもう少し際どく行きたいのであつたが、それは別に告示の形式に依り、或は其他の方法に依て、建物の性質や用途、又其街路の狀況に鑑み、其壁面の全部又は一部に對して別に其位置を指定すると云ふやうな餘裕を茲に置いてあるのである

次に第六條の二であるが、是は勅令の第十一條に、「行政官廳ハ命令ヲ以テ特ニ道路ヲ指定シテ之ニ面スル建築物ノ高サノ最低限度ヲ定ムルコトヲ得」とあるに基いたもので、卽ち市内の中樞に在る道路は概ね商業街路として、さう云ふ街路に沿ふて居る所の敷地は他の場所に比して地價なども非常に高いのであるが、其處に木造の二階建のやうなものが出來ると云ふことになれば、折角大きな道路を開きながら其土地の利用が十分に行はれぬことになつて、都市としては非常な不經濟であるから、大阪で云へば、將に開かれんとする二十四間道路とか其他の重要な道路に接して居る土地の利用を成べく增進させたいと云ふ趣意に出て居るのである、無論此事は土地所有者の側から考へて當然努められなければならぬことであるし、諸外國の實例から見て、特に斯う云ふ規定を設ける必要もない筈であるが、我國の實狀は案外我々の豫期に反して、相當高價の土地であるに拘らず、其上に低い建物を建てゝ濟して居る者が多い、而もさう云ふ路線は多くは商業地域であるから、其處に唯面積の廣い低い建物が散漫に建つと云ふことは所謂商業地域の利便と云ふ上から云つても面白くないので、相當に建物の高さを高くして、其利便を進めるやうに仕向けて行きたいと云ふ考から、さう云ふ道路に接する所の敷地に建つ建物の高さの最低限度を規定した譯である、卽ち先づ道路を甲乙丙の三種に分類して、之に面する建物の高さは、甲種道路にあつては軒高四十五尺、乙種道路に於ては三十六尺、丙種道路に於ては二十七尺を最低限度として、必ずそれより低い建物を建てゝは可かぬと云ふことにしたのである、所が此規定は大體前述のやうな趣意に於て出來て居るのであるが、之を其敷地全體に及すと云ふことになると、場合に依て、奥行の深い敷地などには實際建築不能と云ふやうな事柄も起つて、却て此趣意に反する結果を生ずる嫌ひがあるから、但書に於て之を建築線より三十六尺（六間）までの間に限り、それより後の部分は隨意にして可いと云ふことになつて居るのである。

第二項は其軒高の測り方を規定したもので、是は說明するまでもなく、讀めば解ることだらうと思ふ。

第三項は、第一項の如く一般的に規定して置いても、實際には止むを得ず其規定に準ずることの出來ぬ場合もあらう、仍ち地盤の强度が其最低限度に應ずるだけの建物を載せるべく不適當だと云ふやうな場合、其他色々止むを得ない事情のあつた場合には必ずしも之に依らなくても可いと云ふことにしたのである、又一面前述の如く街路の體裁上其主要な建物に對して第一項の規定をしたのであるけれども、附屬の部分にして萬止むを得ざるものは是亦許可を受けて除外され得るやうになつて居る。

そこで話は前に戻つて、道路を甲種、乙種、丙種の三つに分けて居るのであるが、何れの道路が甲種になり、何れの道路が乙種、丙種になるかと云ふことは後に告示するのであつて、何々路線は何種とする

さか、或は其路線の中でも、何々路線の中何番地先から何番地先に至る間と云ふ風に別に之を告示することになつて居る、即ち其告示を見るまでは、前述の如き條項はあつても、事實指定がないと云ふことになるのである。

第七條は、勅令の第十四條の空地の制限中、但し行政官廳は特に指定したる角地其他の地區に於ける建築物に付ては、空地の制限は必ずしも本文に規定せられたるものに從はなくとも可い、場合に依れば、全く空地が無くても可いと云ふやうな規定があるので、其地區なり角地に對する規定であるが、改正の要點は從來と少しく其の立前を變へたので、從來は主として建築敷地として考へられて居つたのを、今度はさうでなく、角地に當る所の或大きさの地區、其他の地區に於ても敷地と云ふのではなく、敷地を包含する或廣さの地區を指定することにしたのである、其角地其他の地區と云ふのを、

第一號に、「道路幅員三間以上其和十二間以上ノ又ハ道路ノ交叉角三十度以下ノ角地ニシテ各前面道路ノ境界線ヨリ之ト相隣レル道路ノ幅員ノ一倍二分ノ一以内ニシテ且八十尺以内ノ部分但シ建築線カ道路境界線ト一致セサル場合ニ於テハ建築線ヲ以テ道路境界線ト看做ス」

とあつて、大體に於て角地なり其他の地區と云ふものは、其道路の廣さに依て其地區の大きさと云ふものは變るべき性質のものであるし、又如何に角地であると云つても、ズツと小さい九尺なら九尺の道路の角地に在るものにも同じやうにやつて行くと云ふことは、勅令第十四條の規定の本來の趣旨に反する譯であるから、其道路の幅員に依て其廣さを異にするやうな制限にしたのである、且其恩典を蒙むる道路の角地であつても、一方の道路が少くとも三間以上の廣さを有つて居つて、其兩方の道路の廣さの和が十二間以上なければならぬと云ふことにしたのであるが、其地區の測り方はどうなるかと云ふと、矢張り道路に依て其廣さが異なる譯であるが、AとBとの二つの道路に接して居る所の角地とする場合、Aの道路からの奥行は、Aの道路の幅の一倍二分の一で、Bの道路からの奥行は、Aの道路の幅の一倍二分の一まで、出來て居る所の區劃でなければならぬ、而してAなりBなりの道路が非常に大きかつたならば、從て其一倍二分の一も非常に大きなものになるのであるが、併しそれは如何に大きくなつても八十尺を限度として居る、而もそれは普通の角地の場合であるが、小さい道路で、其道路の交叉して居る角度が三十度以下の角地（一例であるが）にあつては、普通の角地の制限でやつて行くと云ふことは無理であるし、斯う云ふ方面は又更に緩く考へなければならぬと云ふので、さう云ふ地區に對しては勅令第十四條の前段の規定に拘らず、建築をしても可いと云ふことにしたのである。

此但書以下の事柄は建築線が道路境界線と一致せざる場合の規定であつて、其場合には先に道路境界線を以て測ると云つたのは、建築線を以て測ることになるのである。

第二號は、所謂「其他ノ地區」に該當するもので、是亦道路の幅員に依て其地區の大きさが規定せられることになる、即ち道路の幅員は最小限度三間とし、それ以上にして、其二つの幅員の和が十二間以上の道路の間に挟まれて居る所の地區で、其地區の幅は一方の道路境界線から他の道路境界線までの間の距離が二つの道路の幅員の和の二分の一以内であつて、六十尺以内のものであつたならば、其地區全體に付て其間に在る敷地の恰好はどうでも可いし、又數は幾らあつても可いそれ等に付ては矢張り勅令第十四條の前段の規定に拘らず建築することが出來るやうにしたのである。而して此場合に於ても建築線が道路境界線より後退して居る時には其後退したる建築線を以て道路境界線と看做して、道路の幅員を測ることになるのである。

第三號は、先の一號も二號も二つの道路に接して居る地區に付てであるが、公園、廣場、河、海の類に接する地區、又は其他のものでも前各號に準ずべき地區は矢張り一號なり二號なりの規定を準用することになつて居る。

第八條は內務省令の第十二條に於て便所、畜舍などから排出する汚

物は地方長官が指定する下水道にあらざれば、之を放流すべからず、と云ふことになつて居るから、其地方長官の指定は當然此府令に入れなければならぬのであるが、それを更にごう云ふ方法を以て周知さすことにするかと云へば、之を告示を以てすると云ふことに定めたのである。

第十條は、前に「學校、教會堂、公會堂、集會場、寄宿舍、合宿所「デパートメントストア」並病院、工場其ノ他警察取締ヲ受クル用途ニ供スル建築物」と云ふ風に規定して居つたのを、「用途ニ依リ危險ナリト認メ當廳ノ告示シタル建築物――」と云ふ風に一括してしまつたのであるが、是はごう云ふ譯であるかと云ふと、「其ノ他警察取締ヲ受クヘキ用途ニ供スル建築物」と云ふのが大概分つて居る筈であつて實際の運用上是が解釋に付て色々な疑問が起るので、之を全部明瞭に網羅することにして、而もそれは非常に多數に上るが故に、之を告示に俟つと云ふことにし、同時に

大阪府告示第三八五號

大正九年十二月大阪府令第九十四號市街地建築物法施行細則第十條ノ規定ニ依リ建築物左ノ通定ム

大正十五年十月一日　　大阪府知事　中川望

學校、教會所、公會堂、集會場、貸事務所、百貨店、常設展覽會場、勸商場、貸店舖、病院、工場、劇場、活動寫眞舘、演藝場、寄席、觀物場、遊技場、旅舘、寄宿舍、合宿所、下宿屋、簡易宿、浴場、料理屋、飲食店、芝居茶屋、貸席、貸座敷、待合茶屋

と云ふ風に告示したのである、其中貸店舖と云ふ中には廉價場のやうなものも含み、又簡易宿と云ふのは從來の木賃宿の如きものであると見て可いと思ふ。（續く）

本誌定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	七拾五錢	貳錢
	十二冊	九圓	貳拾四錢

大正十五年十月三十日印刷
大正十五年十一月一日發行
（毎月壹回一日發行）

發行兼編輯人　大阪市東淀川區中津町一九八番地　江村恒一
發行兼印刷人　大阪市東區內淡路町二丁目卅一番地
印刷所　大阪活版所
發行所　大阪市北區中之島二丁目二十五番地江商ビルヂング　社團法人　日本建築協會
電話北四二九一番　振替口座大阪三九九七五

特約販賣店　大阪市西區京町堀羽子板橋北　柳々堂書店　電話（土佐堀四四〇番）　振替口座二二〇八四番

日本建築協會會報

會報

一、社團法人設立許可の件
當協會は御承知の通社團法人組織に可致昨年十月内務省へ設立許可の申請を致しました處今回別項會告の通許可となりましたから御了承を願ます

一、建築職工教化講習會開催の件
今回大阪市、建築業協會及本協會聯合主催を以て建築職工教化の爲混凝土施工法に關する實際的業務上最も適切なる智能の修得及能率增進等に付左記要項に依り講習會を開催し講師として波江悌夫氏、井上新二氏、八木幸次郎氏下浦光衛氏に御苦勞を願ふことになりました

要項

一、科目　混凝土施工法
二、講習會場　久寶小學校（東區北久寶寺町三丁目但シ市電南久太郎町停留所西南へ三丁）
三、期間　十一月八日より十三日迄六日間
四、應募資格　建築業協會員の選出せるもの
五、講習料　不要
六、申込期間　十一月二日まで
七、講師及講習科目並時間割（略）

會合

○教化委員會

△日時　九月十七日午後五時——六時
△會場　大湖食堂
△出席者　委員長　古宇田實
委員　井上新二　酒井勇三郎　宮本長治　波江悌夫
△記事　一、例年擧行さるゝ大阪市、建築業協會及本協會の三者聯合の講習會開催に付理事會の決議として小川理事より口頭附託ありしを以て大体に付左の事項を協議し尚次回の委員會を俟つて協定することに決す
1 コンクリート工の講習會開催を適當とすること
2 右講習會に就ては小山視學と打合せ適當に進捗する樣波江委員、酒井委員に依頼す

一、建築法規に關する講習會に就ては尚詳細具成行を調査することを井上委員に依頼す

一、本委員會の幹事を二名とし現幹事澁谷五郎氏の外に酒井勇三郎氏に幹事を依頼し承諾を得たり

○實費精算施工調査委員會

△日時　九月廿五日午後五時——九時
△會場　本協會會議室
△出席者　委員　德政金吾、岡田宗一、吉井長七、野呂長四郎、小守彌一、久留弘文、平塚鎗吉、檜和田金八
役員　小川理事
△記事　一、小川理事は理事長代理として一場の挨拶をなし殊に會員外の委員に對し御苦勞を深謝の旨を述ぶ

一、德政委員より本委員會設置の起因に付質問ありて小川理事及平塚委員より交々説明をなし了解せらる

一、同委員の發議により一同賛成の上本委員會の希望として建築學會主催四學協會聯合實費精算調査委員會本協會委員の三氏（渡邊節氏、安井武雄氏、瀬戸文吾氏）を便宜上委員に依囑することを理事會に要求することに決定

一、次に小川理事より委員長及幹事の互選を促したるも右三委員の本會委員となる迄保留のことに決す

一、尚本會の開催度數其他は委員長決定迄保留し夫れ迄に材料（契約書等）蒐集に努力することを約し實費精算に關する意見の交換をなし散會せり

○秋季大會委員會

△日時　九月二十七日午後五時——九時三十分
△會場　本協會會議室
△出席者　委員　德政金吾、橫濱勉、中島智喜、阪口芳三郎、樋口辰太郎
役員　園部理事長
△記事　一、園部理事長より本年秋季大會擧行に付御盡力を願ふ謝辭を述べ同大會の趣旨其他理事會の意見を説明して一場の挨拶をなす

一、夫れより委員長の互選を行ひ左の通決定
委員長　橫濱　勉氏

一、橫濱委員長座長席に着き簡單なる挨拶ありて直に協議に入り左の各事項に付協議決定す
1、大會の主旨　2、擧行地　3、期日　4、會場　5、招待者　6、開會時間　7、餘興　8、一人當經費　9、會費　10、演説速記　11、寫眞撮影　12、役割
一、次に次回委員會日取を十月上旬頃とし散會

○教化委員會

△日時　九月廿八日午後五時——九時
△會場　本協會會議室
△出席者　委員長　古宇田實
委員　井上新二、波江悌夫、

△記　事

一、古宇田委員長より大阪市建築業協會及本協會聯合主催の建築職工教化講習會開催に關し今回大阪市より申越ありたる趣を以て理事會は本件を當委員會に附託ありたりとて該文書を朗讀し異議なく承諾のことに決す

一、是に於て先づ本協會として原案を定めて建築業協會と打合せて進捗せしめたしとて協議に入る

但し打合期日は建築業協會に於ては來る十月四日(月)都合よろしく委員として五名出席の由なるを以て打合期日を同日午後五時と決定

一、次に打合せの爲左の委員に出席を依頼す

波江委員、酒井委員、井上委員、西谷書記

一、本講習會に關する原案左の通決定

1題目　鐵筋コンクリート工事に關する諸問題

A、豆板の防止方法

B、假枠に關する問題

C、鐵筋の檢査、加工組立等に關する諸問題

D、其他（例へば地震の話）

2尙左の事項の原案協定

A、講習期間　B、講師の人員　C、講師の候補者　D、經費

○秋季大會委員會

△日　時　十月一日午後五時——七時

△會　場　本協會會議室

△出席者　委員長　横濱勉

委　員　德政金吾、中島智喜、阪口芳三郎、樋口辰太郎

役　員　和田理事

△記　事

一、横濱委員長より前回委員會に於て決定したる會場の野村ビル中央亭は樋口委員交渉したる處會場として使用出來ざる事情の爲變更の止むなきことゝなりたる旨を述へ協議に入り左の通り決定

1會　場　灘萬食堂

2音樂隊　餘興として高島屋音樂隊を傭入るゝこと

3其他通知案內文等に付決定

4次回委員會を十月十八日灘萬に於て開催のこと

○建築職工教化講習會打合會

△日　時　十月四日午後五時——九時

△會　場　大江ビルヂング第九號室

△出席者

大阪市役所側

小山視學　江見傳作

建築業協會關西支部側

池田組、橋本組、大林組、竹中工務店、錢高組、高倉茂

日本建築協會側

井上新二、酒井勇三郎、波江悌夫、西谷節

一、左記事項に付協議し大體に於て前回講習會の例に倣ひ兩協會の分擔を定めたり

1、經費　2、科目　3、會場　4、期間　5、應募資格　6、申込期間　7、講師及講習科目並時間割　8、開閉會式の挨拶　9、講師及委員の會合に付て

一、右協議決定の後夕食を共にして散會

一、散會後本協會委員のみ大洋軒食堂に於て講師及時間割等に付協議せり

○建築士法案調査委員會

△日　時　十月七日午後五時——九時

△會　場　本協會會議室

△出席者　委員　池田實、石本喜久治、德政金吾、小川安一郎、津田敏雄、野呂長四郎、山脇友三郎

△協議事項

一、石本幹事より前回委員會の經過に付說明あり尙引續き同幹事より前回委員會の質疑及話題の中左記事項は自分が提出者なる故を以て其理由を述べんとて說明あり

1建築士（登錄濟）の設計届出主義を執り認可主義を執らぬこと

2建築士以外のもの丶建築許可は認可主義によること

3建築士の資格の限定を必要とすべきこと

一、右に對し困難なる理由の下に大に論究する所あり結局兎に角建築士（登錄濟）には或る點迄は認むる必要あることを結論せり

一、次に建築士法案制定の方針に付意見の交換ありて散會せり

一、次回協議事項を左の通決定せり

1建築士の資格及職務

2建築士の權利及義務

醫師法と辯護士法とを對比して建築士法案作製に關する件

○混凝土施工法講習會講師打合會

△日　時　十月八日午後六時——八時

△會　場　大湖食堂
△出席者　講師　波江悌夫、八木幸次郎
下浦光衛
委員　姫野武
△記　事　一、波江委員より講習に付て建築業協會と打合せたる結果及混凝土施工法講習會の趣旨に付説明をなし協議の上別紙（別紙略）の通時間割を作成したり
尚講習會開期中教化委員の出席日割を決定
一、各講習員に講習項目を印刷の上配付することに決し各講師に於て之れを作り來る十月下旬尚打合會を再開するに付夫れ迄に準備することに決し散會

○理事會

△日　時　十月八日定例理事會
△會　場　本協會會議室
△出席者　園部理事長、和田理事、須川理事、古塚理事、光安理事、池田谷理事、八木理事
横濱秋季大會委員長、波江教化委員
△報　告　一、九月分會計報告
一、横濱委員長より秋季大會委員會經過報告承認
一、波江委員より教化委員會經過報告あり混凝土施工法講習會聯合開催の件承認
△議　事　一、左の諸件に付協議決定せり
1 實費精算式施工調査委員會
委員增員の件
2 終身賛助員中名義變更に關する件
3 神戸高等工業學校記念展覽會開催に付周知に關する件
4 大阪府市街地建築物法施行細則中改正に付改正細則を會員賛助員へ配付の件
5 新名簿調製に付所在不明者に關する件
6 大阪市、建築業協會及本協會聯合主催講習會開閉會式に理事者臨席に關する件
7 會員の會議室使用に關する件
8 會誌表紙圖案審査員依囑の件
9 會員銓衡

○構造計算調査委員會

△日　時　十月九日午後六時——七時三十分
△會　場　本協會會議室
△出席者　委員長　堀田清
委　員　今林彦太郎、鹽路惣吉
△記　事　一、出席者少數の爲研究するに至らず意見の交換をなし散會せり

○秋季大會委員會

△日　時　十月十八日正午——二時三十分
△會　場　灘萬食堂四階
△出席者　委員長　横濱　勉
委　員　德政金吾、中尾保、中島智喜、松本儀八、阪口芳三郎、樋口辰太郎
△記　事　一、横濱委員長より左の諸件に付報告あり
1 柳下實氏委員辭退申出の件
2 回答出席人員數の件
3 其他諸準備に關し報告
一、次に尚左の諸件に付打合せをなす
1 委員役員及職員の當日出席時刻
2 會場係、接待係、餘興係の分擔
一、夫れより宴會場及休憩室受付室に付て實地檢分をなし散會せり

○秋季大會

△日　時　十月二十日（水）午後五時三十分——九時
△會　場　灘萬食堂五階
△出席者
一、名譽賛助員　岩田成實　山口房五郎　本山彦一　杉本又三郎
一、會員　伊藤正文　飯出賢次　岩尾保衛　池田實　伊藤幸太郎、入江千壽　橋本舜介　林田瀧次郎　橋本政吉　錦織喜代次　別府尚逸　朝永國次郎　小笠原錡　岡本新二郎　奥村伊次郎　和田信　若宮虎吉　渡邊珍久　片岡長參　河村新川村爾藏　呼子正　吉田清　高橋榮治　田中寛造　多田谷民藏　多田藤雄　高田理平　高野又助　高木登　竹内雄三　田中龜太郎　竹中藤右衛門　波江悌夫　中谷榮藏　村井季四郎　上田辰三　植村佐則　野呂長四郎　能村知二　野村一郎　埴田實　久保田小三郎　黒澤研　山脇友三郎　矢木英夫　山中茂一　山本潔　山口半兵衛　山本直　山添繁藏　八尾常治郎　增本榮六　松岡綾江　前田武正　松下由藏　增田直一　前内文二郎　藤井庄作　藤村武　藤田友太郎　小林悉　小西一夏　古宇田實　小寺彌一　兒玉廣太郎　小山源次郎　駒井喜兵衛　小谷豐吉　安藤組大阪支店　安部萬助　管岡美代吉　佐藤彰美　宮本長治　三木來三　設樂貞雄　設樂貞三　清水榮二　下浦光衛　白川雄一　鈴木興五郎　菅谷元治　置塘章　大澤幸平　平島末吉　文雄、和田貞治郎、小川安二郎、須川

廉太郎、古塚正治、光安楫之助
池田谷久吉、八木幸次郎、酒井勇三郎
一、委員 横濱勉、德政金吾、中尾保、松本儀八、阪口芳三郎、樋口辰太郎

△記事

一、集合時間午後五時三十分の迫るに從ひ、來會者續々と引續き四階の休憩室に案内され餘興の旭堂南陵講談「義俠の仇討」を聽きつゝ開宴の時刻を待つ

一、定刻講談の終るを俟つて一同宴會場に案内され着席（此間高島屋音樂隊行進曲奏樂）直に開宴をなし宴酣にして片岡會頭立つて一場の挨拶に併せて當協會の申請中たりし社團法人設立の許可が本日付指令となりし内報に接したる旨報告あり名譽賛助員本山彦一氏は來賓を代表して祝辭を述べらる

一、次いで笑劇有限責任珍論百選會一幕の餘興あり橫濱勉氏舞臺監督の下に阪口氏外三氏の珍無類徹底的脫線の「テーブルスピーチ」に一同を大に笑はせ高島屋音樂隊奏樂と共に興を添へたり

一、是に於て一同立つて祝盃を擧げ宗副會頭發聲の下に本協會の萬歳を三唱し本協會の隆盛發展を祝福し各自歡を盡し和氣藹々の裡に散會す

一、本夕は近年稀なる大盛宴にして無事大會を終りしは當協會の最も欣幸とする所にして大會委員諸氏の御盡力を多謝するものなり

○新入會者

會員

多田 藤雄君 北區曾根崎上四ノ三五
田建築事務所
尾藤英太郎君 西成區西皿池八三六
青山 清君 此花區茨園町一六六
特別賛助員
山本 信藏君 東區高麗橋四ノ一〇島貿易株式會社
普通賛助員
林 健雄君 熊本市彌生町一七二八
入江 千壽君 神戸市平野下祇園町二三
一入江建材社

○退會者

會員

藤野 師樓君 佐々木昌雄君
地方會員
松永 次松君
普通賛助員
茂君 松井 英一君
守谷

○轉勤轉居

會員

野村 理一君 住吉區天王寺町一四四二
中西 六郎君 西區長堀南通四ノ一三辰馬方
時田泰三郎君 港區夕凪町二ノ一〇ノ一號
藤野 師樓君 兵庫縣武庫郡六甲村小學校新築建築場
上谷 利夫君 西區京町堀通上一彌生ビル二階池田谷建築事務所
池田谷久吉君 兵庫縣武庫郡精道村打出字久保二
龍村知二君 兵庫縣武庫郡精道村芦屋字櫻深
阪口芳三郎君 北區北梅田町二五
青木 茂雄君 地方會員
三木 來三君 北區曾根崎新地三ノ一三
石井 宏彌君 池田組 東京市小石川區大塚窪町一一酒井工務店
平松 英彦君 東京府豐多摩郡澁谷川町田端三三八
葛西 萬司君 東京府北豊島郡澁谷川町中野二七五
普通賛助員
城塚 元喬君 廣島市猿樂町五八清水組大阪支店廣島出張所
佐竹已之輔君 東京府荏原郡世田ヶ谷町代田大原一三一八
鈴木 定吉君 港區船町農林省農務局經理課建築部大阪出張所
小崎 春記君 東京市外中野高圓寺四〇四
高木 盛三君 此花區上福島南二ノ二二七
駒井 艮三君 東京市役所市塲建設課
本島 正男君 千葉市西院内鐵道宮舍一〇
古市辨之助君 住吉區天王寺町大阪市民病院二階二〇二
高田 太郎君 神奈川縣鶴見東濱住宅地三九五
西田 榮一君 横濱市澁頭町上江一四八
七尾憲太郎君 和歌山市玉藻町二ノ七
谷山 恒夫君 此花區玉川町九八北岡組
大槻 貞夫君 新潟市新潟電氣火力發電所建築塲大林組出張所
別府尚逸君 北區相生町三五
野口 修二君 府下豊能郡豊中村新屋敷近藤方
田島長二郎君 東京府荏原郡洞田町糀谷二四五

○建築事務所開設

會員

池田谷久吉君 池田谷建築事務所西區京町通堀上一彌生ビル二階

○渡歐米

特別賛助員 角尾 篤彦君
會員 小田島兵吉君
地方會員 鈴木 甫君

會員 中西 六郎君

角尾君は三越吳服店より室内裝飾研究の爲十月十六日、小田島、鈴木兩君は大林組より建築界視察の爲十月二十八日、中西君は建築界視察研究の爲同日孰れも橫濱港出帆歐米へ渡航されました。

役員及職員

會頭 片岡安
副會頭 宗 兵藏
理事長理事園部 文雄
主記理事 和田貞治郎
同 理事 小川安一郎
主計理事 澁谷 五郎
同 理事 須川廉太郎
編輯理事 古塚 正治
同 理事 光安楫之助
同 理事 池田谷久吉
同 理事 八木幸次郎
同 理事 酒井勇三郎

編輯係
江村 恒一
蔦田夏治郎
庶務係
西谷 節
靈取陽
會計係
大和 榮衛
山口 スエ

名譽賛助員	六九
特別賛助員	二九
會員（地方）	一九四
終身賛助員	五三
普通賛助員	四七一
合計（十月二十日現在）	一二二二

●第九集　第一一号　掲載広告一覧（掲載順）

タイガー計算器製作所
東京建鉄大阪支店
日本エレベーター製造
大野正営業所
浅野スレート
日本石綿盤製造
日本ペイント製造
高島屋呉服店
日本化学産業
東洋コルク工業
伊丹商店
カール・ツアイス
佐治タイル
島貿易
南満鉱業
浅野物産
浅海商店
ベニス工房
米本商店
田村商会
東亜鉄工所
大平工業所

油脂化工社
原田商会
日本セメント防水剤製造所
KENSEI SHOKAI
玲光社
鈴鹿工務所
小寺計器製作所
平岡襖紙店
岡本好文園
木下謹三商店
日本洋瓦大阪出張所
西孫商店
河村青写真調製所
桐田商会
阿部鉄工所
日本工剤
岡田建築材料店
日本建築紙工
島田硝子製造所
日本スレート販売大阪支店
中村グラニット商会
山中商会

山田大理石製作所
矢橋大理石商店
政正
特許エレベーター製作所
大阪ビトロライト工事
三菱造船神戸造船所
シーベル・ヘグナー商会
トーペー、アンド、ダート、ペイント会社
佐久間建材工業所
渡辺久雄商店
穴原商会大阪支店
森川組
宮田鉄工所
大福海上火災保険
三井物産
小野田セメント製造
永柳商店
伊奈製陶
HANKEN SEISAKUSYO
萩原煖房工務所
出浦建築事務所
橋本建築事務所
大阪建築相談所
池田建築事務所

小笠原建築事務所
岡部建築事務所
大阪建築所
和田建築事務所
葛野建築事務所
横河工務所
片岡建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
野村一郎事務所
国枝工務所
安井武雄建築事務所
柳下建築事務所
増田清建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
設楽建築事務所
遠藤於菟
遠藤、南建築事務所
西原衛生工業所大阪支店
大阪窯業
池田勘蔵
大倉土木大阪出張所
大林組

大阪橋本組
亀谷開作
竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯組
野村組
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組
藤木工務店
三光組
岡本工務店
鴻池組
有山組
駒井喜商店
安藤組大阪出張所
辰巳吉之助
森本建築社
清水組大阪支店
銭高組
木村工務所
徳政工務店

大阪耐火リノリウム工業
須賀商会
須賀商店
栄進社
新田ベニヤ製造所
山本窯業
田中昌司商店
常盤貿易商会
日米建築資料社
松尾鉄骨橋梁
大阪鉄扉製作所
河田組工業所
デゥエット商会
東洋リノリューム
田中源太郎商店
建築金物商会